シェルブリット Ⅱ

ABRAXAS

幾原邦彦 永野護

角川文庫 17189

SchellBullet

KUNIHIKU IKUHARA × MAMORU NAGANO

II ABRAXAS

OUTLINE

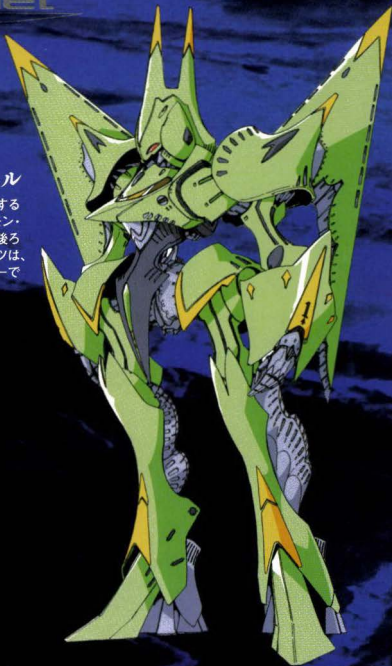
遥かな未来。異星の文明に触れた人類は進化し、分化した。遺伝子を変え、姿を変えた人類。3つの「種」にはっきり区分される人類。そしてさらなる「発展」を遂げようとする人類。
第一の人類種・ジーンライナー。生き、考える宇宙船。最速の船、最速の人類。存在としての人類。自分の意志で動く組織。
第二の人類種・ジーンメジャー。遺伝子デザインにより効率化された、頭脳と容姿。その進化には、はたして限界はあるのか。
第三の人類種・ジーンマイナー。進化しない種。プロトタイプ。
主人公オルス・ブレイクは突然変異を起こしたジーンマイナー。
宇宙の果てにあるものは？　そして人類の進化の行く末は!?

シェル（ノーマ機）

ローヌ・バルトに搭載されているシェルの一機。ドライバは、ノーマ・クイック。ベテランのシェルドライバであるノーマにカスタマイズされた高性能機

ノーマ・クイック
ジーンメジャーのシェルドライバ（パイロット）。ジェンダー傾向は、女性++。25歳。ローヌ・バルトに乗務の、バルトカーゴサービス契約社員。オルスの先輩にして、秘密を握る者。絶対的服従を迫り、オルスを叱責し、かつ導いていく
デルビー・アイバース
ジーンライナー船ローヌ・バルトに搭乗しているジーンメジャー。19歳。ローヌのC群火器管制官。オルス・ブレイクにとって同年代の先輩であり、ごく貴重な、あるいは、唯一とも言える友人である
オルス・ブレイク
この物語の主人公。ジーンメジャーと身分を詐称しローヌ・バルトに乗り込んだ、遺伝子特異体のジーンマイナー。19歳。半強制的に危険な任務＝シェルドライバに任命される

Schell:Bullet
ピナ・シェル
ローヌのライバル船であるベルタ・ギースに所属するシェル。比較的小型で恐ろしく機動力に優れる。ピナ・パワーズが搭乗している
ピナ・パワーズ
ベルタ・ギースに所属するジーンメジャー。23歳。女性++。シェルドライバ。元海軍長距離侵攻戦闘団攻撃型潜水空母のエースパイロット。本能に近い攻撃能力の高さを誇る。戦い方は非常に冷酷。「皆殺しのピナ」
ジーンメジャーの男
謎の人物。外見や服装からジーンメジャー、しかも比較的高い地位にあることははっきりとわかる。ベルタの関係者と推測されている
エマルディン・ホール
内務省外務二課勤務のジーンマイナー。20歳。特異体ではないがマイナーとして非常に能力が高い。父親は外務二課課長

Schell Bullet
レイモン・シェル
ベルタ・ギースに属するシェルの１機。レイモン・フレイが搭乗。肩の後ろにそびえる翼状パーツは、実はロケットモーターで可動式
レイモン・フレイ
ベルタ・ギースに所属するジーンメジャー。28歳。男性++。元陸軍士官で精鋭パイロット。比較的ベテランの、シェルドライバ。かつて軍時代にノーマ・クイックと「深い仲」にあったようであるが、詳細や経緯はほとんど不明

シェルブリット II

ABRAXAS

幾原邦彦 永野 護

角川文庫 17189

CONTENTS

9

インターミッション

Intermission

父が食卓につきヴィデオグラム*のスイッチを入れた。
いつものようにオルスと父親の視線は交わることがない。
昨日の夜に起きた事故と事件が報道されている。
オルスは朝食を口に運びながらそれを眺める。
悲惨、そして歓喜が交互にスクリーンの上に展開している。
オルスは頭の中で、悲惨と歓喜の現場に身を置いてみる。オルスは汚職を告発され、世界でいちばんタフな男になり、新人賞を受賞して経済的成功を収め、戦死する。
戦死…。
食卓には死の影はなく、朝の光を装ったライティングが並べられた皿を照らしている。
光は暖かく、ジーンマイナー*の女性アナウンサーの声は柔らかい。
父がニュースについての感想を述べ、オルスは適当な返事を返した。
オルスの妻が寝間着のまま、食卓に現われる。
寝乱れた髪と魅力的な身体のライン。
父は最低限の節度のある挨拶（あいさつ）を送る。
妻は返事のかわりにあくびをした。

母はそれを見て顔を背ける。
女たちは仲が悪い。
オルスは目覚めた。ベッドの下で。

壁に固定されたベッドの下は狭く薄暗い。
オルスは床の上に脱ぎ捨てられた靴を眺めた後、もう一度、夢の続きに戻ろうとして目を閉じた。*ローヌ・バルトはベッドの下を覗(のぞ)きこめるかもしれないが、オルスの夢を見ることはできないはずだ。
しかし、目を閉じてももう眠れないことはすぐにわかってしまった。
オルスは目を開き、床の上のがらくたを眺めた後、手を伸ばして*樹脂製の鏡を手に取った。手の中の鏡の角度を調整して壁に埋めこまれた時計を見る。
*反対廻(まわ)りのアナログ時計は当直時間三十分前を指している。
いつも当直時間前に自然に目が覚める。オルスはこの前の*航路索敵(シエルブリット)まで、このことを特に不自然だとは感じていなかった。
だが。
——あの船の中で秘密を作ろうなどと考えるな。ローヌはお前のトイレの様子までチェックしてるぞ

ノーマの言葉を聞いて今まで自分がいかに不注意だったかを思い知らされた。当直時間の前に自然と目が覚めていたのもローヌが起こしてくれていたのだ。方法はわからないが……。

オルスは自分の身体が怒りの匂いを発しているのに気付く。

昨日は簡易食堂(デリカ)から持ち出したスープを壁と床の上に盛大にぶちまけて、スープの海の上で鞄(かばん)を逆さに振ってから眠ったはずなのに、床の上はシミひとつ残っていない。床に散乱している服や小物も綺麗(きれい)になっている。

オルスが眠っている間にローヌが掃除してくれたのだ。

オルスは床の上に散乱しているものを見るのをやめて、ベッドの端に手をかけ、身体をベッドの下から引きずり出した。この個室に入ってから一度も掃除したことがないのにベッドの下は清潔で身体には塵(ちり)ひとつついていない。

水槽の中の小動物のように管理されていることに、強い不快感を感じると同時に安心感もある……。これが、オルスに言いようのない苛立(いらだ)ちを感じさせる原因だった。

なぜ、あんな夢を見たのだろうか。

あのまま両親と共に故郷、*ヴィシー自治区で暮らしていたら、自分の未来はああだったのだろうか。だとしたら、さっき見た夢は本来の自分が望んでいた未来の「幸福の風景」だとでもいうのか。自分はライナー船に乗ってしまったことを後悔しているのだろうか。

いや、オルスにはわかっていた。さっき見ていた夢は、望んでいた「幸福の風景」とい

うより、微細な不協和音が見えかくれする「日常の地獄」なのだと。
絶えず何者かに管理された日常。*遺伝子特異体ということで管理された日常。不出来な息子ということで管理された日常。若年ということで管理された日常。経済力がないということで管理された日常。
管理されることは「地獄」だ。そして、その「地獄」が何の疑問もなく「日常」になったとき、オルスの中の何かがギリギリと不協和音を立てた。
そう、ああした光景が日常である世界から逃げ出して、オルスは今ここにいるのだ。
これまでオルスの怒りの対象は、常にあの「日常」だった。そこから抜け出すためのイメージが「*勝利者（ジーンメジャー）」だった。
今、オルスは*ジーンメジャーだ。たとえそれが「ニセモノ」であろうが、紛れもなく、あの日常から脱出したのは事実だ。
しかしオルスは、あの「日常の地獄」があったからこそ「勝利者」などという子供っぽい概念をイメージできていたことを今更ながら思い知った。
怒りの対象がなければ、オルスは「勝利者」を、「自分の未来」をイメージすることとすらできないのだ。
オルスはナイフを壁に突き立てた。もちろん壁には傷ひとつ付かない。ローヌ・バルトは何の反応もなく黙ってオルスを見ていた。
——いっそ、宇宙船と喧嘩（けんか）でもしてみるか

オルスには、ローヌ・バルトがジーンライナー*という人間種だと実感できたことは一度もなかった。
子供っぽい感情の爆発だとは自分でも思う。だが、どうにも制御できない。あの日常の地獄は、今またここに存在しているからだ。ローヌ・バルトという名で…。
オルスは自己破壊さえも夢見た。この部屋で自殺すると何が起こるだろうか…、と。
――ローヌは不潔な死体を掃除して部屋を清潔に保つだろう…
この無力感とじんわり絞め上げるような不快感は、オルスの神経を苛立たせる。
両親は、教師たちは、級友たちは、あの管理された故郷での暮らしに苛立ちを感じているようには見えなかった。しかし、今のオルスにはそれがなぜだかよくわかる。
彼らは、自ら望んで「水槽の中の小動物」として管理されていたのだということが。
それは「毛布」なのだろう、とオルスは思う。あの街ではすべての住人に、幸運、幸福、清潔さ、という暖かい毛布を配給しているのだ。
だがオルスは、他者から配給される幸運、幸福、清潔さ、といったものに漠然とした苛立ちを感じる。
やはり、ここでも他の誰かに支配され、管理されてしまっていることに苛立ちを感じる。
この状態をどうすればよいのか、オルスにはわからなかった。
オルスは演ずるべき日常の仮面の下にすべてをしまい込むことにする。
《メジャー》オルス・ブレイク。最速の武装*クリッパー、ローヌ・バルトのシェル**乗組員（ドライバ）。

エリートコースを約束された若きジーンメジャー。
だが、同時に、ノーマに言われたように自分は「ニセモノ」の「ウジ虫」のジーンマイナーでもある。
オルスはそうしたすべてを顎(あご)に薄く生えた髭(ひげ)と一緒に剃(そ)り落とし、忘れようと努力した。
あるいは、今の自分を抑圧するすべてを思い巡らせてみた。メジャーを…「勝利者」を自らにイメージして。
いずれにせよ、オルスはこの部屋の外に出るまでには将来を嘱望されたジーンメジャーになりきらなければならないのだ…。

ローヌ・バルトは予定通り*ポート・ヴィアネイに入港していた。
宙軍泊地*アウターヴィアネイを侵し、ローヌ・バルトの進路を妨害しようとした*ギースシッピング社の目論見(もくろみ)は失敗し、宙軍艦艇の戦闘介入という予想外の結果を招くことになり、衛星軌道上の大商業港ポート・ヴィアネイは異様な緊張感に包まれていた。
*ベルタ・ギースとローヌ・バルト、そのどちらかのシェルに宙軍*フリゲート艦が攻撃されたことによるものだ。
もっとも、ポート・ヴィアネイ自体の封鎖は既に解かれ、衛星港周辺に展開していた宙軍の小艦艇は逆にアウターヴィアネイ側に「退避」し、逃走してきたベルタ・ギースも二機のシェルを回収して何の障害もなく入港していた。

ポート・ヴィアネイは衛星軌道上の多数のドック、ステーション、小型コロニーや地上連絡施設の総称である。こうした施設の大部分はジーンライナー系企業が出資して建設されたものであり、恒星間貿易の一大中心となっている。

宙軍のポート・ヴィアネイ封鎖が解かれたのは政府と軍上層部がジーンライナーとの正面衝突を恐れた結果だった。

——宙軍泊地からジーンライナーを追い払うために砲撃するのはかまわん

——だが、ジーンライナーに反撃するのはいかん！

——何を犠牲にしても「戦闘」の事実を作るな！

旗艦パンジャブ*がヴィアネイの宙軍本部にフリゲート艦被弾の連絡を入れた後、この宙域は狂ったように飛び交う暗号通信の嵐となった。

相手を一方的に砲撃するのはよくて、相手の攻撃から身を守るために反撃するのはまずいというのは妙な論理にもみえるが、前者が警察的な行動なのに対して、反撃が軍事行動の領域になるという解釈でみると理にかなう。

このため、被弾したフリゲート艦マーリガンは他の艦艇による救助を禁止され、自力で戦闘領域から離脱しなければならなかったし、ベルタ・ギースに対して威嚇（いかく）射撃をしていた戦列艦*パンジャブは、ベルタがまだアウターヴィアネイ内にいたにもかかわらず、無事にシェルを収容させるために砲撃を中止しなければならなかった。

宙軍艦隊司令フォークト提督はベルタ・ギースの追撃、拿捕（だほ）を主張したが、危険が大き

すぎるとして、上級司令部に容れられなかった。この段階でフォークト提督は上級司令部と政府の対応もジーンライナー側のシナリオに含まれている可能性に気付いたがすべては手遅れだった。
　こうして、ベルタ・ギースはアウターヴィアネイを抜け、「退避」する宙軍艦艇の間を通ってポート・ヴィアネイに入った。

　ローヌ・バルトの船長パースウォーデン、ベルタ・ギースの船長ティプタフトは入港の翌日、ヴィアネイの宙間審理会議に召喚され、惑星ヴィアネイの地表に上陸した。
　衛星軌道からの連絡エレベータから降り立ったパースウォーデンは、久しぶりに見る天井のない風景に眩暈を感じた。
　自分を守ってくれるはずの隔壁がなく、どこまでも空気に満たされた世界。ヴィアネイの自然はよく保護され、宙港地上施設の周囲は果てしなく広がる美しい農地だった。
　このロケーションは旅行者に解放感を印象づけるためにセッティングされたものだった。しかし、パースウォーデンは単に移動のために宇宙を使う旅行者ではなかった。
　彼は解放感や美しさを感じることなく、ある種の怖れに追い立てられるようにして地下の鉄道ターミナルへと急いだ。
　パースウォーデンはポート・ヴィアネイ入港直後に現地のバルトライナー社調査部から、宙軍フリゲート艦がシェルに攻撃されたらしい、との情報を得ていた。

今回もうまく切り抜けてみせたと思っていたパースウォーデンは驚き、慌てた。今回の航路索敵では宙域走査（スキャン）が宙軍の電子戦で妨害されていたため、調査部に知らされるまで船長はこのことを知らなかったのである。バルトに帰還した二人のシェルドライバの報告（レポート）にもフリゲート艦被弾の記述はなかった。

ただ、宙軍側はそのシェルが、バルトライナー、ギースシッピングのどちらの機体であるか識別できていないらしい。フリゲート艦が攻撃を受けた時間が記録されていないので、*軌道マップ記録と照らし合わせてどちら側の機体であるのか判断することも難しい。また、宙域走査（スキャン）障害のために高速で移動する小型のシェルは追尾できておらず、客観的、物理的な証拠がなかった。

パースウォーデンは上陸前にノーマ・クイックとオルス・ブレイクを呼んで事情を聞いたのだが、二人とも攻撃の事実はないと答えていた。

——面倒なことになったな……

明確な証拠がない以上、相手側と責任の押しつけあいになることが予想されたし、バルトライナー社も明言はしないものの、パースウォーデンが「上手（うま）く立ち回る」ことを期待しているはずであった。

たとえ、事実がどうであれ……。

地下鉄道のコンパートメントで随行のボディガードと向かいあったパースウォーデンは上手く立ち回るためにはバルトライナー社のことを忘れるべきではないのか、と考え始め

ていた。
宙軍の減速勧告に従おうとした船長決定を、管制ブロック*の強制封鎖という強行手段で否認してみせたローヌ・バルト、いやジーンライナーという種族に対する不信感は今回の事件でより強くなっていた。
それでパースウォーデンは会社のためではなく、自分自身のために上手く立ち回ることを考え始めたのだ。
——もし仮に……
ある陣営との個人的コネクションをほんの少しだけ「強化」してみたら……。世界最速クリッパーの船長。そのカードが最も有効なのは今かもしれない…。
——これは背任ではない。システムの奴隷じゃないことを証明するだけだ
退屈な列車内でパースウォーデンは様々なシナリオを組み立て、もてあそんで楽しんだ。この時点で、彼が上手く立ち回るためのシナリオが人知れず用意されていたことも知らずに…。
「高機動シミュレーションはほぼ満点だ。あと、自分のどこが悪いか、わかってるだろうな」
「高速度域での姿勢制御で、反応に遅れがある」
オルスの答え方にノーマは満足した。

何の疑念やためらいもないしっかりした口調だった。オルスはよく自分のことを理解している。あとは単に練度の問題だ。
ポート・ヴィアネイに入港してから三日後には乗員の上陸制限が解除されていたが、オルスは自発的に、シェルのシミュレータ訓練に打ち込んでいた。アウターヴィアネイでの航路索敵(シェルブリット)以降、ノーマの目から見てもかなり真剣に取り組んでいる様子が窺(うかが)える。子供のように反発してくることもなくなり、シミュレータの成績を評価してほしいと自分から話しかけてきて、ノーマを驚かせた。
オルスの熱意はシミュレータの成績にもはっきりと表われていた。ノーマはオルスの前で唾(つば)を吐くのを止めざるを得なかった。見違えるような技能の向上は越えるべき壁を自分で見つけた人間特有のものである。
一度、死線を越えた兵士が獲得する独特の落ち着きをオルスも身につけたのだ、とノーマは考えていた。
──だが、……かなりバテ気味になっているな
汗まみれでシミュレータモード*のシェルから降りてくるオルスを見ながらノーマは思った。
──探究に夢中で自分の身体のことなど眼中にない……
これはノーマにも経験があった。シミュレータ訓練を終えると凄(すさ)まじい達成感と生まれ変わったような感覚に満たされる。越えるべきものに近付きつつあることの歓喜。

この感覚の前では、肉体的限界、時間の流れ、常識的であることなどが無意味に感じられてしまう……。

そう、重要なことはここにはない。

オルスはもう気付き始めているのかもしれない。

森羅万象の事物に命名し整理してきた人類が名前をつけ忘れた「それ」の存在。

オルスは「それ」の存在に気が付くであろう人間のようにノーマには思えた。

ノーマが漠然と「それ」に気付いたのはいつのことだったのか、記憶にはない。

少なくとも学生の頃には、データライブラリや学問や美術作品の中に「それ」を求めて探究を始めていた。しかし、すべては徒労だった。

唯一、混乱*の時代に失われてしまった古典音楽の断片の中にヒントを見つけられそうに思えたことがあった。だが、どの断片も演奏時間が二十秒もなく実際に何かを見つけることはできなかった(「それ」は時間的持続とは関係ないはずではあるが)。

失われた楽奏を夢見てうすら馬鹿のように過ごすのはノーマの趣味ではなかったので、古典音楽の美しい断片はすぐに見捨てた。

宗教や神秘思想のいかがわしさと俗っぽさ(「それ」が俗っぽくないわけではないが)には頭痛がしたし、時折かいま見える真髄の思想部分は数学であったりポルノグラフィであったりアート*の世界であったりした。

ひょっとしてガロア*やカントールの脳髄には「それ」についての知識が蓄えられていた

のではないかとも想像されたが、当時の脳はすべて土に還っている。
学生のノーマは探索をあきらめ、軍人のノーマは「それ」について忘れ始めていた。
そして、ノーマはシェルに出会って「それ」について思い出した。
ノーマは探究を再開した。
探究の具体的方法、探究すべき対象「それ」については依然、謎のまま…。
質問―探究は進んでいるのか？
答え―わからない。
五里霧中で、手探りで、見たことのない、実体のないものを捜しているのだ。
まさに狂人の仕業。
オルス・ブレイクという男を雇いたいとローヌ・バルトに相談された時、ノーマはローヌが狂ったのではないかと考えた。まさに狂人の仕業だ。
だが、それゆえに最終的にはオルスをシェルドライバにすることに賛成したのだ。
ノーマは自分に残された時間を考えたのである。残り時間はそうないだろう。
自分は探究に夢中になり、世俗を忘れて時間を使いすぎ、引き際を見失ってしまった。
包囲殲滅戦の防衛陣地内にノーマはいる。
ノーマの探究は失敗に終わるだろう。
これは冷静な自己評価だと思う。
ノーマはかつての同僚レイモン・フレイがまだシェルドライバの職を捜していると知っ

た時、声をあげて笑ってしまった。哀れなロートルドライバ、レイモン。
おそらくレイモンも「それ」を探究しているのだろう。
そして、レイモンも失敗するだろう。
後になって、真面目なレイモン・フレイのことを考えたノーマは、狭苦しい個室の隅に顔を押しつけて少し泣いた。
自己憐憫（れんびん）を嫌悪するノーマには珍しいことだった。
オルス・ブレイクが「それ」を見つけることができるのかどうかはわからないままだ。
世の中にはわからないままになってしまうことがたくさんある。
そして、たぶん、ノーマには死ぬまでわからないままだろう。

ポート・ヴィアネイ入港後八日経っても船長は政府の宙間審理会議の査問から解放されていなかった。
予定されていた荷の積み下ろしはとうの昔に完了し、出港予定から既に三日が過ぎ去ってしまっている。
万一の場合に備え、惑星上陸を差し止められている航海士たちの噂話では、審理終了は早くても三週間後ではないかという予想がもっぱらであった。
意外なことに宙軍関係者がまったく会議に参加していないのも話題となった。はっきりとした情報ではないが、フリゲート艦マーリガンや航路索敵（シェルブリット）といった単語を巧妙に避ける

ようにして審理が続いているらしい。

またそれとは別に、ジーンライナー船砲撃を命じた宙軍艦隊司令フォークト提督の周辺がかなり慌ただしいことになっていると、地元ヴィデオグラムのニュースでは報じられていた。影響力のある人物であると同時に様々な利権絡みでの敵が多く、宙軍内にも反提督派が存在する。砲撃の当否がきっかけとなり、フォークト個人の小スキャンダルが次々と暴かれるようになっていた。

政府の内務省庁舎から出てきたところをニュースキャスターにつかまった私服のフォークト提督は、

「私個人が思想的にどうだこうだ言われているようだが、私はそんなたいしたもんじゃない。自分が道具だという自覚があるからね。君らも思想性などという存在しないものを相手にするより、組織（システム）のメカニズムでも研究してみたらどうだね」

と答え、若い航海士たちのウケをとった。

そのニュース放映の二週間後には、反ジーンライナー派と呼ばれていたフォークトはバルトライナー社の顧問に納まっていた。

入港から十日後、オルスは上陸許可をとってノーマとヴィアネイに降りた。

自発的に上陸したわけではなかった。

オルスが訓練のためにオルゴンボックス*に入ると二人分の上陸許可証を持ったノーマがオルスを待っていた、というわけだった。
実際にはオルスはどこにも出かけたくなかったし、誰にも会いたくなかった。ただ、自ら課したシミュレータ訓練の目標だけを見ていたかったのだ。
それに…、ノーマのお供というのもぞっとしなかった。
「……行くぞ」
上陸パスを手渡したノーマの言葉は簡潔だった。
「これは……、仕事ですか」
例によって有無を言わさぬノーマの強引さに対して出た言葉だった。口にしてみて少しばかり後悔したのだが…。
ノーマは答えなかった。ただ、微動もせずオルスを見つめた。
ダークブルーの髪はゆらぎもせず、呼吸もしていないようにみえる…。
この視線には屈するしかなかった。
オルスはノーマの後ろを歩きながら、自分とノーマの関係について考える。
ノーマは上司や上官ではない。先輩であることは確かだが職掌(しょくしょう)としては同僚なのだ。ジーンマイナーとジーンメジャーといったありがちな社会的階級意識もまったく感じなかった。
経歴詐称の上でジーンライナー船に乗り込んだことを知られてはいるが、最初の恫喝(どうかつ)以

降、ノーマがああいう暴力的な言動をとったことはなかったし、乱暴で無愛想なのは誰に対しても同じだとわかった。
だが、親近感を持てる人物ではない。
人に尊敬される人格でもなかった。
ノーマは同僚と共に戦いながらも、いつもたった一人だけで戦い、生き残ってきた人物だということがわかってきたからだ。ノーマは戦死した同僚の埋葬に立ち会ったことがなく、涙を見せたこともない「女」だった。
些細なミスを犯した整備員の胸ぐらをつかみ上げて怒鳴り散らす完全主義者をオルスはどうしても好きになれなかったのだ。
その一方で…、何か自分と通じるもの、何かを共有しているのではないかと思える感覚もあった。嫌悪のオブラートにくるまれた溶け合うような甘い感覚…。
オルスは自分でもわからない理由でそれを嫌悪し、見ないように努力していた。

ミリタリーポリスの姿が目立つ連絡エレベータ駅から外に出た二人は強烈な陽の光と狂ったように青い空に迎えられた。
本当に狂ったように青い。
このターミナル駅は赤道直下にあるのだ。
オルスは空の深い色に見とれてしまった。

乗員の健康管理のために神経質なくらい環境を整えたローヌ・バルトの船内が、作られた紛い物であることがいやというほどわかる。
構内から見渡せる畑から一陣の熱風が渡ってきて頬をなぶる。
——ここの空気は匂いがある
風は瞬間的に強くなり砂ぼこりを巻き上げ、オルスの船員風の鞄が風にさらわれそうになった。
——おまけに不潔だ
あの風の中をどうやって飛んでいるのか、蝿がオルスの顔のまわりを飛び狂って掻き消えた。
「すごいな」
サングラスをかけたノーマの眼が何を見ていたかわからなかったが、オルスは無造作にうなずいた。
——確かに凄い
ここでは何も制御や管理がされていない！
荒々しく剝きだしの自然が見渡す限り続いている。
畑の上を低く飛ぶ鳥は耳障りな鳴き声をあげ、空気はどこかの物陰で腐りかけている動物の死臭を運んでくる。
地下鉄道の入口には派手な色彩の服を着た老婆がクーラーボックスの上に座っていて、

ビールをちびちび飲んでいる。彼女はオルスとノーマが横を通りすぎる時、盛大におくびした。

オルスとノーマはそれをきっかけにはじけるように笑った。

別に老婆が出した音がおかしかったわけではない。

ただ、そこには解放感があった。

誰も二人を監視していなかった。

二人は世界がどうにかなってしまったかのように笑いに笑った。けらけらと笑うオルスとノーマをとがめる者もなく、ただ、老婆が呆れた顔でもう一度おくびをもらしただけだった。

いちばん近くの街に出たオルスとノーマは陽が暮れるまで街をぶらついた。

混乱の時代以前のアラビア風の街と人々には活気があり、何も買わずに見ているだけでも飽きなかった。得体の知れない生薬の問屋の隣に星間投資のオフィスや娼館が並んでいるような街だ。秩序や統制や良識やタブーがなく、ビジネスマンとハイヒールしか身につけていない女が擦れちがう街……。

オルスたちは路上での喧嘩や交通事故さえ目撃した。

しばらく街をぶらついた後に道に面したレストランに入った時には、あまりの無秩序さにオルスは疲れを感じていたほどだった。

「もう疲れたか」
ノーマの声に顔を上げて見ると、サングラスをかけた顔の口元は笑っていた。美しく邪念の無い笑顔だったが、オルスには自分を嘲っているようにみえた。それは単に自分自身のコンプレックスが生み出した幻影にすぎなかったのだが、彼は自分を客観視できるほど大人ではなく、そういう可能性に思い当たることもなかった。
「そういうノーマの方が疲れてるんじゃないのか」
オルスは自分の不快感を剝きだしにして答えた。
「…かもな」
ノーマは軽く受け流すと、不愉快なほど愛想のいいウェイターに現地の言葉で料理を注文した。ウェイターは盆の上にチップを置かれると、まだノーマを睨むように見ていたオルスにまでペコペコとお辞儀して厨房へと飛び去った。
「……気にいらないな。どこかの植民地主義的な趣味だ」
「ははっ、古風な言葉を知ってるな」
軽く笑ったノーマはサングラスをカチューシャのように額の上に上げた。
「どうだ、ここから別行動にするか？　女を買いに行ってもいいんだぞ」
「な、なんで、急にそんな話になるんだ……。関係ないじゃないか」
「関係なくはない…。植民地主義的趣味だろ。我々はここで、ハメを外すことを期待されているわけだ」

「……」
　ノーマが何を言っているのか、よくわからなかった。
「この街は巧妙にデザインされているんだ。あの程度のチップで大喜びしてみせたさっきの現地人ウェイターは役者並の演技力があるし、半裸で歩いているストリートガールは見た目より高学歴だ。大局の安定化のための局所的な乱流がこの街だ。どんなに無秩序にみえても、それはデザインされた無秩序だ…」
「デザイン…」
「そう、単調な長い航海に疲れた船員のためのびっくり箱だ。ジーンライナーのプレゼントだな」
「まさか……」
「嘘だと思ったら、鉄道で隣町に行ってみるといい。お前の故郷と同じ平和で何も起こらない街が延々と続いている。あのウェイターもそこからここに出勤しているはずの、…まともな神経の船員なら誰も寄り付かない場所だ」
「もし…本当だとしても……作り物だとわかってて、ハメなんかはずせない」
　例のウェイターが再び現われ、オルスとノーマの前に恭しく食前酒を置いた。オルスには卑屈な笑いを浮かべたこの男が演技しているようにはみえなかった。ウェイターはオルスと目が合うと優雅にお辞儀してみせてから、ノーマに小さな紙片を渡した。
　ノーマは紙片を開いて読むと振り返った。

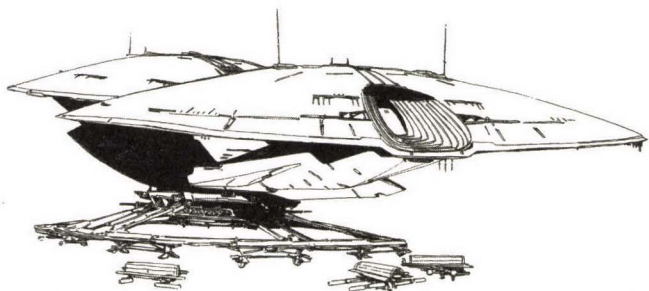
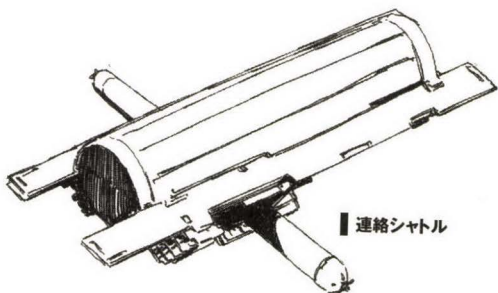
人影のまばらな店内の壁際のテーブルに男が一人座っていた。
ノーマはウェイターに現地語で何か言うと再びサングラスをかけた。
「オルス、これから余計なことを喋るな。必要なら嘘をつけ」
無表情だが緊迫したノーマの声にオルスはただうなずいた。
「久しぶりだな、ノーマ」
テーブルのそばに立った男が声をかけた。ノーマは座ったまま男を見上げた。男はその視線を避けるようにオルスを見た。
「君は…メジャー・オルス・ブレイクだったたな」
オルスにはこのジーンメジャーらしい人物が誰なのか思い出せなかった。
言葉を返せないでいるオルスに、相手は癖のある笑顔を見せた。
「俺の印象が薄かったかな。連絡船で一度会ったレイモン・フレイだ」
オルスは握手のために差し出されたフレイの手をとるために立ち上がった。
「いや、憶えてますよ」
握手するフレイにノーマが言った。
「フレイ、どうしてこんなところにいる」
「今、俺はベルタ・ギースに乗ってる」
ベルタの名を聞いてオルスは驚いた。フレイは握手を止めるとノーマに向き直った。
オルスはぽかんと口を開けたまま座った。

「何の用だ」
「ははは、相変わらず冷たいな」
「目的や得体の知れない奴にはな…」
「厳しいな。だが、俺は見た目通りだ。君は知ってるだろ」
「……」
「じゃ、熱い料理が冷めないように単刀直入にいこう。……ジーンライナーに不穏な動きがある。都合の悪い登場人物が退場させられそうだ。君らの側の事情を俺は知らん。場合によっては舞台からトンズラすることをお勧めするよ」
フレイは言い終えると厚い胸の前で腕を組んだ。
ノーマは黙ってフレイを見ている。サングラスの奥の眼は見えない。
「どうして、そんなことを言う。親切なアドバイスか」
「マーリガンをやったのは我々の側じゃない……。その責任を誰がとるのかを見ておいてほしい。……俺は…踊らされるのに疲れてきてるんだ」
「……」
「そういうことだ。それじゃ、まだ料理が残ってるんで失礼するよ。また会おう」
フレイはそう言うと自分のテーブルには戻らず、そのまま外に向かった。
「ノーマ、あいつ敵じゃないか！」
「……そうだな、おそらくシェルドライバだ。だが、今のところは敵じゃないようだ」

ウェイターが満面の笑みをうかべて料理を運んできた。
「食べよう。これは冷めるとまずくなる」
ノーマは変わった形のフォークを手にとると、真っ赤な色合いの料理を口に運んだ。
「ノーマ、……フレイは罠をかけようとしてるかもしれない。今のアドバイスがよくデザインされたトラップの可能性を考えるべきだ」
「食べろ」
「……」
「トラップの可能性もあるし、無価値な情報の可能性もある。これはいくら考えてもわからん。今は目の前の料理だ」
「無価値な情報？」
「何もかも手遅れってことだ。上陸許可を出してるのはジーンライナーだぞ」
「……」
なおも考え込むオルスにノーマが言った。
「お前は色々なからくりを知った上で目の前のものを楽しめるようになるべきだな」
黙々と食事を続けるノーマを見たオルスはしかたなく料理に手をつけた。
しかし、食事を終える前にはフレイの言葉をどう解釈するべきかは決着がついた。
携帯端末の非常呼び出しが鳴り始めたのだ。

エアポート

衛星軌道上に浮かぶ巨大なステーションである。このステーションは一応無重力状態で浮かんでいるが、地上とは100キロものシャフトでつながっている。人々は連絡シャトルに乗って地上と宇宙を行き来することもできるし、試してみる気があるならば、この地上から延びるシャフトのエレベータで、直接、ステーションまで上がることもできる。このあたりの管制官や作業員などは、かなりラフな格好で仕事に就いている。

ポート管制官の服装
(ラフスタイル)

エアポート全景

連絡シャトル

10

キルマーク

Kill Mark

サクソン・マリーエン州境で発生した自然災害の救出活動にあたっていたフリードマン曹長は昼食の途中で上官から無線で連絡を受け、部隊をまとめ撤収するよう指示を受けた。例によってその理由は述べられていない。

曹長はすぐに四十人ほどの自分の部隊をまとめ、入れ替わるように災害現場に入ってきた州兵連隊の大佐と引き継ぎを済ませると、民間の貨物トレーラーで先行していた部隊に追い付いた。

行き先は近郊の農業用空港。

そこに到着する数十分の間、徹夜で作業にあたっていた兵士たちは揺れるトレーラーの中で泥まみれになったままで眠りこけていた。

小さな農業用空港で彼らを待っていたのは防空軍のVTOL輸送機だった。フリードマンの部隊は陸軍歩兵の野戦服を着用していたので、防空軍の下士官は泥だらけの歩兵を自分の機に乗せるのが気に入らずさんざん悪態をついた。

部隊の正体を知っているのは同乗の連絡士官だけだったのだ。

この機の行き先はマリーエン州のほぼ中央に位置する農業地帯であった。任務内容はまだわからない。

飛行中の機内で*装甲兵装の支給および装着テストとアルコール付の臨時食の配布を命じた後、フリードマン曹長は考えた。

マリーエン州の大穀倉地帯は彼の生まれ故郷であった。数世紀前から同じ土地を耕し、耕した土地に還(かえ)ってゆく人々が住んでいる地方だ。およそテロリズムやそれに類する犯罪とは無縁の土地柄のはずだった。

――あんな平和なところで、ろくでもないことが……

フリードマンは携帯している大型拳銃(けんじゅう)*の簡易メンテナンスを機械的に済ませると、隔壁に寄り掛かって目を閉じた。ＶＴＯＬ機は酔いを誘うような不規則な揺れ方をしていたが、曹長はすぐに眠りに落ちた。

人の気配で曹長が目を覚ました時にはＶＴＯＬ機はまだ飛行中だった。目の前には空軍の連絡士官が立っていた。

「曹長、カメラを買う気はないか？」

「カメラ？」

空軍中尉は密封式のコーヒーカップをフリードマン曹長に押し付けるように渡すと、紙製の箱から手に乗るほどの装置を取り出した。

「こいつは装甲服の目線の位置に取り付けることができる。*リアルタイムのデータ*リンクはできないが、小型で全周囲３６０度記録が可能だ。元は*地上支援機*のガンカメラで旧式だがとにかく頑丈にできている…。ひとつ、15万*カルで人数分ある」

曹長はまだ夢でも見ているのではないかと考えた。こんなところでカメラのセールスだと？
「……それで、何を撮るんだ？」
「珍しいものさ。撮り逃すと後悔するぞ」
「……」
「お前さんはまだ知らないかもしれないが、俺は色々と知ってる。こいつを陸軍の装甲服に取り付けられるようにするのに徹夜で苦労したんだ。15万カルは格安だと思うね。何も言わずに買っとけよ。株が上がるぞ」
フリードマン曹長は目の前の若い士官を、
――糞まみれのアナルファッカー猿め！
と心中で罵った。
だが、戦う集団においてはこうした手先が器用で、要領がよく、悪魔的に小ずるいアナルファッカーどもがいなければどうにもならないことも体験的によく知っていた。
彼の部下は全員が目の前の青二才の同類だったのだ。
曹長は自分の口座から支払いを済ませ、だらしなく眠りこけている部下をたたき起こすとカメラの装甲服への取り付けとリアルタイム・データリンクに必要な物のリストアップを命じた。
そうしておいて、（彼は信心深い男だったので）万物の創造主を心の中で呼び出し、そ

のケツに極太のパイルドライバー*をぶち込むことで貯金消滅の鬱憤を晴らした。結果として、創造主はその一撃がお気に召したようだった。
彼の部隊は珍しいものを撮影できたのだ。たっぷりと…。

陸軍の特殊部隊*ガブリエル戦隊は夕刻までに、急遽刈りとられた畑を野戦飛行場にした目的地に到着し、壕を掘って周囲の警戒にあたった。
そこは舗装されていない道と小麦の畑が地平線まで続いている土地だった。見渡す限りでは人家だけではなく、作業ロボット*の格納庫さえ見あたらない典型的な大規模農地だった。
西に見える灌漑用の風車の列に監視哨を設置し、一時間後に接近してくる大型機二機を目視で発見。無線封鎖されていたため、陸軍の大型VTOL機は発煙筒の誘導だけで農地に着陸した。VTOL輸送機は運搬してきたコンテナを切り離すとすぐに離陸を開始したので、同乗してきた戦隊指揮官ガブリエル大尉は開いたままのランプから地上に飛び降りるはめになった。
巻き上がる土煙を頭から浴びたガブリエル大尉は、赤ら顔で背が低かったので地の底から這い出してきた小鬼のようにも見えた。
「暑いな、曹長」
走り寄って来たフリードマン曹長から敬礼された大尉はおざなりの返礼をするとマップ

ケースから取り出した樹脂製の地図で野戦服を払った。曹長は輸送機が運んできた大型コンテナを見上げた。二基のコンテナは三階建ての大きな家屋ほどの容積がある。
「空挺戦車ですか？　コンテナをすぐに偽装させます」
「いや、偽装の必要はない。ここから目的地まで四十キロあるし、この上の気象通信衛星は政府の麻薬取締局が押さえた」
「麻薬局…ですか」
「そう、例によって上の方でいろいろある上に今回はジーンライナー絡みだ。これ以上のことは俺に聞かないでくれ」
「了解であります。今回も誰かのケツをキレイにふくであります」
曹長のわざとらしい軍隊口調に無言の笑いで答えた大尉は、その場で簡易ミーティングを始めた。地面の上に直接地図を広げる。
「今回は人質奪回作戦、突入タイプだ。人質の所在地はここの南西約四十キロの農家。人質はジーンライナー船の船長一名と農家の家族五名、雇い人四名の計十名。人質の中には六歳の子供がいる。犯人グループは麻薬関連のテロリストグループと考えられている。が、犯行声明なし、目的不明、人数は十名前後だが構成員の氏名は不明だ」
「…イヤな感じですね」
「まったくだ。相手のタイプに関しては移動中に意見交換しよう」
大尉は詳細なデータが入ったデータフォルダを曹長に渡した。

「知ってると思うが、このあたりの農家は自然災害対策で半地下式のトーチカ*のような構造になっている。住居周辺にはテロリストが設置した自動迎撃システム*がある。かなり巧妙な設置をしているが、穴がある。そこを突き、まず住居部とセキュリティシステムを制圧する」

「……」

「だが、人質はおそらく地下サイロにいるはずだ。これは航空機の地下格納庫並に大きい。東西に伸びるサイロへの搬入口のうち、西側から突入する。ここで我々は…」

大尉は地図と家屋平面図から目を上げて、そびえ立つコンテナを見た。

「特殊な兵器と遭遇する可能性が高い…」

その一週間前、ローヌ・バルトの船長スコット・パースウォーデンがヴィアネイ地上市の市街公園で数人の男たちに拉致(らち)されて連れ去られるという事件が起こっていた。随行していたボディガード二人はその場で射殺されている。

この事件はローヌ・バルト乗組員には知らされていなかった。

市の中心部にある公園へ立ち寄るという行動はパースウォーデンの当日の予定に入っていなかったため、市警察は偶然何かの事件に巻き込まれた、或(あ)るいは、誰かと会うために公園に行き計画的に誘拐されたと考えて捜査を開始した。

が、その翌日にはバルトライナー社の現地調査部はパースウォーデンが監禁されている

農場を探りあてていた。まったく偶然に。

調査部はベルタ・ギースから地上に運び出された荷主不明の大型コンテナを追跡しているうちに、拉致されたパースウォーデンを発見したのだった。

本来ならバルトライナー社が警察なり政府筋なりに通報すれば事の処理は済むはずだったが、調査部が追跡していたコンテナの内容が「シェル本体一機、もしくはエンジン、フレーム部位」だと想定されていたためにやっかいなことになった。

政府の役人たちは自分たちがいつの間にか、バルトライナー社とギースシッピング社の間に挟まれて、のっぴきならない状態になっているのに気がついた。

宙間審理会議の中断を理由に、船に戻っていたティプタフト船長は連邦警察の事情聴取を拒否した。

パースウォーデンを誘拐した犯人グループからの連絡もない。

そして、ノーマ・クイックはシェルの地表での運用研究をノヴァーリスから命じられたのだった。大気中で使用する新型エンジン二基もすぐに届いた。

妙に素早い対応だった。

コンテナ内にフレームと特殊な樹脂で固定されたシェルの四重ハッチが次々に開き、ノーマの頭がここからも見えた。

オルスはシミュレータモードのシェルに接続されたシミュレータ本体から自分の端末に

データを吸い出すと、足場の上に組まれた仮設の部屋から外に出た。シミュレーションを外部出力しているモニタはコンテナの中ほど、二階ほどの高さにあったのでシェルのコクピットから出て整備員と話しているノーマを見おろす形になった。ノーマは自分のシェルの出力をまだ絞れと言っているらしい。
「シミュレータの再現度が適切なレベルで実現されているんだったら、まだ…」
一週間前、ヴィアネイに上陸したパースウォーデン船長が市街地で誘拐され、ボディガードが射殺される事件が起きてからこれまでの間、うんざりするほどこなしてきたシミュレータ訓練なのだが、ノーマはまだ自分を納得させるセッティングを出せていなかったのだ。
オルスは梯子(はしご)の手摺(てすり)を手で軽く握ると、滑るようにしてフロアに着地した。
数人の整備員たちの目がこちらに向くのを感じる。
オルスはごく普通の足取りでノーマと整備員たちに近付いていった。複数の目が変なものでも見るような目つきになり、まだ話しているノーマの顔に戻る。
「試せることは全部試してみたが、まだパワーがありすぎる……ように思う」
「これ以上の出力の調整はマイナス要因にしかならないと思いますが、空力と合わせて検討します」
ノーマが相手を手で追い払うような仕草をして、打ち合わせは終わった。整備員たちは重い足取りでその場から歩き去る。オルスはそれを見て軽い優越感を感じた。

「ノーマ、データを持ってきた」
オルスは自分の端末をノーマに差し出した。
ノーマは端末を大儀そうに受け取ると、床に固定されている樹脂の箱に腰掛けた。
端末を操作してスコアを確認したノーマは、首を振りながら端末を投げて返してきた。
「糞ったれのスコアだ。おまけに出撃直前までセッティングだしな…」
ノーマは箱の上に深く腰を降ろして隔壁に背中をもたせかけた。少しだらしないとも言える動作だった。いつも見馴れていたノーマとは少し違うノーマ。まったく隙がないように見えたノーマの別の顔を見るような気がした。
おまけに……。シェルの機動シミュレーションのスコアで、今、オルスはノーマより高スコアを何度も叩き出しているのだ。
大気中でのシェル運用という未知の分野で、最初のうちこそ被撃墜率、自損率が高かったオルスはシミュレーション訓練を重ねるごとにノーマのスコアにぐんぐんと近付き、訓練の最終段階では三対一の確率でノーマよりも好成績をあげるようになっていたのだ。
エンジンや外部装甲を丸ごと換装し、前例のない大気と重力下での戦闘は基本的な戦術さえ再検討の必要があった。何もかもゼロから始めなければならないという条件、そして地表重力の微妙な差異があって、オルスがノーマより好スコアを出す隙があったのだが…。
――自分でも……信じられない…
同僚でもあり、まったく同種の仕事をしているのにオルスはノーマのことを競争相手と

して見たことがなかった。
最初のうちは自分が何をしているのか、自分でもまったく見えていなかったためだし、限界機動*を体験した後は自分にできないことが山ほどあるのが見えてきて、それをひたすら埋めていくのに必死で周囲を見る余裕などなかったからだ。
強いて言えば、遠い目標とでも言うべき相手だった。
だが、本当のところは、遠い目標という意識さえなかった。
完全主義者で失敗をしないノーマ。
何もかもお見通しのノーマ。
最古参のシェルドライバ……。
ノーマはそもそも最初からそんな存在だったし、そういう種類の特別のジーンメジャーだとオルスは感じていたのだ。

一週間前、ノーマと一緒にヴィアネイに上陸した時には、オルスは重力について特に意識しなかった。ヴィアネイ地表の重力は1G*プラスだったのだが。
ローヌ・バルトなどの長距離航行宇宙船は、惑星に上陸した乗員の地表での活動に影響が出ないように船内重力をほぼ1Gに保っている。小型の快速船や軍艦の中には効率化のために0Gで運用されているものもあるが、こうした宇宙船には特殊な設備や訓練が不可欠である。

船内重力の問題については過去、様々な議論がなされてきた。

無重力の環境は劣悪な生存環境とは言えないが、1G環境と比較すると快適とは言い難い。重力が作用する方向、上と下の感覚は適切な適応期間をおけば簡単に克服できるものだったが、適応期間中の事故は無視できなかった。感覚失調や地上の1G環境のルーティン的思考の持ち込みはしばしばひどい事故を引き起こしたのである。結論として、多くの宇宙船の船内重力は1G前後に保たれている。1G環境は無償で手に入るものではないが、失われる時間と人命を買いとるために設定されたのだ。

そのお陰でオルスとノーマは、何の違和感もなく惑星上陸ができたのである。0G環境での生活が長い場合には1Gに適応するためのリハビリが必要な場合もあるのに。

しかし、厳密にはローヌ・バルトの船内重力は1Gマイナス環境だった。

上陸して三日目にはノーマを始めとする上陸要員全員が全身の筋肉痛と体のだるさに苦しんでいた。オルスを例外として。

こうした事態に対して、オルスは驚き、単純に優越感に浸りきり、そして困惑した。

あのノーマをシミュレータのスコアで打ち負かしたのは、何にも勝る喜びだったが、自分自身が本当にノーマより優れたシェルドライバだと言える自信はなかった。

何かの間違い、たまたまノーマの調子が悪かっただけにすぎないとも思えるし、こうした高スコアを出すことが何か悪い結果を招くのではないかと迷信のような恐れも抱いた。

こうした困惑は、これまでオルスが自分より成績のよい人間、年上の人間、社会の頂点に立つ人間たち、つまり自分より上位にいる人間の批判者でしかなかったため、感じたことだった。自分より上位に、非難し反抗すべき相手が誰もいないことに気付いて、喜んだり、オロオロしたりしていたわけである。

他人を批判して自分を高めた気になるという幼児性の「相対ジャンプ」が、本物の競争の世界では通用しないことがオルスを困惑させていた。明確な自覚はないものの、オルスは日常的な関係性とは別の、自分を律するための新しい枠組みを求め始めていたのである。

困惑し、おずおずとではあるが…。

直接、救出にあたることになっている陸軍の特殊部隊が四台の農業用トレーラーに分乗して出発してしまうと、刈りとられた畑の中のコンテナにはオルスとノーマ、シェルの整備技術者八名だけが取り残された。明日の明け方に特殊部隊が目標の農家に突入するまでは外部とは連絡がとれない。

ノーマは休憩をとりながらもシェルのセッティング出しを続けている。勤務シフトの関係で、現地時間とディサイクルがずれているので全員がもう丸一日以上眠らずに作業していることになる。

オルスはデータ収集のモニタリングにあたりながらも、ノーマと話をしたくてたまらなかった。自分の妙な高揚感と不安をわかってくれるのはノーマしかいない、と感じていた

のだ。管制官のデルビーでもよかったのだが、生憎ここには出張していない。問題の核心に触れなくても、誰かに自分の話を聞いてもらうのは精神的な救いになる。デルビー・アイバースは決して優しい聞き手とは言えなかったが、返答や反応の意外性は問題そのものを忘れさせてしまうような面白さがあって、何より気軽に話せる相手だった。

ノーマは……。

ノーマ・クイックとは仕事以外のことを話し合ったことがほとんどなかった。レイモン・フレイがどんな人物で、ノーマとどういう関係にあったのかも聞きそびれてしまったままだ。ノヴァーリスとの会話の中で、慎重で手堅いと評したノーマの口調からみて、手強いパイロットらしいという印象があるばかりだ。

――でも、自分のこの妙な不安感といったものをどうやって、あのノーマに伝えればいい？

――こういうことを話したがるのは、コドモのすることかもしれない……

――不安感というのは自分の弱味を外にさらすことで相手の注意を自分に向ける行為だ…。母親と赤ん坊の関係だ…

――ノーマはこういうことを鼻で笑うだろう…きっと……

自尊心で自分自身を疎外していることに気付かないオルスは、考えても仕方のないことを考え続けた。有史以前から若い男と女たちが、何度も何度も、何かの業のように、同じ

ような考えても仕方のない問題を考えてきた。
ノーマも考えてもどうにもならないことを考え続けていたのをオルスは知らない。
オルスが思うより、世界は美しく、単純で、苛烈にできていた。

午前三時半、フリードマン曹長と部下たちは畑の排水溝の中に伏せていた。
溝の底には嫌な臭いのする泥がたまっている。*フェイスプレートを上げて泥の臭いをかいだ曹長は、かすかに人間の尿の臭いが混じっているのに気付いた。ごく最近のものだ。
警戒するよう手でサインを出したが、隊の前進速度はそう変わらない。なにしろ泥の中を這っているのだから。
しばらくして前衛の兵がサインを送ってきた。曹長は*ペリスコープで溝の外を覗いた。
見馴れない装甲兵装で武装した歩哨が見える。
こちらに歩いて来ている。
——処理しろ！
狙撃手が五メートルまで引き寄せて*吸着振動地雷を撃つ。
うなるような小さな音がしてから、重い物が倒れる音。
ベーケ伍長が倒れていた装甲服を溝の中に引きずり込む。装甲の中の肉がジューサーにかけられたような状態になっているので、装甲服の関節は中が空みたいにだらしなく動いている。

こいつが装備しているのは外星系*の銃だ。しかし、ここで今、殺してしまったのは予想外のことだった。

――タイムテーブルを十五分繰り上げる！

指示を与える曹長のそばで、死体に泥をかぶせる者、超*指向性通信機のセットを始める者、再び前進する者がうごめく。

ひどい苦役のようにも見えたが、ガブリエル戦隊全員がこれを楽しんでいた。

敵の血と肉を完膚無きまでに粉砕することが彼らの仕事だった。全員が自分の仕事を愛していたのだ。

彼らと同じくらい自分の仕事を愛している敵、ピナ・パワーズのもとへとガブリエル戦隊は接近していった。

ピナ・パワーズは地下穀物サイロの暗がりで発狂しかかっていた。

薬（ドラッグ）による幻覚と自分の現実（リアル）に負けそうになっていたのだ。

傭兵（ようへい）と名乗る麻薬組織の殺し屋たちから買った薬は、理性が完全に残ったままで現実と区別できない幻を見せる代物だった。ピナは喉（のど）の奥に指を入れて、溶け残った薬を少しでも吐き出そうとしたが無駄だった。

結局、一回の服用がきっかけとなり、ここに来てから、その「ひでえ薬」を自分の意思

で何度も買い、殺し屋たち全員とみだらな行為にふけり、人質のパースウォーデンと農場主を惨殺することになった。
ピナのすることを、今では名前さえ憶えていない双子の妹や同僚のパイロット、豚の脂肪をなめている小さな男の子、その他エトセトラが見物していた。
殺すことができなかったから殺されてしまった連中だ。
——本当にそうだったっけ？
——羨ましそうに見ているから、そうだと思ったんだけど……
今ではピナは戦術的な問題に正確に受け答えしながら、そばにいる妹を気にするような人物に成り下がっていた。ピナにはちゃんと「成り下がった」自覚があった。
人質殺しは殺し屋たちを反対させ、ビビらせた。
いや、ひひらせた……？
じぶんのりせいはまだあるとぴなはおもっていた。
そのしょうこにまだちゃんとかんがえられる。
考えられる。

——ハメられた！　この馬鹿で腰抜けのチンピラどもと一緒に！
——ベルタの奴、何もかも知ってて、汚いケツを拭かせようとしてる！
——ベルタはもう出港したかも……

しかし、
——……生き残ればいい……
とピナは繰り返し考えた。今まで通りにすればいいことだ。
——邪魔する敵は、手で内臓を引きずり出してやる！　あの船長さんみたいに……
ピナ・パワーズは自分のシェルの腕にキルマークを二本描き入れた。それは船長と農場主のカウントだった。

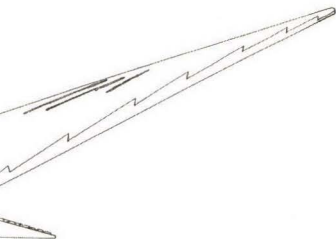
午前四時十五分。ガブリエル戦隊は農家に突入した。
裏口からキッチンに入ったベーケ伍長は、足と片手を使って床を這いずり回りながら、隣室の戸口に現われた武装した男を目で捉(とら)えた。装甲服を着ていないので透明な催涙ガスにむせている。伍長は、男が強力なアサルトライフル*の銃口を上げるのを確認してから吸着振動地雷を撃ち込んだ。
男の腹が内側から爆発して、肉があばらまでめくれ上がる。支えを失った上半身が肉片を剥離(はくり)させながら崩れ落ちた。飛び散った肉片は生き物のように蠕動(ぜんどう)している。
「汚ねえな」
伍長が呟(つぶや)いた。生身の人間に振動地雷を使うのは初めてだったのだ。こいつは装甲服(カンヅメ)相手だと「清潔な」兵器なのだが……。
隣室にセンサーを投げ込み、部下を回り込ませる。

地下穀物サイロの出入口をロックしているセキュリティシステムは居間の地下にあるはずだった。
ガブリエル大尉によると、サイロに人質と早いもの勝ちの特製美女がいるらしい…。
ガブリエル語で「特製美女」は重武装の敵のことだ。
――ま、とにかく急がないとな…
ベーケ伍長の班はすでに五秒の遅れを出していた。

突入開始の通信を受けたオルスのシェルはブースタ*に点火、凄まじい轟音で明け方の空に鳥が一斉に舞い上がる。
滑走点にシェルを歩かせて移動する間、空力制御のため可動となっている外殻装甲のテストをする。ノーマのシェルを見ると装甲板を動かすたびに色や形が変化しているように見えた。
ノーマから通信が入る。
「オルス、今日はお前が前だ」
「………どうして、いつも事前に言ってくれない？」
「先に言っとくと、いいことでもあるのか」
途中でノーマのコクピットに現地語の通信が入る。ノーマは何か簡潔に答えて、ディスプレイのマップを呼び出して転送してきた。ガブリエル戦隊は住居部分のほとんどを制圧

している。
「予定通りサイロ西側入口をバックアップする。相手は予想より統率がなく、戦意が低いらしい。だが油断するな。敵シェルがいるとすれば例の元NLAC*パイロットだ」
「……油断なんかしない」
「それから、船長と農家の主人の死体が発見された。冷凍室に入れてあったそうだ。どう思う？」
オルスはぎょっとした。
「…どうって」
「暑いからな。これくらい、いちいちショックを受けてないで即答しろ」
ノーマはこちらを探るような目で見ている。
落ち着いた口調で言われた言葉だったが、オルスは殴られたような衝撃を感じた。
——…駄目だ…。ノーマの言うリアルにはついていけない…
ノーマの言うリアルとは、生死を賭けるリアリティ、戦場のリアリティのことだ。以前、オルスのシミュレータ訓練中に吐き出すようにノーマがつぶやいていた言葉だ。
実を言うと、オルスはまだ死体もじかに見たことがなかった。オルスの頭にあるのは疑似体験の死だけだった。
死については直視しないようにして生きてきた。子供の頃、ヴィデオグラムソフト*のように人生の巻き戻しができたらと考えていて、その終着点が恐ろしくなり、それ以降はそ

の事を自分の生の一部とは認めないようにしていたのだ。
どこかよそで起きている事象。
それが彼の死の印象だった。
今、その「よそ」は「ここ」になっている。
――自分もこれで、死ぬことになるかもしれない…
とオルスは考えた。
目の前に映し出されている、風に舞い上がる畑の土煙が今の現実のすべてのようにも見えた。吹き上げられ、落ちる土は少しばかり虚無的な感慨を抱かせる風景だった。
だが、滑走点についたオルスは死のリアリティというものに直面して、不思議なほど透明な精神状態になったのを感じていた。
オルスにはその理由はわからない。
「シミュレータを思い出せ。目の前をしっかり見てれば、お前は負けない」
オルスはノーマの声を聞きながらスロットルを握った。
「…わかった。これより先行する」
ブースタ内部で強烈な爆発が起こり、足元の土が蒸気を発しながら溶けた。
セキュリティシステムを制圧したとの報告を受けたフリードマン曹長は、ヴァイザー内

の時計を見た。予定より三秒遅れ。
フリードマンの班はすでにサイロ西口前に展開を終えていた。
貴重な三秒が失われた。
三秒あれば人質を皆殺しにすることもできるのだ。
フリードマン曹長は開き始めた巨大な合金製のシャッターの隙間にペリスコープを差し入れた。
その途端、暗闇から飛来したものに曹長の上半身は吹き飛ばされた。
兵士たちは掩体（えんたい）に飛び込み、伏せた。
「樹脂コンクリートを貫通！」
「爆発なし、時*限*信管反応なし！」
飛来したのは超高速徹甲弾だった。曹長の近くにいた兵は、曹長の装甲服の破片が自分の装甲にめりこんで、じりじり焼けているのに気付いた。
シャッターは嫌な音を立てて、ゆっくりと上がり続けている。

ベルタ・ギース所属のシェル

ジーンライナーが生み出す戦闘兵器「シェル」は根本的には同じような戦略的発想によって生み出されている。しかし、ジーンライナー各個体がそれぞれに体内で生み出すシェルには、相当の外見的な差がある。
ローヌ・バルトが生み出したシェルは、懐かしい円筒型のロケットモーターを搭載している。このアポロ宇宙船のようなロケットモーターは、外見こそ同じでも発生させる推力エネルギーが桁違いで、非常に軽い。
対してベルタ・ギースの生み出したシェルは、異様な形のロケットモーターを装備している。背、腰、脚部にセットされたロケットモーターはローヌ・バルトのシェルと同じ運動性を持つが、その推力を発生させる噴射口は2枚貝の閉じた貝殻を思わせる。ローヌ・シェルの噴射口は丸く集中的に放出するものだが、ベルタ・シェルの噴射口は薄く広がって噴射する。
どちらかと言えば奇怪に見えるベルタ・ギースのシェルのほうが、ジーンライナーの目的と好みには合っているのは間違いない。確かにオルスたちのシェルのロケットモーター噴射口のブレードもシャコ貝に見えなくはないが、たぶんジーンライナーの性格の差なのであろう。
オルスたちのシェルは、ジーンメジャーやジーンマイナーが見たとき嫌悪感や違和感がないように、ローヌ・バルトが設計したようである。
ここに掲載した「ピナ・シェル」は、やはりベルタ・ギースがピナの性格に合わせて作ったものだ。
見えにくいがこのシェルは膝のところに「くまちゃん」マークが入っているのが面白い。こういったしゃれをジーンライナーは理解するのだろうか?
ピナのシェルは同僚レイモンのものと比較するとかなり小振りである。完全な同一機種でないため汎用性が犠牲になるかと思われるが、その分、シェル・ドライバの個人的な力量に任せることで補っているのだろう。

ピナ・シェル前面

11

バトルリンク

Battle Link

交互に現われる麦畑と牧草地を、低空というよりも地面すれすれで飛行するオルス機に、後方のノーマ機からの通信が入った。
「敵シェルが現われた。地下サイロから出て交戦中だ」
物陰から撮影されたらしい、ざらついた静止映像も転送されてくる。
――これ、シェルなのか？
真横、低い位置から撮られた敵のシェルは異様に大きく見えた。影になった部分のディティールが黒くつぶれていることもあり、それは威圧感のある映像だった。
オルスは背筋が冷たくなるような思いでその映像を見た。
コクピットの空気が恐怖の匂いで満たされる。
「これを見た技術者の話ではエンジンの出力はたいしたことないらしい。だが、問題はパイロットの技量と戦術だ」
敵シェルの映像がクローズされてノーマの映像に切り替わる。
「お前は前に出て相手を引き付けろ。こちらは後方から支援と狙撃を繰り返す」
ノーマの指示にオルスは困惑し、ふいに突発的な怒りを感じた。
オルスは反射的にスロットルを握っている左手の握力を緩め、オルスのシェルはがくん

とスピードを落とした。ノーマの機体はオルス機を迂回(うかい)して、機敏に進路を修正する。
「どうした？」
「……前に出て敵を引き付けろって、囮(おとり)になれってことか」
「そうだ」
「……」
「なにを睨(にら)みつけてる。そうじゃないと言ってほしかったのか」
「…それで、自分は安全な位置から射撃するのか」
「その表現は正確じゃない。相手が意図しない方向から射撃する」
「正確かどうかなんてどうでもいい！」
「何が言いたいかはよくわかる。だが、これは一般的な戦術だ。レイモン・フレイも囮役をやっていただろう」
確かにそうだった。囮のフレイ機に気をとられていたオルスは敵のふいうちを食らったことがあった。
しかし、オルスが怒ったのはそれが一般的な戦術であるか否かとは関係ない。
ノーマが自分をいいように操っているということが気に入らなかったのだ。
事前にすべてを説明されていても、結局は同じことをするはめになるのかもしれない。
ただ、うまく相手に使われているという感覚にオルスは反発していたのだ。
スピードを緩めたままのオルス機にノーマが声をかける。

「今、ここで議論したくない。ガブリエルの部隊は全滅しかけている。戦闘に参加しないのなら引き返せ。私ひとりでやる」
ディスプレイのノーマはそう言うとオルスから目をそらし、画像通信を切った。
一秒、二秒、三秒……。
スピードを落としているとはいえ、シェルはジェット戦闘機並のスピードで地表すれすれを疾走する。作物や草を薙ぎ倒し、水蒸気の航跡を残しながら。
オルスはコースを変更しなかったが、スロットルも元に戻さなかった。
ディスプレイの広域マップ上に赤くマーキングされた直線が見えてきた。
ノーマの声が入ってくる。
「舵を切らなかったのは作戦に参加する意思があるとみなすぞ。マップ上に見えてきた赤い直線は突風よけの堤だ。それを越えると目的地の農場だ」
「このまま堤を越えると対空地雷*の反応がある区画に入る……」
「ブースタを全開にしろ。地雷がスピードについていけないはずだ」
これは対空地雷のレーダー*信管が反応して、小型ロケット弾が地中から上空に撃ち出される前にシェルがその上を通過できるだろう、という意味のようだった。
だが、言うまでもなくこれまで誰もやってみたことがないことだ。
「宙間作業機」を地上で運用してみようという狂った試みは、これが最初なのだから……。
――くそっ！

オルスはスロットルを強く握った。
一瞬のタイムラグの後、ブースタ内部で発生した強烈な爆発が雷鳴のように空気を震わせ、オルス機を無理矢理加速させる。
戦闘加速*を実行したライナーメタリカ製エンジン〝ディアブロス〟は冷えるともう二度と使えない使い捨てだ。シェルのエンジンは内部で制御された爆発が続き、エンジンが熱いうちはかろうじて機能を維持できているという代物だった。ライナーメタリカ社*の最新テクノロジーと異星の技術の粋を結集して組み上げられた最強のエンジンは、その出力で自分自身を破壊してしまうという凄(すさ)まじいものなのだ。
まだ、引き返すこともできた。
が、オルスは戦闘加速で堤を越えた。
ブースタのノズルが動き、機体表面に発生した乱流を制御するために外殻装甲が変形する。コクピットのオルスは暴力的なほど唐突に身体が浮き上がるのを感じた。
水蒸気の輪を堤の斜面にぶつけて、オルスのシェルは上昇し、次の瞬間には地面に向かって加速し、一陣の暴風のように堤を越えた。
シェル格納庫のオルゴンブロックに入った時と同じように、オルスにとってここは一つの分岐点だったが、それを意識しているのは衛星軌道上にある複数の目だけだった……。

フリードマン曹長に代わって戦闘グループの指揮をとっていたネシャット伍長は、畑の土の上を這いずり回っていた。
装甲服の背中から伸びた小型のペリスコープにふくらみはじめたばかりの麦の穂をつけて、穂波の上にそっと突き出す。
ペリスコープの視界に切り替わると、ようやく敵の姿をとらえることができた。
敵、巨大装甲服は畑の反対側で足元の何かを攻撃している。
「化物め」
こちらが設置した自動迎撃システムとセンサー類が全滅してしまってから、更にひどいことになっていた。フリードマンの班は狩る側から狩られる側に追いやられたのだ。
地下サイロから敵巨大装甲服を誘い出し、持ってきた対戦車ミサイルやS.A.M(対空ミサイル)で迎撃したものの、その破壊に失敗してしまった。
たった一体の巨大装甲服は恐るべき重装甲と航空機並の機動性でこちらの攻撃を受け流し、迎撃ロボットのトラップを粉砕すると、畑の中に潜んでいるフリードマン班を狩り始めた。重火器を撃ちつくしてしまっていた兵士たちは、麦畑の中に後退しながら相手を地下サイロから引き離す陽動攻撃を継続した。
これはベーケ伍長の班が通風口からサイロ内部へ突入するのを支援するための計画的な行動だった。
少なくとも最初のうちは…。

散発的なものになり、今ではネシャット伍長を含む数人が畑の中に息を殺して潜んでいるだけになっている。

敵はたった一人の兵士を相手に執拗に攻撃を加えてくる。相手の攻撃をそらすための援護射撃は完全に無視された。

敵は必死で逃げ回る兵士を追いつめ、相手が倒れ、その死体を踏みにじるまで攻撃の手を休めなかった。兵士を一人倒すと、その次の番だ。こうして、二十名の班はたった数人にまで削りとられたのだ。

負傷、行方不明なし。損害は全員戦死だった。

偏執的なほど徹底的な殺戮……。

部隊が初めて経験するパニックと絶望の叫びの中で、ネシャットは衛星からの画像を受信し、ひたすら相手を観察することで活路を見いだそうと努力していた。

相手の行動をパターン化して行動を予測できるかもしれない。

これまでのところ、この試みは失敗に終わっていた。

畑に火を放ち、密度の濃い地雷原に誘い込んでみたが敵の行動には何の制限もないようだったし、まったく予測がつかなかった。敵は手当たり次第にこちらを攻撃しているようにしか見えないのだ。

ただ、一つだけ、ネシャット伍長は発見をしていた。

何人目かの部下を殺した巨大装甲服が、腕にしるしを入れているような仕草をしているのに気付いたのだ。
ペリスコープの倍率を変えて観察すると、下膊部外殻装甲の表面に何本ものキズがつけられていた。
殺戮のその場でキルマークを入れるパイロット…。
装甲に深く傷を入れてつけられた、歪んだキルマーク…。
――これは……。キルマークか？
彼はここに至ってようやく理解した。
この敵パイロットは戦術的利点や理性とは無縁だということを。
彼らを攻撃していたのは、敵の操る装甲服などではなく、金属の獣だったのだ。
義務感や理性で抑制されていた恐怖がこみ上げてきて、伍長は悲鳴をあげそうになった。
その悲鳴が聞こえたかのように、敵の巨大装甲服がこちらに向き直った。
――き、気付かれた⁉
今度こそ、ネシャット伍長の番らしかった。敵は重い脚を引きずるようにして、ゆっくりとこちらに向かって歩き始めた。
伍長は喉の奥からかすれた息をもらしながらも、訓練通りに携帯式のロケットランチャーを展開する。弾薬パックから一発だけ残しておいた焼夷弾頭のロケット弾を取り出して装塡した。

この弾丸は実効がないことを、何度もこの目で確認したものだった…。
ペリスコープで相手の位置を確認した伍長は、土の上を泳ぐようにして位置を変える。これで相手に探知されていた場合には直撃弾を避けることができる。
視界を照準器へと変え、敵を観察する。
敵巨大装甲服はまっすぐこちらに向かっている。歩いているのだが、歩幅があるので装甲服の歩兵が走るよりもかなり速い。
もう何をしても無駄だという絶望感が体を震わせる。頭で考えるというよりも、本能的に感じたことなのでこの震えを抑えることはできなかった。
遠くで何かが爆発した。
心理的な限界に追い込まれていたネシャット伍長の体は反射のように畑の中に立ち上がると、ロケットランチャーを投げ捨て走り始めた。彼は装甲服のマスクの中で荒い息をつきながら、背後視界を確保する。
敵装甲服の足元から煙が吹き上がっているのを見た伍長は、理由のわからない恐怖で息を詰まらせ、全力で走った。
生き残っていた他の兵士たちも次々に畑の中に立ち上がり、同じように全力で走り始める。
巨獣の闘争の場から逃げ去る小動物のように。

オルスは農場に突入した。
ディスプレイに多色の同心円が中心から展開するように表示される。その中心点が敵シェルだ。
堤を越えるために高度を上げていたシェルは地面に突っ込むように加速、そして減速。*兵装セレクタ位置を指先で確認したオルスは、斜めになっている畑の中の不明瞭(めいりょう)な影に向けて機関砲を発射した。ライナーメタリカ製の40ミリ機関砲システム「*センチュリアン」は0・5秒の射撃フェーズ中に、制御されたブレを砲口に発生させながら170発の徹甲弾、徹甲榴弾(りゅうだん)、曳光弾(えいこうだん)、吸着化*学弾を交互に送り出す。高速射撃を実行する砲口は、その周囲に複雑に干渉し合う衝撃波の模様を描いた。
麦の穂を薙(な)ぎはらって目標に到達する必中の火の雨。その一部は*近接信管を作動させて爆裂する。
その一瞬前、敵シェルを示す同心円の中央から運動を示すベクトル表示が急激に発生。
機関砲弾は全弾外れた。
オルスはポジション確保のためにシェルのスロットルを絞った。
高機動運動体の接近を検知したピナ・パワーズのシェルは、パイロットの指示を待たずにメインブースタに点火。コクピットに点灯したセミオート表示と*接近警報(アラート)が殺戮の夢に浸りきっていたピナを覚醒(かくせい)させた。

ディスプレイの敵の運動スピードを見たピナは、今度の敵は自分を駆り立て、その肉を貪る(むさぼ)ることができる相手だということを悟った。
全身の血が沸き上がるように熱くなる。
ピナは制御系ハードウェアを使用せず、フロー言語*でシェルにモード移行を宣言。全力で加速するブースタは巨大な機体を垂直に上昇させ、相手の弾幕をギリギリでかわした。
骨がきしむような加速がとけ、腕が自由に動かせるようになると同時にピナはシェルをハード制御に移行させ、上空から敵に襲いかかった。
ピナのシェルは地上で旋回しようとしている敵を捕捉(ほそく)した。

着地し歩行して掩体(えんたい)となる堤にとりついたノーマ・クイックは、非光学式センサー*と衛星からのデータ通信で視界を確保した。
「まずいな」
堤を綺麗(きれい)に越えたオルス機*は第一撃を加えた後、防御的立場に立たされていた。相手に比べて可能機動領域が狭いのだ。
ノーマは敵シェルがドッグファイトにのめりこむまで戦闘に介入しないつもりでいた。決定的打撃を放つチャンスを作るためである。
だが、現状を見る限りではノーマの戦闘介入は今でなければならない状況だった。

自機の存在をさらけ出しても、二対一のアドヴァンテージは失うわけにはいかない。
ノーマは熱*投射弾頭の温度が発射可能な状態で焼けているのを確認すると、ランチャーを堤に向けて構えた。
しかし、トリガーは引ききれなかった。
――賭(か)けて……みるか

コクピットに鳴り響く警報音の中で、オルスは非常用の迎撃システムをシェルに任せ、スロットルとコントロールスティックに全神経を集中させた。
戦闘領域に飛び込んだ途端に限界機動をしなければならないとは……。
オルスには敵パイロットがどうやってセンチュリアンの濃密な弾幕を回避したのか理解できていなかった。必殺の一撃のつもりだったのだ。
回避から反撃への移行の素早さも尋常ではない。
オルス機を上から押さえ込むように二基のミサイルが接近してくる。
スロットルへの握力を緩め、すぐに握り締める。
シェルは躍り上がるように加速を開始。
オルスは胸に加わった加速度で息を吐き出す。
ピナの放ったミサイルの第一弾は溶けた土に突入して炸裂(さくれつ)した。オルスのシェルはその爆発の衝撃波が追い付けないスピードで着弾点から離脱、通過点に火炎の糸を引きながら

さらに加速した。
二発目のミサイルは一発目の爆発をぐるぐるように飛行経路を持ち直して旋回、一段目のモーターを分離してメインモーターに点火、加速する。
黒い影の通過の後には、遠く土を巻き上げ跳ねまわるロケットモーターの残骸が残された。
このミサイルの追尾が正確であることを確認したシェルは迎撃プログラムを実行。着弾寸前に不可視のレーザーがミサイルの信管と誘導システムを焼いた。頭脳部分を破壊されたミサイルは末端神経の反射行動で翼を展開してバランスを保とうとする努力の後、姿勢が維持不可能となって畑に突入する。その炸薬が圧力で発火した。
回避のための加速開始から二秒後。オルスは減速を開始した。
オルス機がそばを通過したため、農家の窓が破壊された。トルネード対策の強化ガラスが砕ける衝撃が通過した。
ディスプレイで確認すると敵シェルは攻撃ポジションを解き、距離をおいて移動している。減速しつつあり、こちらよりも可能移動領域をたっぷり確保していた。
シェルのカメラからの視界、パノラマのように広がった視野で敵シェルが不規則な回避を続けている。
——こいつ、無人の戦闘機械じゃないのか？
マップ上で気味の悪い軌跡を描く敵シェルは、そんな感想が自然に感じられるほど人間

とは異質の存在に思えた。背筋を冷たいものが走る。
オルスはコントロールスティックを兵装コントロールに切り替えて、攻撃に出ることにした。それが今回の戦術的要請であったし、相手の予測のつかない攻撃を防ぎ続ける自信がなかったからだ。
ゆるやかに旋回しながらオルス機は火災の煙を突き抜け、敵シェルに接近を開始した。
ピナは、にじるように近付き始めた敵を見つめていた。
このパイロットは以前追い詰めたことのあるパイロットのようでもあるし、別人のようでもあった。
確かなのは、敵が優秀なパイロットで侮り難いということだった。攻撃に対する反応速度や対処の適切さからみて、相手がただのジーンメジャーではないと直感した。
そこで誘いをかけてみたのだ。
敵は易々と誘いに乗ってきた。
恐れが敵の行動原理となっているのが手にとるようにわかった。
——勝てない相手じゃない
むしろ、心理的空隙を突いて手玉にとることもできそうだった。
——敵が一機だけなら…
支援索敵システムを持たないピナ機はノーマ機をまだ発見していなかった。

敵シェルはこちらの動きにも反応せず、故障した機械のような回避運動を続けている。
——無人か…、パイロットが意識を失くしている？
何か理由をつけて自分に説明しなければ収まらない不気味さだ。
オルスは監視を続けながら、距離を置いて敵シェルを迂回し、反対側に出ようとした。
地下穀物サイロを戦闘に巻き込まないようにするためである。ガブリエル戦隊の状況はよくわからないが、タイムテーブル上では既に人質を解放、確保して撤収を開始していなければならない時刻になっていた。
オルスがスロットル操作のため、ディスプレイ上に視線を移した瞬間、敵シェルが軌道を変更し発光した。シェルはオルスの操舵に介入して緊急回避を試みたが間に合わなかった。
オルス機は右背面に被弾。オルスは衝撃を感じてから初めて攻撃に気付いた。
操舵介入を続行していたシェルは被弾した後、火薬で強制排除された外殻装甲から離脱するために加速してから、オルスにコントロールを返した。化学剤が浸透した装甲がその背後の地上で花火のような火を吹き上げて熔ける。
「上肢・肩甲第一装甲板剥離。外部レールに代替装甲形成」
シェルの損害対応アナウンスを聞きながら、オルスは兵装セレクタを機関砲からガンに切り替える。先制を期して後手にまわってしまった。これを繰り返せばやられてしまう。

*液化セラミックスで急速に形成された代替装甲は、岩のように盛り上がったただの塊で空力制御ができない。

機動力低下。

これ以上のハンデをもらう前に決着をつける――

オルスはシェルに即時介入の全力支援を要請する。

「*戦闘支援、モード1」

「モード1、準備」

「リリース」

「リリース、O.K」

オルスは再びスロットルを握りしめた。

回り込み、機動可能領域を確保しながらも全力での加速を始めた敵シェルを見たピナの頬が紅潮する。

――脳味噌（のうみそ）の時間は終わりね……

戦略と直感、兵装と肉が熔け合う時間だ。

――これがなければ……身体が塵（ちり）になり風に吹かれてしまう

目の前の事象から生き残れる肉体だけが真実になる。ピナにとってこれは存在の実証であり、官能であり、生の悦（よろこ）びそのものだった。

加速のショックで唇を噛んだピナは出血にも気付かなかった。

ノーマはオルス機とピナ機が地表数メートルでのドッグファイトに入るのをリアルタイムで見ていた。

最初、加速しながらも機動領域を確保していたオルスは敵の機動についていけず、ジリジリと自身の選択肢を削りとられていった。まだ、優位なポジションにあるうちに仕切り直しを図ると、そこを敵に攻撃される。

オルスは防御にまわり、敵シェルは一挙に機動領域を確保し攻撃に転ずる。

これをオルスと敵シェルが交互に繰り返していた。

機動の能力は互角と言えたが、有効打は敵シェル優位だった。オルス機の状況をモニタしてみると、敵は主武装支持架のある右半身の装甲を集中的に攻撃している。オルスのシェルの右半身はボロボロだ。

——だが、まだだ……

敵はノーマ機の存在に気付いているように射撃のチャンスを与えない。

——それに奴は何故、離脱しない？

ガブリエルの部隊に急襲された以上、この場での勝利は考えられない。常識的に考えれば、オルス機を振り切って撤退するべきだ。全力で加速すればオルスも追尾できない。

ノーマはレイモン・フレイの言葉を思い出した。

急上昇したオルス機は敵シェルの射撃で発火した対空地雷のロケット弾を回避。地面への加速で体勢を立て直そうとした。
警報音と衝撃が続き、右腕の主武装が脱落した。
——撃たれた！
——くそっ、わかってたのに！
バランスを崩して接地しそうになる機体をシェルと共同で立て直す。
オルスには敵シェルが次弾を装塡し、射撃態勢に入っているのがわかった。
この時、ノーマが射撃した。
堤を貫通した熱投射弾は敵シェルのサブブースタ*への至近弾となり、その一部と周辺の装甲を蒸発させた。減速、反転する敵シェルの背部で火炎があがる。
オルスは変針した敵シェルを追撃する。
「オルス、相手は対空地雷帯を必ず避ける。自分の戦術にしばられてる」
ノーマからの通信が入ったが、オルスは返事をしなかった。まばたきをしただけで殺されてしまいそうなのだ。
「聞いてるか？　相手のパイロットはなるべく殺すな」
——勝手な！
オルスのシェルは残っていた最後の高機動ミサイルを発射した。これはオルスの予想外

のことだったが、すぐにシェルの意図がみえた。
――ハメられるぞ！
ブースタの火災を抑えたものの機動力が低下した敵シェルは対空地雷が設置された戦闘域に向かいつつあった。先読みで機関砲を精密射撃で発射。
オルスの放った機関砲弾は対空地雷を発火させた。
しかし、敵シェルの動きはオルスの予測を裏切った。
敵シェルはコンテナから発射される小型ロケット弾の間を全力加速で突き切り、オルス機と並んだ。

偶然か意図された行動かはわからない。
オルス機とピナ機は並行進路をとっていた。シェルの幅ほどの間を置いて。
互いを目の前に目視した二人のシェルドライバは同時に反応した。
ピナは兵装コントロールを、オルスはスロットルを操作。
ピナ機のガンに装塡されていた徹甲弾は、オルス機の減速で一瞬前そこにあった空間に発射された。
オルスはスロットルを修正、兵装コントロールを操作。
ピナはガンに次弾を装塡、全力射撃をフロー言語で指示した。
オルスとピナは変針しなかった。

オルス機のセンチュリアンの射撃開始がほんの一瞬早く開始され、ピナ機のガンに装塡されつつあった化学弾が炸裂する。ピナ機の対空機関砲が至近距離からオルス機のコクピット装甲を叩く。

ピナ機のガンの砲身が熔け落ち、オルス機の装甲が弾け飛ぶ。二機のシェルは赤熱した装甲の破片と爆煙、衝撃波で互いを包み込んだ。

ディスプレイの半分が死に、警告灯が一斉に点灯する。

頭蓋骨を殴られるように響く音。

振動で一点を見ることができない。

オルスはトリガーを引きっぱなしにしているつもりだったが、シェルが射撃弾数を調整し、右腕の残りでコクピットと機関砲をカバーしているのに気付くと減速した。

同時にピナ機は加速する。

視界が戻ると同時にオルスは再びトリガーを引いた。

何かを投下する体勢に入っていたピナ機はこの射撃に対応できなかった。

オルスは指が潰れるくらい強くトリガーを引いて全弾の発射を意思として表わした。今度はシェルもこれに同調した。

左半身の厚い装甲を避けて、ブースタ部に砲弾が叩き込まれる。

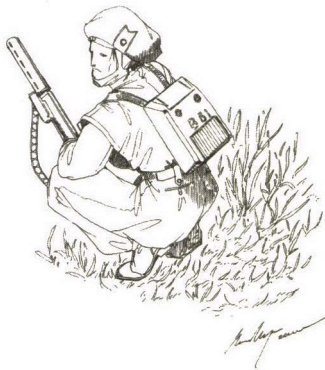
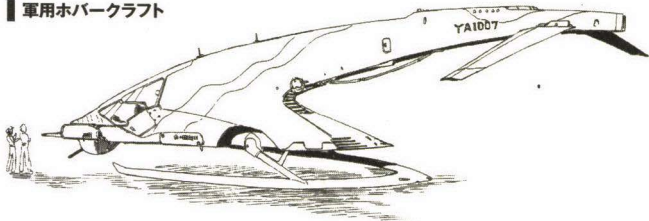
脱落したピナ機の装甲がオルス機を直撃したが、シェルは最後の力を振り絞るようにし

て針路を維持、射撃を続行した。
ピナ機の装甲がみるみる削られる。
十発の曳光弾(えいこうだん)を最後にセンチュリアンは全砲弾を撃ち尽くした。
残った外殻装甲と補助翼を展開し、上昇しようとしたピナのシェルはブースタの火災で降下し、接地すると空中に跳ね上がった。
ピナは両足の骨を砕き、ディスプレイに顔をぶつけた。鼻血が額まで広がる。
——ようやく解放される、と考えたピナは、忘れていたことを思い出した。
一卵性双生児の妹の名はティナだ！
美しく賢く凶暴なティナ。海で溺(おぼ)れていなければピナを殺していただろう。
すべては導師*が決めたことだ。
たったひとり分の「枠」に双子の姉妹。
導師はこう言った。
「生き残った方が本当の娘だ」
ジーンメジャーの法はこうした淘汰(とうた)を全面的に認めていた。
脳から薬(ドラッグ)が抜けてゆくのを感じながらも、ピナはティナの幻影を見た。
ティナはピナにこう言った。
「姉さん、やっとくたばるのね。ずっと一人で待ってたのよ」

ピナは尋ねた。
「……あたしを殺したかったんでしょ。どうして、さっさとやらなかったの？」
幼いティナは小首をかしげて考えこみ、肩をすくめてから手をピナに差し出した。
ピナはその手をとろうとした。
そして、コクピットに流れ込んだ熱い金属がピナ・パワーズの肉体を焼いた。
「殺しを楽しんだようだな…」
ノーマから声をかけられて、オルスは我にかえったがしばらくの間、喋（しゃべ）ることができなかった。
「勝利者」…と自らを思うには、あまりに実感がなかった。何より、オルスは単に生き延びるのに精一杯だっただけだ。
だが、腹の中で蠢（うごめ）く熱い塊…。
オルスにはそれが何かわからなかった。

地上戦における兵士たち

ピナが地上戦を展開しているとき、戦っていたのが彼らである。
この時代ではごく普通、いや、粗末なほうかもしれない装備だが一応解説しておく。
地上戦を仕切る騎兵は現代のヘリコプターに似た乗り物で管制されている。高周波発生器により空を飛び、ホバリングが可能だ。
兵士たちは簡単なボディ・アーマーに、ワンピースの対ショック戦闘服を着込んでいる。背中にはＧＰＳ（衛星位置確認器）を備えたパックを背負う。大きなレールガンを持っているのは重機兵で、レーザー・マシン・ブラスターとエネルギー・グレネード、対装甲ヒートガンがすべて装備されたコンポジット・アームスである。非常に重いために２人で扱う。
しゃがんでいる兵が持っているのは一般でも売られている軍用ブラスターである。たぶん現代のＡＫクラスである。ただし、レールシステム（ライフルなどの先端や回りに装着する付加装備、スコープやダット・サイトなど）はフルパックで装備され、ブラスターの発射光を隠すサプレッサー、ノクト・ビジョン（暗視装置）、フラッシュライト、トレーサー、スコープなど現代でも特殊部隊にしか装備されていない高価な装備がごく一般的に付けられている。時代を追って軍用装備というものがどんどんとエスカレートしていくのは仕方がないのかもしれない。敵が最新装備で攻めてくるのにこっちは「種子島」で迎え撃つ、なんてことは、あり得ない。

軍用ブラスターを持つ防空軍兵

軍用ホバークラフト

防空軍地上重機兵とレールガン

12

生存支援

Victor's Principle

ガブリエル大尉の部隊が農場に突入したのと同じ時刻に、ベルタ・ギースはポート・ヴィアネイから出港した。これは*ドック管理官だけではなく、船長のティプタフトさえ聞いていなかったことだった。

ドック内でベルタを監視していた*連邦警察捜査官たちは、急に鳴り響きはじめたエアロック警報でベルタ・ギースが繋留（けいりゅう）されている*埠頭（ポートブロック）に殺到した。

ベルタは複数のエアロックで埠頭（ポートブロック）に繋留されていたのだが、それを強制的に閉鎖して離岸しようとしていた。

ジーンライナー船側からの*離脱コマンドを受けた*貨物エアロックが次々に閉鎖され、港湾作業員数名が隔壁内に閉じ込められてしまっていた。

大声で怒鳴りあう作業員や捜査官の間で、ポート・ヴィアネイでの休暇をとるためにたった今ベルタから下船したばかりの乗組員たちが口をぽかんと開けて立ちつくしている。

――ベルタが出航した？

――まさか！

――俺を残して？

――まさか！

彼らはベルタに切り捨てられてしまった人々だった。

新たな環境で人生をやり直しなさいと宣告されたわけである。

まったく新しい環境に放りだされた動物はたいていの場合、数日の命しかない。我々の社会はその命をもう少しもたせてくれる仕組みになっているが、基本的な事情が変わるわけではない。

動物たちよりもう少しジワジワと死なせてくれるわけだ。

競争、選別という勝敗のもたらす栄光と死。我々の歴史がかつて、そのことと無関係でいられた事例はない。

生と死で分けられる勝敗は生物の基本原則である。我々が地球で発生したＤＮＡを持つ限り、これ以上わかりやすい原則はない。

同じ頃、ヴィアネイの地上ではジーンマイナーの小学校を視察していたジーンメジャー*の上院議員が射殺されていた。

犯人は小学校五年生の男の子だった。彼はポケットから取り出した小型の拳銃で担任の男性教員とボディガードの股間を撃ち抜き、その後、議員の額を撃った。

そして、既に即死していた議員の体をかばうために間に入ったもう一人のボディガードの股間も撃った。

少年はよく訓練された冷静な射撃の名手だった。骨盤が砕けてしまった教員は失神し、ボディガードの一人はその場にうずくまり動けなくなった。もう一人のボディガードは怒りに痛みを忘れて、狙撃者の少年を射殺した。

犯行の動機は、その前日に加えられた体罰だった。

少年のクラスメイトの女の子は両親にこう語っている。

「あの子、いつもぶたれてたから、オトナたちのきんたまをふっ飛ばしたと思う」

両親はその内容より娘の言葉遣いにショックを受けた。

加害者の両親は子供にも扱える拳銃を製造したとして銃器メーカーを告訴し、担任教員とボディガードは少年を虐待したと世間から非難された。

ヴィデオグラムの前でジーンマイナーのティーンエイジャーたちは、きんたまをふっ飛ばされる大人たちを想像して楽しんだり、ふっ飛ばされる自分のペニスを想像して恐れたりした。

そして、こう考えるのだった。

――ふっ飛ばされるより、ふっ飛ばす側になりたいよな

死と暴力に関して、我々はおおむねこういう風に考えるようにプログラムされている。言い替えれば、我々は死と暴力に関して理性的に考える能力がなかった。暴力の嵐をくぐり抜けた生存者は誉め讃(たた)えられたり、時によっては非難されたりした。

だが、我々はひとり残らず、こうやって生き残ってきた。それが我々にとって、最もわ

かりやすい「勝利者」の原則だったからだ。

「勝利者」の物語は繰り返し語られてきた。

ライバルに勝ち、交配の相手である異性を獲得する青年（ないしは娘）。田舎から出てきた少年が体力と財産と教養のある男を打ち負かし、相手の財産と恋人を横取りするサクセストーリー。

何の悩みもないことが唯一の悩みである青年（ないしは娘）が故意にトラブルを引き起こして、それを首尾良くくぐり抜けることで死の通過儀礼を済ませたように錯覚させる物語。

社会の歯車、奴隷になりながらも、自分だけは違うと考え続けている大人以前の青年（ないしは娘）の心の支え、ファンタジー。

そうしたファンタジーは、決まって配偶者の獲得にまつわる諍いがひとつのメタファーとして登場する。

そういう物語を欲する大人は幼稚だという意見もある。本当に語られねばならない物語とは、そんな幼稚なものではないと。

だが、それは嘘である。

我々が生き残りゲームを続けるように仕掛けられた機械である以上、同性のライバルを（正義のために）殺し、優れた異性を獲得する物語の魅力に我々は抵抗できない。

我々のＤＮＡが、原則として「物語」はそこで終わっていいと言っているのだ。生物学的に見ると、それ以外の物語を欲する方が異常なのだ。
至福の楽曲の完成も、美や究極の味の追求も必要ない。
不倫、家庭の危機、結婚の破局、性的冒険、第二の人生の追求、そして富の追求や王国の滅亡、宇宙帝国の興亡についての物語はそれのバリエーションにすぎない。
だから、我々はこれからもゲームの勝利者になるため、殺し、嫉妬し、嘘をつき、足を引っ張り合い、他人の栄誉を掠め取ることを決してやめないだろう。
自分のＤＮＡで地を満たす日まで…。

「唯我独尊を決め込んだ防空軍を除いた陸海宙軍が珍しく足並みを揃えている。今度は政治ではなく軍事作戦のつもりらしい」
パースウォーデンの死で船長に昇格することになったノヴァーリスは、オルスとノーマの前を落ち着きなく歩きまわりながら状況説明を続けている。心労のためか小柄な身体がさらに縮んだようにも見えた。ノヴァーリスは言葉を区切るたびにノーマの顔をちらちらとうかがっていた。
自信のない生徒が教師の顔色を盗み見るように。
バルト船内のブリーフィングルームに集まった面々はノヴァーリス船長の言葉に気をとられ、そのことには気付いていないようだった。

状況は急展開していた。

ベルタ・ギースはポート・ヴィアネイを出港した。連邦警察と宙軍はそれを阻止できず、もう少し時間が経って冷静になった時には阻止する気力がなくなっていた。彼らは周囲に恐る恐る尋ねてまわった。

──ベルタ・ギースの出港を我々が妨害しても大丈夫なのか？

上院議員と官僚たちと連邦警察長官と宙軍参謀本部は誰かが発言するのを待つつもりだった。ある議員は秘書との会話でこう言った。

──誰かがホカホカのウンチをつかまなきゃならん。だが、そりゃ、わしじゃないな！

議員の言葉に秘書はうなずいた。ごもっとも。

結局、誰も意味のあることを言うことができなかった。

陸海宙軍は一致協力して事にあたるために対策司令部を設置したが、何をなすべきか理解している人物は少なかった。そのうちの一人、フォークト提督は水面下でバルトライナー社のエージェントと接触を続けていた。その結果、提督の関心は軍の行動から自分の老後に徐々に移りつつあった。

なされるべき計画の全体像は既にグズグズに崩れはじめ、すべての人にとって無害で安全な代物になっていった。

ただ、内務省外務二課という妙な肩書の調査官たちが閣僚と宙軍への接触を開始していた。忘れられていた部署だが、外務課は世界政府樹立前の外務省の末裔であった。

人質奪回作戦は成功とも失敗ともつかない終わり方だった。「盗み出された宙間作業機」を奪還し、麻薬マフィアの傭兵グループを殲滅して残りの人質を無事解放することができたが、船長と農場主が殺され軍の特殊部隊は大損害を受けた。
それにもかかわらず、オルスは警察から人命救助協力感謝状をもらうことになった。
これについてのノーマのコメント。
「我々は民間人だからな」

盗み出された宙間作業機。
人命救助。
民間人。

恥知らずな嘘と欺瞞。どこかの金持ちの妾を女優と呼ぶようなものだ。
オルスはこうした現実に対して、できるだけ冷静に対処しようと努力した。具体的には何も言わず、何も考えないことにしたのだ。
人間はどんな悪臭や騒音にも慣れることができる。
善であるとか、悪であるとか、倫理的にどうであるとかの判断をしているヒマはない。目の前に突き付けられた銃口をかわし、生き残ることで精一杯だ。

——善も悪もまとめてクソ壺に落ちろ!
塹壕の中で疲れきった兵士たちが感得する不変の真理。オルスもこの真理に賛成だった。
「しかし、ベルタは捕捉されないだろう。宙軍は事情を知らない連邦警察に軌道から離脱させないと約束している。だが、ベルタとローヌは競争を続ける。ゲームは終わってないのだ」
ノヴァーリスはおごそかに宣言してみせたが、その理由は説明しなかった。説明しようにも、どうしてベルタ・ギースが連邦警察の捜査からまぬがれることができるのか、宙軍や政府がこの事態をどのようにとらえているのかをまったく知らなかったからだ。
確かなのは、パースウォーデンのかわりに自分が武装クリッパーの船長となり、すべてを知っていてその説明をしない、というふりを続けなければならないということだけだ。
ノヴァーリスはカメレオンのようにすばやく環境に適応した。彼にとって大切なのは真実だの洞察だのではなく、自分が他人から見てどういう風に見えるかだけだった。
武装クリッパーのブリーフィングルームにいる人々は無論、こういう処世術に異論はなかった。オルス以外は…。
オルスは知っていた。このブリーフィングルームにいるメジャーとマイナーの中でいちばん多くのことを知りつつ、何も知らないふりをしているのがノーマ・クイックだということを。
ノーマが船長室に時々呼び出されるのを知っていた。ノーマはパースウォーデン船長と

話をするために呼び出されたのではないことも知っていた。
　ノーマはローヌ・バルトと会話していたのだ。
　ジーンライナー、武装クリッパーとの対話…。
　共通の友人の噂やショッピングの話じゃないことは確かだ。
　ローヌが船長である自分よりもノーマと会話したがることに、生前のパースウォーデンが苛立（いらだ）っていたことは公然の秘密、船内の楽しいゴシップだった。ただ、内容については誰も知らなかった。
　ノヴァーリスのようにプライヴェートな不可知論という殻で自我を慰めるをよしとしなかったパースウォーデンは、ノーマが船長室に呼び出される度に精神安定剤を口に放りこんでいた。今、オルスの胃もむかついてきていた。
「船長、これからどうなるんです？」
　オルスの声が狭苦しいブリーフィングルームの空気をにわかに緊張させた。「これからどうなる」はここにいる航海士や技術責任者、甲板長、管制官たちの共通の疑問であり、口にしてはならない言葉でもあったからだ。誰しも船長に答えられない質問をするべきではない。例えば、神は何を考えられているんでしょう…とか。
　オルスは意表をつかれた表情のノヴァーリス船長をまっすぐ見つめながら、隣のノーマの気配をうかがっていた。オルスはノーマに質問したのだ。
「…これから……」

ノヴァーリスは口を開いた。
「……これから、どうなるかは…これから話す。ミスタ・ブレイク、質問は許されてない」
「ゲームは終わっていないって、どういう意味ですか？」
甲板員の誰かが非難の意思表示で舌を鳴らすのが聞こえた。船長を見据えたままオルスは考えた。
——舌だろうとケツだろうと好きなだけ鳴らせ！　死ぬのはお前じゃない！
「ミスタ・ブレイク」
ノヴァーリスは困ったように言った。みせかけではなく本当に困っていたのだ。
オルスはこの紳士的で人当たりのよい船長をもっと困らせてやりたくなった。
「どうして、我々は競争しているんですか？　信じられないほど強力な兵器を使っているのに、政府や軍はどうして傍観しているんですか？」
ブリーフィングルームの中は騒然となった。さまざまな声が聞こえた。「静かにしてろ」「コドモじゃないんだから…」「何を考えてるんだ」「オトナになれ」「船長に喋らせろ」云々。
喋っている人間は誰も答えを知らないようだった。
ノーマは前を向いたまま沈黙を守っていた。
ブリーフィングルームでの状況説明が終わった後、オルスは自室に引き籠もった。独り

で考えたいことがあったからだ。会議が終わった後、ノーマは、
「コクピット装甲が貫通寸前だったそうだ。相手の行動に飲まれて無茶をするな。自分の戦略的スピードを維持しろ」
とだけ言い、オルスと目も合わせず立ち去った。
——ノーマは何もしゃべらないだろう…
わかっていたこと、予想通りのことだ。だが、喋らずにはいられなかった。撃破した敵シェルのパイロット名が逮捕者の尋問で明らかになってから、オルスは考え込まざるを得なくなったのだ。
——元NLACパイロット、パワーズ…
——これは本当は戦争なのか？
——ジーンメジャーの中のジーンマイナー…。バルトライナー社はどうして俺を選んだんだ…
——ベルタのシェルドライバ、フレイは何が言いたかったんだ？
ベッドに腰掛け、足を椅子の上に投げ出したオルスは考えても答えが出ないことをもう一度整理しようとした。
——競争、ゲーム…
——勝利者……。利益だ！
——…誰かが得をするんだ……。誰が？

──ノーマやフレイや…俺は得をしてるか？
シェルドライバの報酬は航海士たちより多く、船長より少ない額を貰（もら）っている。これは実戦任務についている軍のパイロットたちよりも遥（はる）かに恵まれた額だ。
しかし、使われる側のシェルドライバの報酬は推論の出発点に過ぎない。使う側の人間は使われる側より得をしている。使う側の人間は…
──ローヌ・バルト、バルトライナー社、ジーンライナー…
──それにギースシッピング社…。だが……
ジーンライナーの経済的競争は経済的成功を目指しながらも、ジーンライナー自身は富自体には無関心であるという変則的なものだ。
──ジーンライナーの競争…。それにどういう…
そこまで考えたところでドアがアナウンスを寄越してきた。
「来客です。管制官デルビー・アイバース」
オルスは無視するかどうか少し迷った末、「入れてくれ」と答えた。
ドアが開くとオルスの位置からデルビーがこちらを覗（のぞ）き込む顔だけが見えた。
オルスが無言でうなずいて見せるとデルビーは狭い場所をすり抜ける猫のような身のこなしで部屋に入ってきた。無表情を装っているが軽い怒りと不安の匂いがしそうな雰囲気だ。
実際には、足を投げ出している椅子のそばをすり抜けるときに薄いコロンの香りしかし

なかったのだが。
——彼女はマイナーじゃない…。間違えるな
オルスは無言のままデルビーを目で追った。彼女は座る場所を探すふりをして、オルスがそれを無視すると机の上に腰を持ち上げて座った。腕を胸の前で組んでいる。
デルビーはオルスの顔をまばたきもせず見つめた後、天井と壁に視線を移した。
二人とも無言のままだ。
デルビーは無言でそこにいることでこちらに考えさせ、喋らせるつもりだ。
——……考えない。何も考えないぞ
オルスは我慢しようと努力して、それをすぐに放棄した。

「人間はパイプみたいだ」
とオルスは言った。
「……。消化器のこと言ってるの？」
机に腰掛けたデルビー・アイバースがそれに答えてくれた。ようやく息ができる。
「パイプだよ」
「だから、胃や腸や食道のこと？　そういう表現してる小説読んだことあるけど」
「ちがう。廊下にあるようなパイプだ」
オルスの居住区の通路の天井にはパイプが這い回っていた。そういう風にデザインされ

ているのだ。

『『もっとオトナになれ』と言われた人間は他の誰かに『もっとオトナになれ』と言う。『カス』と罵られた人間は別の人間を『カス』と罵る。入れたものがそのまま出てくる」

オルスは目の前の仮想のパイプに左手でインプットし、右手でアウトプットされたものが飛び去るジェスチャをつけた。口でヒュッとアウトプットの飛び去り方を補足した。

「ふーん」

「自分の中から出てきたものは人に上手く語れない。本当は自分の中から出てくるものなんか何もないのかもしれないけど…」

「そう」

「殴られたと感じた奴は人を殴るんだ……。人を殺した俺は実は昔、誰かに殺されていたのかもしれない」

オルスは自分のシェルの腕の部分に描き込まれていたキルマークを思い出していた。ギースシッピング社の社章にバッテンがついたマークだ。無邪気な若い整備員が描き込んでくれたのだ。

「罪悪感の表明と釈明？　若きヒーローの苦悩ってわけ？」

「違う…と思う。生き残れて本当にほっとしてるからね」

「そう」

「今度はキミが思っていることを言う番だ」

「何も思ってない」
「……」
妙な雰囲気だ。デルビーは少し間を置いてから話し始めた。
「気付いてないかもしれないけど、今、私は当直の時間にここに来てるんだ」
時計を見ると確かにC群管制の勤務時刻だった。
「勘違いされないようにあらかじめ言っとくけど、アタシは母親だの恋人だのとは違いますからね。自分の意見とかいうものは持ち合わせてないの」
呆気にとられているオルスの前でデルビーは小噴火を始めた。
「外殻装甲とエンジンの換装が済んだのに、チェックシートにパイロットのサインがないんで困っている可哀想な人たちがオルゴンボックスにいるわね。早めに作業を終わらせたあの人たちが悪いんでしょうけど。それと…」
返事をしようとしたオルスをデルビーは手で遮った。
「ノヴァーリス船長の話はちゃんと聞いてたよね。あれからさらに状況が変化して襲撃の可能性が高まってきて、ヴィアネイ出港が繰り上げになりそうね。ノーマは装備換装のテストをしてるわ」
慌てて立とうとしたオルスの先を制するようにデルビーは立ち上がった。身体がぶつかりそうになったオルスは再びベッドの上に腰を落とすことになった。
「ヴィアネイの軌道上を機動する場合は私の管制に従ってもらいます。……管制中にテッ

ガク的瞑想にふけったり、船長にからんだり、目の前にないもののことをウジウジ考えてるシェルドライバがいたら、アタシがこの手で叩き落してやる！」
デルビーはオルスに指を突きつけてみせた。オルスは現実の人間に指を突き付けられたのは生まれて初めてだった。
「先が見えなくて、死の危険にさらされてるのは別にアンタだけじゃない。この船の乗員すべてが生き残りたいと考えてるのを忘れないでほしいわね！」
デルビーはドアに向かいかけてから、ふと振り向くと椅子を蹴飛ばしてから出ていった。
小さな嵐が過ぎ去ってほっとする時間はなかった。オルスは急いでシェル格納庫であるオルゴンボックスに向かった。

レイモン・フレイは自室の端末で生存支援システム*とルイス・コテスのプロフィルを読んでいた。
ポート・ヴィアネイから予告なく出港したベルタ・ギースは他の商船の航路を侵し、宙軍の哨戒艇の警告を無視してヴィアネイ軌道を離脱した。
ギースシッピング社との連絡でこの出港が本社の指示であることが確認されたが、それでティプタフト船長の心労が軽減されたわけでもない。
フレイはベルタの管制ブロックに呼び出され、疲れた顔の船長から直接、新しく配属されたシェルドライバ、ルイス・コテスを紹介され、生存支援システムのデータファイルを

渡されて作戦立案を求められた。コテスはジーンメジャーだったが、中肉中背の特徴のない男性++だ。

辺境の中流以下のジーンメジャーによく見られる肉体デザインだ。彼らが生活している環境では、こうした肉体が生存に有利らしい。コテスは緊迫した管制ブロックの中で、何も問題がないかのように如才なく微笑み、完璧(かんぺき)で無味無臭の握手をこなすタイプの男だった。

船長から受け取ったファイルによると、元空軍パイロットでギースシッピング社がスカウトするまではヴィアネイで*農業航空パイロットをしていた。

彼は*契約結婚で別の大陸に住む相手の希望通りに子供一人をもうけている。ジーンマイナー系機械メーカーと低水準特許契約を結び、特許使用料を受け取っている。健康体、疾病手術歴なし、歯も完全だ。

ジーンメジャーとしての軍務も農業パイロットの職もおそらく税制上の対策だろう。コテス家はそこそこの資産を持っていた。シェルドライバになった理由は不明だ。この面ではフレイも同様だが……。

彼はギースシッピングと契約した後、*二百五十時間のシミュレータ訓練を受け、最高水準の成績を残している。

——ピナよりは好ましい人物というわけか……

いかにもジーンメジャー好みの人間だった。

——この男に怒ったり泣いたりする機能もついていればいいが……
フレイはマイナーと一緒に働くのを好む変わり者だった。
コテスのファイルを人物フォルダにスピンアウトさせて、生存支援システムのファイルに目を通す。
技術者が書いたらしい専門用語と回りくどく正確な表現の迷路から読み取れるのは、これが無人の戦闘ロボットらしいということだった。彼の主張によると、
——人間の死は、その実現までに時間がかかりコストを押さえることができないらしい。効率のよい成長と死を*スレーブ族と呼ばれる戦闘ロボットが実行することで*マスター族の時間を圧縮する。マスター族とはシェルとシェルドライバのドライブスキルの一部を指すとある。
別の場所にドライブスキルの定義が述べられており、この言葉だけで一覧表示が不可能なほどのリンキングがなされていた。このリンキングリストの中に論文発表者としてローヌ・バルトの火器管制官の名前もあったが、フレイにとってはその他大勢の一人に過ぎなかった。
ベルタはポート・ヴィアネイで船倉いっぱいにこのシェル・スレーブ族を積み込んでいた。
船長はフレイに作戦立案を求めたが、実質的には作戦はすでに規定されていたに等しい。単に責任所在の問題だ。

——新兵教育は敵任せか。…コスト面の言及も必要だな

フレイはディスプレイの生存支援システム仕様書をキャビネットにスピンアウトさせると、*デーモンを呼び出してジーンメジャー、ルイス・コテスの評価額の試算をさせ、作戦(ミッション)立案書(プラン)にとりかかった。

肩を押されてノヴァーリスは目覚めた。

「船長、アラート・フェーズトゥーが宣言されました」

二等航海士が言った。

薄暗い管制室の中央にある宙域シミュレータが柔らかな光を放っている。

座った姿勢で眠りこんでいたノヴァーリスは体を起こした。彼の正面にある宙域シミュレータの半分以上の体積がノイズで覆われている。バルトはまだポート・ヴィアネイに入ったままだからである。

「高速飛翔(ひしょう)体五機、加減速しています」

ノヴァーリスは前に乗り出すようにしてシミュレータを凝視した。

「……バカな…、まだ、こっちはヴィアネイにいるんだぞ」

「バルトは全乗員を収容後、エアロックを強制閉鎖しました」

「…周囲の*状況はどうなってる」

「ポート・ヴィアネイ管制にはこちらからも警報を出しました。ポートブロックからの人

員退避が始まってますが完了はまだ先です。軌道上に宙軍フリゲート艦が接近中です。艦名はフラーです」
「何か起こると介入するかもしれんな…」
「宙軍からの連絡はまだありません」
「…出港できるか？」
「物資、貨物積載も完了してます」
ノヴァーリスは即答を避け、手で口を隠すようにして考え込んだ。
今まで外宇宙を航行時以外に襲撃を受けたことがなかった。ポートブロックに接岸したクリッパーを襲撃するということは、単に航路を妨害するというよりも…
――バルトを損傷させることが目的なのか
バルトをポートブロックの外に出すのはかえって危険かもしれなかった。
しかし、ポート・ヴィアネイの封鎖が敵の目的なら今すぐ出港する必要がある。
宙域シミュレータ上の五つの赤い光点は長いベクトル表示に乗っている。今はそれらが全力で加速し、ポート・ヴィアネイに殺到してきている。
「……ミス・クイックはどうしてる？」
「オルゴンボックスで待機中です」
「…ヴィアネイ管制に連絡して出港する。ポート・ヴィアネイ外でアラート・フェーズスリー」

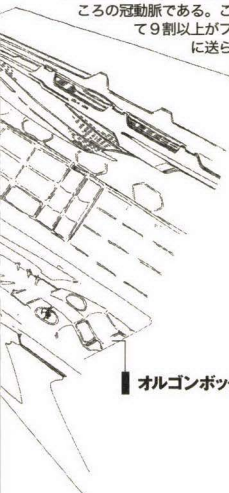
待機していた管制官たちが一斉に動く。

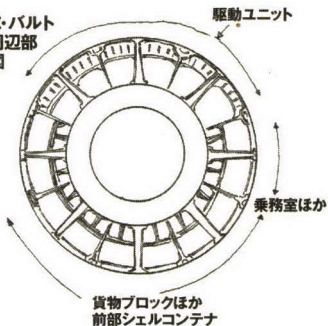
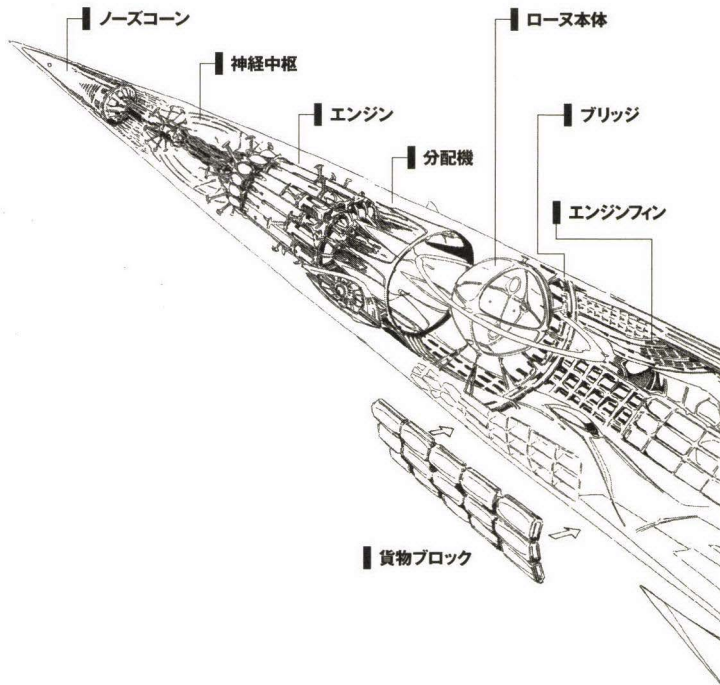
「ミス・アイバース、*軌道上の情報をヴィアネイ管制から受け取ってくれ。航路索敵（シェルブリット）準備」

ローヌご本人からは「年端もいかない少女をひんむくなんてどういうこと？？」などと怒られそうだが、致し方ない。とりあえずやっておかないことには。
左から見ていくと、ビークヘッド内のノーズコーン。これは先端の「重し」である。「え？」と言われても困る。ここは最も重要な感覚器官があるのではなかったのか？？　とりあえずそれは置いておいて、なにやらバランス的にここにバラストを載せておかないとジーンライナーの体調が悪いようだ。と、言うより運動性や燃費など意外なところで弊害が出るのだという。ものすごい索敵システムとかメイン・ロジックとかあるのではと思われた方、申し訳ない。コーンのすぐ後には神経列が網膜のように走っている。ここが感覚器が集中するところである。ノーズコーンによって守られているとも言える。
そのすぐ後にある、筒が束ねてあるように見えるもの。これがロケットモーターのメインエンジンである。
強力な出力を生み出すすべてのエネルギー源であり、ローヌの心臓である。
ロケットモーターにより生み出されたエネルギーはファンクションされ、すぐ後の円筒形のエネルギー安定器に貯められる。人間で言うところの冠動脈である。ここから後部に向かって９割以上がフルレット・フォーンに送られ、推力となる。残りは船体のエネルギーである。

ローヌ・バルト内部

中央、球形のものこそが「ローヌ・バルト」。残念ながらこれ以上脱がすことは差し控えた、と言うか、ものすごい抵抗に遭いました。やっぱり、花も恥じらう14歳の乙女はかたくなです。
乗組員のメインブリッジはこのすぐ上にある。
さて、この本体、直径はシェルの７、８倍近いが、この中のどこまでがローヌの中枢なのか、覗いたものはいないのでわからない。ともかく最も強力な保護システムと外板によって守られている。
後部はほとんどが貨物コンテナである。団地か蜂の巣のように細かく区切られている。この区切りひとつひとつが強力な外壁となって、船体強度を大きく上げている。また、個別化されていることで戦闘損傷による破壊の規模が最小限になるというメリットもあるが、荷主にしてみればたまったものではない。
その下部にあるのは前回説明した武装およびシェル格納庫「オルゴンボックス」。船体上部を走っているのは、後部フルレット・フォーンにエネルギーを送るバイパスである。

断面図はローヌのもの。
船体中心は空間になっている。貨物ブロックの予備でもある。上部はほとんどが動力関連のマネージメント・ブロックである。
船体側面は貨物と乗組員の居住区となる。
…ところで？　デルビーたちがいるコントロールルームってどこ？？

オルゴンボックス

ローヌ・バルト
本体周辺部
断面図

ローヌ・バルト
内部透視図

13

軌道迎撃戦

Orbit Attack

地上と結ばれたエレベータシャフトを中心に連結されたポート・ヴィアネイ構造物の中で最も巨大なポートブロック「ゲート1」。この宇宙船ドックの基本構造は数世紀前に作られ、補修と改装をされながら現役で使われている。

人類が*最初の外宇宙有人探査船を送り出し、*最初のジーンライナーが帰還した場所だ。

ここは長い歴史の記念品と栄光の記憶で飾られた一種の聖地でもある。

だが今、一隻の武装クリッパーがここから荒々しい発進を試みていた。

「バルトが射撃要請してます」

バルトとのフロー言語会話を終えた一等航海士がノヴァーリス船長に報告した。

「射撃？　何を撃つんだ？」

「ポートブロックの可動作業壁です。進路の邪魔になるそうです」

「進路の邪魔……、ルーティンの進路誘導はどうするんだ」

「バルトは既に管制指示を受けてません。*予測戦闘領域に直進するつもりです」

「…………直進…。ここで…ここから加速するつもりか！」

「そうです。ポートブロックの人員退避確認と本社の了解も受けているそうです…。射撃

のカウントダウンが今始まりました」

管制ブロックにいるすべての人間はノヴァーリス船長を一斉に注視した。その場合、管制ブロックの全スタッフがその証人となる。

船長にはジーンライナー船の行動を抑止勧告する権限があった。その場合、管制ブロックの全スタッフがその証人となる。

船長は自分のこぶしを噛んでいた。カウントダウンを止めるべきかどうか判断がつかないのだ。

バルトライナー本社の了解を得ているということは船長も当然、その判断に従うべきなのだろうが……。

常識的に考えると、とんでもないことだ！

――港湾施設を破壊するだと⁉

ノヴァーリスは、なぜあの時止めなかったのかと責めたてられる自分の姿を思い浮かべながらも、とうとう何も言えなかった。

カウントはゼロになった。

ローヌ・バルトの外殻部に設置された十二基の砲塔のうち八基が凄まじい連続射撃を開始し、ポートブロックの作業壁が端から溶け去るように消えてゆく。

バルトは狭苦しいポートブロック内で回頭すると同時にサブエンジン*に点火、まだ破壊されきっていない作業壁へと加速を開始する。

バルトの舳先が外に出た時点で四基の砲塔がまだ射撃を続けていた。作業壁が堅牢で破壊しきれてなかったのだ。さらに加速してゆくバルトのスピードに追いつけず、隔壁の端が一基の砲塔を擦りつぶした。
　が、バルトは何事もなかったようにポートブロックの外に出るとメインエンジン*の点火準備を始めた。巨大なノズルの内部がしゃくりあげるように数度明滅した。
「第五外殻部砲塔が損傷。気密壁及び気圧に異常なし」
「本当にここで加速する気なのか!?」
　ノヴァーリスがたまりかねて言った。
「その……、バルトは既にメインエンジンに点火しました」
　一等航海士が船長をうかがうように見た。メインエンジンの緊急停止命令に備えたのだ。
「う……うむ…」
　もちろん、ここで船長がエンジンを停止させることはできない。破壊されたポートブロックのすぐ外で立ち往生することになるからだ。
　エンジン出力が上がり、規定以上の加速を警告するアラートが鳴り始める。
「中央管制より各ブロックへ、本船は緊急加速を一分後に実行します。マニュアルシートのチャプター*64からを至急——」
「オルゴンブロック、カタパルト上のチェックが終了次第、管制へ報告を——」

騒然となった中央管制室の中でノヴァーリス船長だけが淡く光る宙域シミュレータをじっと睨んでいた。

――ゲームは終わってない…か

――だが、ルールは修正されたようだ…。ジーンライナーどもめ！

ノヴァーリス船長が心の中でパースウォーデンそっくりの悪態をついた時、バルトの巨体は加速を開始した。

「コテス、バルトが動いたぞ」

先行する三機のシェル・スレーブ族を追尾していたルイス・コテス機とレイモン・フレイ機はまだ有線接続でリンクされていた。新しく積み込んだコテス機の学習進度が予定よりも遅れていたため、フレイ機の生の戦術学習データを直接更新で取捨選択させているのだ。

コテスはフロー言語を使ってコクピット内で選択する戦術内容をシェルに指示している。コテスのフロー言語は古代呪文の詠唱のようだった。

コテスは閉じていた目を開いて、宙域シミュレータを見た。拡大表示された軌道上のポート・ヴィアネイから長い直線が飛び出している。シミュレータ表示がズームされて、直線の先端に追い付いた。

宙港から通常の手順で加速したのでは得られない速度をバルトは獲得していた。

ヴィアネイのギースシッピング支社から、ポート・ヴィアネイのゲート1を内側から破壊して緊急加速を行なうローヌ・バルトの映像も送られてきている。
「こちらの庭では戦わないつもりだろうが…、無茶をする。ゲート1はもう使えないな」
フレイの言葉にコテスは短くフロー言語で答えてきた。
フレイはこんな使われ方をされたフロー言語を初めて聞いた。コテスの返事は韻を踏んでいたのだ。その内容は軌道の変更提案とも、内側から破壊される卵の美しさの賞賛ともとれる。
「コテス、遊ぶな。バルトはもう軌道を変えないだろう。外縁分布はそっちで算定しろ」
「了解」
宙域シミュレータ上に新たに表示された予想戦闘領域に向かって五機のシェルが急激に針路変更している様子が表示されている。
そのうちの三機のシェル・スレーブ族は無人機らしくない軌道を描いているのにフレイは気付いた。変針のタイミングにズレがあり、ターンの方法もそれぞれ違う。その様子はまるで生きている人間が搭乗しているようだった。
生存支援システムのハードウェア自体は思考型コンピュータにバックアップされた判断能力強化型の無人シェルにすぎないと言える。これらのスレーブ族はルイス・コテス搭乗のマスター族シェルとリンクされているが、有人機側でコントロールしているわけではな

い。

スレーブ族はゆるやかなチームワークを保ちながら、それぞれ独自の判断で索敵し、攻撃し、観測し、撃破される。

そう、観測し撃破されるのがスレーブ族の使命なのである。

攻撃は相手シェルの戦略行動を誘導し、相手が最適であると考えている攻撃／防御パターンを引き出すための手段にすぎないのだ。それもルーティンの戦略行動ではない。相互にぎりぎりの選択肢を選ばざるを得ない状況に誘い込み、戦略の偏りを観測し、撃破する／撃破されるのどちらかの結末を観測する。

これは古風な表現で強行偵察、宙軍独自の表現では攻撃型観測と表現される。

この観測は自身が撃破されるまで続行される。

僚機スレーブ族と自身で「死の様相」を観測した後、この情報は全味方シェルへと配信される。そして、マスター族とスレーブ族の固有行動傾向カウンタのレジスタに記録され、次のスレーブ族はより有望な戦略で相手の手を試す。以下、その繰り返し。

次に攻撃するスレーブ族は上手(うま)くゆけば敵シェルの兵装や装甲を破損させられるかもしれないし、何度も失敗を繰り返しマスター族側の大局的戦略ミスが指摘されるかもしれない。

これは現実空間で行なわれている敗者論理淘汰(ロジックとうた)シミュレーションだった。

＊

ライフゲームのマトリックスを想像してほしい。基本的にほぼ同等の情報量でゲームは

進行し、どのセルオートマトンが優勢となり生き残るかはゲームが進行しなければわからない。

ここで、もし仮に優勢生存条件をあらかじめ入手しているセルがいればどうだろうか。これは言いかえれば間違った生存戦略をあらかじめ知っているということだ。このセルは100%の確率は無理だが、圧倒的な優位で勝者になれる可能性が高い。

こうした戦術行動学習システムは既に「レッドランス」「ペイバック」などの陸海軍の拠点迎撃システムで実用化されていた。

しかし、ジーンライナーが展開しているシェルブリット任務にこの種の装置が投入されたのは初めてだった。

「七分二十秒後に予想戦闘領域に到達する。アンカー*をそろそろ切断するぞ」

「了解。必要なデータの吸い出しは終了してます」

フレイ機とコテス機を結んでいたアンカーが切り離されて収納され、コテスが後衛ポジションに移動した。

フレイはコテスが自分の面倒は見られそうなシェルドライバだということがわかって安心した。フロー言語で詩を詠(よ)んでみせたのも自分のオールグリーン状態を示し、シェルブリット流儀の不足分は軍パイロットの方法で補うという意思表示だろう。交信中の冗談や駄洒落(だじゃれ)は防空軍の伝統だ。

宙域シミュレータのバルトから光点が飛び出した。
「敵シェル射出確認」
「了解。スレーブ族をさらに前進させろ」
「了解。アントニー、ベス、ケーザル加速中」
二つ目の光点も表示上に現われる。
「軌道の補正は必要なさそうだ。正面からぶつかるぞ」
フレイはベクトル表示を急激に成長させている光点を見ながら、先に出てきた方がノーマだろうと考えていた。コテスがそれを察したように尋ねてくる。
「前が例の最古参のシェルドライバですか」
「おそらく、そうだろう」
フレイはそれよりもノーマがピナ機を撃破してしまったことを考えた。ノーマなら事情を察してくれると思ったのだが、甘い考えだったのか…。
誰かを救おうと考えること自体が不遜なのかもしれないとも思った。共に戦列に並ぶ仲間を救いきれないことはこれまでの経験でわかってはいるのだが…。
フレイはピナ・パワーズが自分自身を語ってくれるのを辛抱強く待った。自分の力で救えるものなら救ってやりたいと考えたのだ。
だが、これもまた無駄だった。既に多くの中のひとつだ。
かつての同僚、ノーマ・クイックはフレイのことをこう評したことがある。

——他人を救えると思ってる奴らはみなクソ虫だ。それに自分を救えない奴はクソ虫以下だ

砲声の聞こえる夜のテントの中のノーマ。冷静に見えるノーマの体から怒りの匂いが立ち昇っていたのが忘れられない。

ノーマも自分について何も語らない人物だった。

「…おそろしく手強いが不死身なわけでもない。機をみて粉砕しろ」

「了解。ほどほどに殲滅します」

コテスは三機のシェル・スレーブ族をさらに加速させ、フレイ機とコテス機は減速を開始した。

軌道上の塵のためか放電のひどいカタパルトからシェルが離れてすぐにデルビーの声がオルスの耳に飛び込んできた。

「オルス機、現状で三秒遅れ。ブースタの燃焼*スピード修正データを転送。こちらに差し替えてください」

既に点火されているメインブースタに制御データを片手で放りこむ。

「こちらブレイク、データ修正。射出後第二巡航*加速中」

「こちらバルト管制、確認。だが、まだ加速が足りない。補助*ブースタ燃焼終了後、マニュアルで加速度修正せよ」

「ブレイク機、了解」
すぐに補助ブースタの燃料が空になり、シェルの制御で切り離された。オルスは切り捨てられたブースタをマニュアルで早めに爆砕した。外宇宙でのシェルブリットとは違いバルトとの距離が近かったからだ。
「補助ブースタ爆砕確認」
「ミス・アイバース、ブレイクと交信するぞ」
デルビーの声に続いてノーマの声が入ってくる。ノーマ機は視認できないほど前方を加速中だ。
「バルト管制、了解。本船の加速度データをリアルタイム送付しておきます」
「ありがとうバルト管制。オルス、現時点でリンクしろ」
かなり前方を進むノーマ機との距離は大きく、データリンクの限界値に近かった。
「距離が大きいがやってみる……。今、リンクした」
コクピットのノーマの画像が入ってきた。少しノイズが入っている。
「よし、時間がない。手短にいくぞ…。わかってると思うが、今回は敵シェル五機を相手にする。バルト本船はカーニハン機関作動速度*まで加速予定。速度到達地点は宙軍泊地アウターヴィアネイになる。今のところ、アウターヴィアネイに宙軍艦船の影は捉えられていない」
アウターヴィアネイ宙域は宙軍艦艇の一大集結地であり、民間船の進入は禁止されてい

る。そこに*カーニハン速度で入るということは…。
「…まさか、アウターヴィアネイ内で**ワイプアウトするのか？」
「そうだ。ベルタ・ギースの航跡から推定すると他の航路は厚く*機雷封鎖されている公算が高い。連続でシェルブリット任務についても機雷は除去しきれないだろう」
「ヴィアネイ軌道に乗って別の航路で出れば？」
「フリゲート艦フラーと宙軍の対応がまだ予測できない。バルトはもうこれ以上、ここで時間をつぶしたくないんだ。タイムテーブルの限界だ」
「……」
　まだ加速を続けるバルト本船と敵シェルの動きを睨（にら）みながら軌道の修正値を入力していたノーマはオルスから視線を外して喋（しゃべ）っていたが、沈黙に気づいてオルスを見た。
　ノーマはオルスの顔を少し見た後、向こうのコクピット内でシェルに何か指示を出した。途端にノーマ機との通信が切断された。
「ノーマ！」
　前に乗り出す形でディスプレイに叫んだオルスに再接続してきたノーマの画像が答えた。
「なんだ。切ったわけじゃないから興奮するな」
「……」
「*変調暗号に切り替えた。……お互い、無事に帰れたら色々と教えてやる。だから、ノヴァーリスにヘンな質問をしたり、出撃中に怒るのをもうやめろ。恥ずかしい上に時間がも

ったいない。いいか、今回は五機が相手だ。怒ってるヒマなんかないぞ」
「…了解」
「よし、イイ子だ。今回は後衛を頼む。戦闘機動速度に加速、縦深突破後*に減速反転。敵後列二機の動きがくさい。様子見だ。反転後はマニュアルドライブリンクのマスター*／スレーブ率はそっちを高めに設定してある。敵をよく見ろ」
ノーマの映像が一瞬途絶えてから再び接続が戻る。回線を元に戻したようだ。
「航路確保が最優先だ。バルトはカーニハン速度まで一気に加速する。速度を失うと軌道に取り残されるぞ」
「こちらバルト管制。通信が途絶してましたが？」
デルビーの声が割り込んできた。
「こちらクイック。暗号に切り替えてた。ちょっとした性教育だ、気にするな」
「…バルト管制、了解」
デルビーのムッとした声を聞いてノーマが口の端で笑ってみせて映像が途切れた。あの笑い方は…
――フレイに似てるな…
第一巡航速度に達していたシェルの計器をチェックしながら、デルビーのフリゲート艦の動向報告を聞いていたオルスは漠然と考えた。
「戦闘加速カウントダウン開始」

「コテス、来るぞ！」

レイモン・フレイのスロットル操作はリンクされたコテス機に伝えられ、両機は同時に逆噴射を開始した。さらにその機動情報はマスター族制御回路を通って三機のスレーブ族に指令を与えた。ベスとケーザルは逆噴射、減速して逆方向に展開。アントニーは減速しながらも軌道を維持した。

宙域マップ上で敵シェル二機のベクトル表示が急激に増大。その両端が表示領域を飛び出した。

軌道を小修正するアントニーの左腕に装備された兵装のモーターが起動する。アントニーの左腕兵装は機関砲システム、センチュリアンだった。これはライナーメタリカ社製の兵器であった……。

フレイ機とコテス機は戦闘加速カウントダウンを開始して迎撃準備を終えた。

遮音性能が以前よりもよくなっているが戦闘機動時のフルスロットルはコクピットに音というより凄まじい振動を伝えてくる。尻を蹴っ飛ばされたような衝撃に耐えながらも、シェルに負担をかけないようにオルスはスロットル握力を平衡状態に維持した。

目を動かしてみると、宙域マップがズーム展開している。

メインブースタの加速はまだ続いていた。

狭い宙域にズームアップされたマップ内に敵シェルの表示予告が表示され、ノーマの声

が聞こえる。
「一機目だ。…まわりを見てろ」
オルスはマップをもうひとつ表示させて、こちらは広域表示に設定する。敵シェルはきれいに展開している。奥に深い形だ…。
だが、前列三機に対する後列二機の機動意図がまったく読めない…。
――トラップか？
警告音と共に近接マップ内に敵シェルが入ってくる。と、ほぼ同時に後列二機の敵シェルが戦闘加速を開始した。こちらと速度を合わせる気だ。
マップ内に飛び込んできた敵シェルのほうは相対速度を大きく持ったままだった。
こいつはすれ違いざまに弾幕を浴びせるつもりだ。
ノーマが射撃を開始する。バルトがカーニハン速度に達していないので命中精度に優れる兵装、*マーカランチャーは使えない。オルスとノーマの今回の主兵装は光学散弾砲、*ライアットブラスターである。
「小口径弾の弾幕！」
ノーマの射撃は命中を狙ったものではなく、相手の可能機動領域を狭めるためのものだ。
敵シェルの弾幕に入り込むが、火力に厚みがないので何も起こらないまま通過してしまった。メインブースタの加速が終了する。
「R（アール）面から襲撃！」

いつのまにか戦闘機動速度に達していた別の敵シェルが斜めに交差する軌道をとっていた。ノーマは素早く相手に背を向ける射撃姿勢をとる。

広域マップ内を突進してきた二機目のシェルが近接マップに飛び込んだ。

ノーマは光子弾の連続射撃を開始し、相手の軌道に密度の高い弾幕を形成した。それはオルスがイメージしたものより奥にあった。

敵シェルも連続射撃を開始。だが、ノーマは軌道を変更しなかった。

オルス機とノーマ機は突然目の前に出現するレーザービームの光条の雨の中を通過する。

ノーマ機の至近を光が通過し、シェルの機体が光って見える。

オルスは思わず体を硬直させ、スロットル握力が不安定になる。

と、敵シェルが急激に軌道を変更。無茶苦茶な減速をかけて…。

ノーマが何か悪態をつくと同時にその機体が光った。

真正面に射撃しているのだ。

それを見た一瞬後、オルスのシェルは衝撃に揺れた。

「損害報告」

「損害…なし。装甲表面に軽度損傷」

こちらの軌道に乱入した敵シェルをノーマが撃破し、その破片の中を通過したのだ。マップの、撃破したシェルの軌道が薄くなって消えてゆくのを見てオルスはようやく何が起きたのか把握できた。

「ケーザル消失（ロスト）」
コテスが報告してくるより早くスレーブ族ケーザルの死はアントニーとベスの行動に影響を与えていた。アントニーは急速転進し、ベスと共同で三次攻撃をかけるつもりらしい。
宙域シミュレータを見ていたフレイは、
――軌道を変えなかった。前衛はやはりノーマだ、と確信すると同時に、スレーブ族の軌道を観察して、
――この手はまだ、まずい…
と考えた。
――ノーマなら前衛のスレーブ族を無視してでも我々を狙ってくるはずだ
積極的行動に出ないで距離をおいて行動しているフレイとコテスのシェルを弱い部分だとみなしているだろう。こういう場合、ノーマなら弱い部分を突き崩しにかかるはずだ。
「コテス、緊急加速準備」
「減速開始！　オルス、減速度を調整してすぐそばに来い」
ノーマ機に接近するオルスは周囲を警戒しながら規定の距離まで近付いた。前衛二機の敵シェルは距離をおいてこちらを追尾している。
「ノーマ、接近した」

「もっとそばに来い！　アンカーが撃ち込めるくらい」
——アンカー？　作戦を変更するのか？　こんなところで？
オルスがマニュアル機動でさらに接近を続けると、ノーマ機もこちらに向かってきた。
それを見たオルスはアンカー接続の準備をしたのだが…。
ノーマはオルス機の主兵装取り付けボルトを爆破し、ライアットブラスター*をオルス機から奪い取るとそれを虚空へと投げ捨ててしまった。オルス機の主兵装は支持レール*と一緒に回転しながら視界から消える…。
「待てよ！　なんだよ、これ！」
「不要だ」
「こんなところで武装解除して、どういうつもりだ！　頭がどうかしてんじゃないのか！」
「敵前衛があと三十秒で追いついてくる。その前に持ってきたプラズマカートリッジ弾*で後衛二機を攻撃、反転する。反転後、戦闘加速。敵前衛をやり過ごしてから最反転」
「なんなんだよ！」
「バルトが追いついて来ている。もう時間がない。マニュアルドライブのマスター／スレーブ率はお前を100%マスターに修正した。オフェンスとディフェンスだ。しっかり舵(かじ)をとれ。カートリッジ発射と反転カウントダウン開始」
転送されてきたカウントダウンはいきなり五秒前から始まっていた。

オルスの身体はそれに否応なく反応する。ポッド内のカートリッジミサイルに目標データを流し込み、舵をとってノーマ機との間隔をあける。カウントダウン1でようやく発射態勢を確保した。

　格納ポッド内の三基のカートリッジミサイルのロケットモーターに次々と火が入り、飛び出し、ディスプレイ上のポッド表示がＥｍｐｔｙになる。シェルはポッドを切り捨てて姿勢を逆噴射に移行。

　オルスのシェルはノーマ機を追い越すように前に飛び出してからメインブースタに点火した。轟音（ごうおん）の中、オルスはポッド爆砕とカートリッジミサイルの*二次モーター点火を確認する。

　オルスとノーマのシェルは弧を描いて反転した。

　機体が安定する前にこちらの反転を見越していた前衛の敵シェル二機が襲いかかってきた。

「ＬＢ面敵襲！　また軌道を交差させるぞ！」

「了解、自分の方法で操舵（そうだ）しろ」

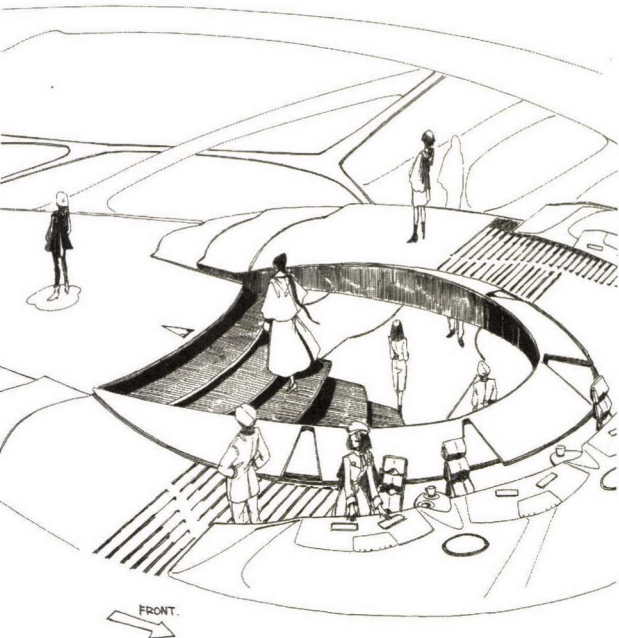
　宙域マップ上の敵シェルはこちらより高速だが可能機動領域をたっぷりと確保している。対するこちらはまだ加速中で機動領域は寸詰まりのままだ。戦闘加速を実行しながらも、こちらのベクトル表示の伸びは鈍かった。

主導権は敵の手にある。
近接マップが警報を発した。
「来るぞ！」
「前だけ見てろ」
ノーマは今度は敵シェルと正対する迎撃態勢をとった。デルビーの声がコクピット内に飛び込んでくる。
オルスはその声を無視して軌道を安定させて加速を続けた。これはノーマの方法だ。速度を持った敵シェルがこちらの機動領域に入ってくる。ノーマが射撃を開始して光の弾幕を形成するが敵シェルは予測以上のスピードでこれを回避した。ノーマ機はそれを追尾射撃するが敵シェルはそのまま離脱。
「…そちらの軌道を加速してる……」
ノイズの入ったデルビーの声で宙域マップを確認すると別の敵シェルがこちらの軌道に乗っている。接敵三秒前だ。
「ノーマ、前」
軌道上の敵を示す光点が分裂した。一つは軌道から外れる。
オルスはとっさに軌道を変針した。
射撃態勢に入っていたノーマ機は急激な軌道変更で射撃スタビライザーを引きちぎられた。スタビライザーは元の軌道に乗ったまま離れてゆき、敵シェルの光点に接近して…。

マップ上で敵シェルは爆発を示すエネルギー反応に切り替わった。
——爆雷*だ！
ノーマが安定度が低くなったシェルを押さえ込むようにして射撃を開始する。
戦闘機動速度に達していたオルスとノーマのシェルは、こちらの軌道から離脱しようとしていた敵シェルに追いつき、背後から捕捉した。ノーマは深い角度で射撃してこれを五射で捉える。
爆雷を投下した敵シェルもエネルギー反応を示す表示に変わり消滅した。
「オルス、反転カウントダウン！　バルトとすれ違う！」
僚機の「死の様相」を観測した三機目の前衛は加速して戦闘領域を離脱した。

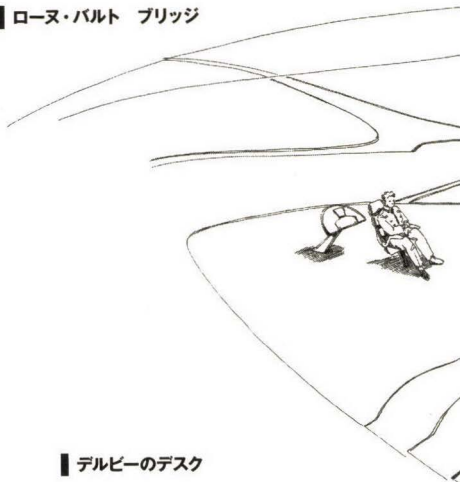
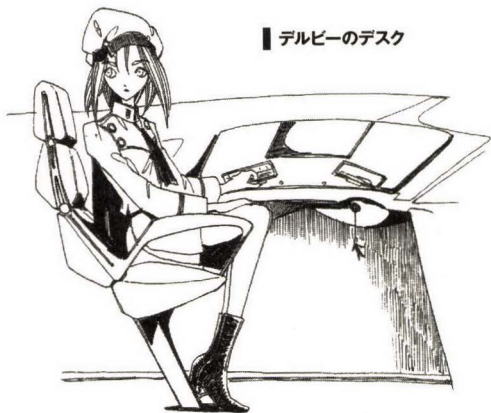
オルスとノーマのシェルが再反転を終了した時には、バルトは視認できそうなくらい接近してきていた。
「こちらバルト管制。おめでとう、ノーマ。敵シェル二機撃破を確認！」
「こちらクイック、残りはどうなった？」
「軌道最深部の二機は高機動カートリッジミサイル回避後、戦闘領域から退去。あと一機も加速撤退中」
「バルトの航路はどうだ？」
「カーニハン速度到達時に変更なし、本社が宙軍と交渉開始しました」

「了解、着艦指示を頼む…。先に着艦したい」
「了解です。着艦アプローチ待機」
ノーマは疲れたようにバルト本船との交信を区切るとオルスに通信を入れてきた。
「…約束は守ってやる。そろそろ潮時かもしれないからな……」

コントロールルーム

ローヌ・バルトのメインデッキ。ローヌ本体のすぐ後方に設置されている。ローヌからの、また、各通信オペレーションの中枢基地である。デッキは3階になっており、これは最上階。デルビーもこのデッキにいる。後方は艦長のデッキになっているが、指揮権はローヌにあるために艦長はオペレーターの情報をまとめる中間管理職でしかない。艦長がこのデッキに常駐することはあまりなく、通常の航行中はほとんどを艦長専用の執務室で過ごしている。ここでの仕事は、荷主や会社との連絡、雑務である。優雅な曲線で構成されている造りだ。
ここでのオペレーションは6人が受け持つが、平時、半数以下の2、3人が常駐する。管制はA群〜航法に2人。B群〜情報通信管制に2人。C群〜火器に2人である。この下の階にさらに分化されてオペレーションされる。普段は常駐する人が少なく、デルビーは火器管制が仕事なので、他よりヒマ。よく私事に使っているのもそのおかげ。戦艦のメインデッキというと戦闘的で非常に煩雑としているというイメージがあるが、ジーンライナーに関して言えば、ここは会社で言う受け付けや秘書室のようなものであると思っていただいていいのではないだろうか。もちろん戦闘態勢ともなれば話は別。

ローヌ・バルト　ブリッジ

♡でるびーつくえ.

14

生存戦略

Strategy For Survival

ヴィアネイ市郊外のフォークト邸を訪れた内務省の役人は動力付の自転車を降りた。門から先が砂利道になっていたからだ。

彼女は石を組んで作られた門柱に自転車を立てかけると、スニーカーで深い砂利を踏んで玄関へと向かった。鳥の鳴き声と松葉の香り、軽く汗をかいた首筋にあたる風が気持ちいい。

フォークト邸は木材を組み合わせて作られた木造建築だった。何という建築様式かはわからない。古代の帝政ロシアと東洋趣味が混在している。

象形文字のような古代の言語が彫り付けられている玄関ドアを見上げた彼女は、

——たぶん、フォークト様式らしいわね

と結論づけてスニーカーをよりフォーマルな革のサンダルに履き替えた。

呼び鈴の音で現われた執事はジーンマイナーらしい背の高い中年男だった。

「ご用でしょうか？」

「内務省調査官のマイナー・エマルディン・ホールです。フォークト提督との約束で伺いました」

執事は一瞬驚いたような表情を見せ、目線を空中にさまよわせた。

何も思い出せない…といった顔だ。
エマルディンは執事のわざとらしい演技に吹き出しそうになった。
――これもたぶん、フォークト様式ね
「ああ、たった今思い出しました、ミス・ホール。どうぞ、お入りください」
執事は玄関ホールにエマルディンを通す時、彼女の身体を下から上へとじっとりとした視線で眺め回しウィンクして寄越した。

通された部屋は窓を開け放した部屋だった。藁で編んだカーペットと板張りの床が半々で、空調のない部屋だが空気がひんやりしていて快適だった。
フォークト提督は上半身裸で肩にバスタオルをかけ、籐の椅子に座って酒を飲んでいた。
「はじめまして、提督。マイナー・エマルディン・ホールです」
差し出したエマルディンの手を軽く握り返した提督は、
「下にいるときはだらしなくするよう努力してるんだ。細かいことは気にせずどこか適当に座ってくれ」
と言い、彼女の返事も聞かずに空いたグラスにジンを注いで渡した。エマルディンはグラスを受け取って椅子に腰掛けた。提督とエマルディンの正面はガラスを使っていない引き戸が開け放され、明るい庭に降りられるようになっていた。
「さて、とりあえず何の話をしたらいいのかね」

「お宅の執事はいつもあんな調子なんですか？」
エマルディンが執事の道化ぶりを話すと提督は豪快に笑い出した。フォークトの厚い胸板の上で筋肉になりそこねた薄い乳房が揺れている。提督は両性具有であるジーンメジャーの、男性＋＋だった。
「そうだ、いつもあんな調子だよ。奴は宙軍関係者の間で最低最悪の評判を誇っている。帰り際にはキミをデートに誘うかもしれんぞ」
「本当に？」
「ああ、でも実行できんだろうな。細君が恐くて」
「まぁ、ホントに最低」
提督はクックックッと笑いを残しながらグラスの残りを空け、両手でそれをもてあそびながら言った。
「ときに、キミのお父さんは今何をしてる？」
「ホール課長ですか？」
エマルディンの父親は内務省外務二課長、つまり彼女の上司でもあった。
「課長は宙軍省にいりびたりです。ローヌ・バルトの緊急出港以降…」
予想外の率直な答えが返ってきたので提督は彼女の顔を凝視した。
「そうか…」
「バルトはゲート1を破壊して出港し、通常の航路をとらずアウターヴィアネイでこの空

間からワイプアウトしました。乗り遅れを恐れての行動ですね」
「ああ、それは聞いてる」
「ベルタ・ギースもそれを追うようにワイプアウトしましたが、シェルの回収と加速に時間をとられてバルトより二時間の遅れをとってます」
「なるほど…」
　グラスを両手で持った提督の目は庭に来て遊ぶ二羽の小鳥を追っていた。
「…ここにいると、リアルには聞こえんな」
「そうですね、本当に。でも…、ご存知でしょうけど、この部屋や庭は監視されてます」
「ああ、知っとる。……あの服装の趣味の悪さは*軍情報部だろうな。この近隣では見かけないセンスのなさで目立ってしようがない」
「ええ、でも軍筋の人間は陽動ですね。ギースシッピング社が元からの住民を洗脳して使ってます。お隣さんはもうセックス漬けになってますわ」
健康的な若い女性の口から飛び出した物騒な言葉に、提督は改めて相手を見直した。
「ふむ……、そうかもしれん。ありうる。……最近の内務省は仕事にスピードがあるようだね」
「今の情報はウチの仕事じゃないんです。バルトライナー社の協力で…」
「バルトライナーか。…キミは御父上と違って率直な物言いが身上のようだ。私もキミを見習って率直に聞いてみたいことがある」

提督は片腕を使って椅子の上で姿勢を変えた。
「キミらは本当はどっちにつく気だ？」
エマルディンの答えを待つ提督に彼女は間を置いて答えたが、言葉を選んだわけではなかった。
「わかりません。…正確に言えば、それはまだわかりませんし、私たちの部署で決めることでもありませんから…。知りうる事を知り、余計なコンフリクトを回避するのがウチの仕事です」
「役人らしい物言いだな。課長とそっくりだ」
「どの勢力に属して勝敗がどこにあるかは重要ではありません。我々の根は一本しかないんですから…。勝つ者が勝ち、生き残ることが重要なんです」
「キミはジーンライナーみたいなことも言うな…」
「ジーンマイナーの女性みたいなことを言う、と言ってください」
提督は楽しそうに笑ってから、壁に掛けられた額の一つを指差した。
「ミス・ホール、あいつを知ってるか？」
エマルディンは写真の女性を見てうなずいた。提督の娘でスポーツ選手だ。この宙域で彼女を知らない人間はいないだろう。
「女性＋＋じゃないが、私の中じゃ娘だ。たまに下に降りてきても会おうともせんが、よき相談役だ。昨日あいつと話してたら『耄碌（もうろく）したのか？　どこかに賭（か）けて闘えよ親父』と

どやされたよ」
提督は笑ってから続けた。
「アレといい、ローヌ・バルトといい若い女は無茶苦茶だ。前しか見ておらん。特に親より必ずデキがいいとなるともう手におえんな」
親より必ずデキがいい、というのは遺伝子デザインを実行するジーンメジャー特有の現象だった。ジーンライナーの場合は例外もある。これに対してエマルディンはやんわりと反論した。
「私はジーンマイナーですけど、父より仕事ができるつもりですよ。課長が手におえないと思った人物を任されてるわけですし、個人的には闘争（コンフリクト）歓迎ですから。それに同僚と賭けをしていてローヌ・バルトが勝ってくれないと困ります」
「そうか…、ローヌ・バルトが適任かな？」
提督はグラスを机の上に置いて表情をひきしめた。
「はい。私見ですが」
見返すエマルディンの目を見ていた提督は、目をそらし何かを思い出したように笑みを浮かべた。そこで例の執事がドアにのっそりと現われた。呼び出しの合図があったのだろうが、エマルディンにはまったくわからなかった。
「予定外で悪いが外出の仕度をしてくれ」
提督は執事に指示を出してからエマルディンに言った。

「バルトライナーの支社に出かける用事を思い出した。あそこは空調が効き過ぎていて居心地悪いんだがね…。グズグズしてるのにも飽きたし、盗聴や監視で予算を使ったり一般市民を諜報活動に巻き込むのも性にあわん。……それにエイリアンももう待ってくれんだろう」

「移民船との接触はほぼ確定しています」

「叱られたり食券を積まれたりしてもヤル気が起きなかったんだがね……。ただ、そっちのお膳立てでバルトライナー社に入るが手駒と考えないでくれ。状況次第ではキミとは敵同士だ」

「はい」

「お互い、せいぜい最初の衝突に備えることにしよう」

異星文明との接触は過去、一度だけ起こっていた。

それはジーンライナーやジーンメジャーが登場する以前、人類がジーンマイナーだけで構成されていた時まで遡る。最初のジーンライナーの帰還をもたらした探査船「パルテノスⅣ」事件である。

外宇宙探査船パルテノスⅣにはラベル第三星系調査団のメンバーが搭乗していた。ラベル第三星系は無人探査や遠隔観測で星間資源の採掘が有望視されていたのだ。そこで有人船が派遣されたのである。

既にカーニハン機関と呼ばれるワープ航法装置は実用化されて、核の危機に次ぐ人口爆発による地獄をも人類はなんとか乗り切ることができていたが、月面や軌道上のコロニー、火星にまだ人々が密集して暮らしていた時代である。理性的に思考できる人間はほんの一握りにすぎないという屈辱的な体験と貨幣が食券にすぎなかった記憶はまだ生々しく残り、老人たちは皆、貨幣単位カル（Ｃａｌ）の本当の意味を知っていた。

カーニハン機関の実用化で宇宙の門戸を大きく開かれてからは、人類の生存域の拡大、つまり資源の確保が急務だった。だからこそ、未帰還船が数パーセントにおよぶ有人探査に多くの宇宙船が参加していたのである。

これは冒険の時代だった、と美しく記述することもできる。相変わらず人類は得体の知れないものに生贄（いけにえ）を捧（ささ）げ続けたと記したドキュメントもある。

生命保険というシステムのおかげで人間を経済的に取り扱うことを我々は学んだ。この時期はちょっとした投資の時期に過ぎないと言い見事な損益シートを掲載した生物経済書もある。

新しい時代の倫理観に馴染（なじ）めない人々は、危険な任務に人間を送り出すのは問題がある、すべての人に安全を、と叫んだ。だが、ほとんどの人は気付いていた。誰か一人を生存させるために他のすべてが犠牲になる、それに反対して闘争することも生き残る一人に奉仕するプロセスにすぎない、ということを。老人たちの多くが、誰がシェルターの外に出るか、誰が最後のパンを食べるかを決めるのを体験していたのだ。それは腕力で決まったり、

くじで決まったり、理性的に決定されたりした。名乗り出た老人が餓死したり、赤ん坊が外に投げ出されたりして我々は生き残ってきた。苛烈で残酷な生存戦略だが遥かな太古から我々はそうだったのだ。

探査船パルテノスⅣの六名中五名も帰還できなかった。

資源*探査中に偶然、異星人の宇宙船の残骸を発見したパルテノスⅣは本来の探査と並行して異星船の調査を進めた。これは時間のかかる遠距離通信で指示を受けての調査だったためだ。

それでも二カ月後、稼動可能の医療装置とデータボックスらしい機材を収容してこの探査船は帰途についている。それから、帰路途上の事故で遭難した。

そしてパルテノスⅣ遭難から半年後、まだ建造途上のポート・ヴィアネイ近傍に正体不明の大型宇宙船が現われることになる。

これが最初のジーンライナーと呼ばれた元探査船パルテノスⅣ乗組員スザンヌ・ダルトンだった。生きた宇宙船の帰還、異星の遺伝子デザイン技術によるデザインされた人類ジーンメジャーの登場は学校の教科書にも書かれていることだ。

だが、この経緯に関する詳細な情報は今でも公開されていない。異星船の残骸の座標、異星船内に何があったのか、パルテノスⅣの遭難原因などは政府アーカイブに封印されたままだ。

政府は非公開情報の存在を認めているが、公開要求は拒絶し続けている。また、ジーン

ライナーに乗ってきた異星人と出会ったとかＵＦＯ（未確認飛行物体）を見たと主張する人物、異星人の存在に強くこだわり政府を非難する人物は社会的地位を向上させるか性的欲求不満を取り除くかで治療できることを、再三実験で証明してみせ、正当な公開要求を牽制するキャンペーンをはっている。これは二十世紀後半に実際にあった、ある文化圏の宗教的ヒステリー現象を上手く引用してみせたわけである…。

「異星人だ」

とノーマは言った。

「と言っても詳しいことは知らん。異星人についても教科書に載っている以上のことはわからん」

ヴィアネイ軌道上での航路索敵から帰還したノーマとオルスは、バルトがカーニハン速度に達し、通常空間からワイプアウトするまで再襲撃に備えて待機を続けた。

通常空間にワイプインし、ベルタ・ギースの追尾がないことを確認して警戒態勢が解除されてから、ノーマは戦果検討会と称してオルスを格納庫そばのミーティングルームに連れていった。

ノーマはそこのヴィデオグラムにガンカメラのデータを注入してからおもむろに言ったのだ。

——異星人だ、と…。

「バルトは異星人と接触するために先を急いでいる。この航海の最終目的地ポート・リヴァプールで補給を受けてから異星の船に向けて外宇宙を直行する予定になっている」
「異星の船と接触って…、接触してどうするつもりなんだ」
「さぁ…私に聞くな。接触してどうなるかは誰にもわからないとしか言いようがない」
オルスには何とも評しようのない話だった。
異星人と言われてもオルスがイメージするのは遺跡を残した古代人のような捉えどころのないものでしかなかったし、学校で習った異星人関連の記憶と言えば精神病理の授業しか思い出せない。
ある星系の海生哺乳類を異星人として扱うかどうかという議論もあったが、それも異星人に認定されたかもしれない動物よりも、提議した議員がジーンマイナーだったための人種差別問題や失言で失脚したメジャー議員の方に重点が行きがちの話題でしかなかったのだ。
ノーマはヴィデオグラムのスイッチを入れて、
「まあ、相手が何であれバルトライナー社はローヌ・バルトをそこに派遣するつもりなんだ」
と言い、オルスのそばに腰を下ろした。プロジェクタにガンカメラの映像が映し出される。
「…部屋を暗くしてノイズ処理」

ノーマの命令で照明の輝度が下がり部屋が薄暗くなる。オルスはプロジェクタからの反射光に淡く照らされたノーマの言葉を待った。
「……オルス、こいつらに人間が乗ってると思うか？」
ノーマがプロジェクタに目を据えたまま尋ねた。オルスが映写画面に目をやると軌道上での戦闘の様子が映し出されていた。
ノーマとオルスのシェルのガンカメラ映像にリアルタイム処理で分析が加えられ続けている。拡大された敵シェルは今までのものより少し小型に見えた。見たことのないタイプだがオルスには無人機のようには見えなかった。
「……わからない。無人の戦闘機械のようには見えなかったけど…。こっちの設定した条件でテストするか、コクピットをこじ開けてみないと本当のことはわからないと思う」
「そうだな。学校の試験だったらそれでいいかもしれないが…。自分の勘で言えばどっちだ」
ノーマは手元のリモコンで、軌道に飛び込んでくる敵シェルを画面に映した。
バルトライナー社の調査部は新しくベルタ・ギースに乗り組んだシェルドライバの身元や人数の割り出しに失敗していた。ノーマが敵シェルは無人機かもしれないと疑うのはわかるが…。
「…有人のようだと…思う」
「どうして？」

「…機動方法に癖があって…、こっちを探っていたような…。全体の機動を見ていたデルビーに聞いた方がいいかもしれない」
「そうだな」
ノーマはすぐにそれを実行した。音声通話機でデルビー・アイバースを呼び出したのだ。
「ふぁい、…ほちらファイバース」
「デルビー、食事中すまない。ノーマだが、先の戦闘について意見を聞きたい」
「…はいはい、失礼」
「軌道上の戦闘の敵シェルは無人機だと思うか」
デルビーらしく即答が返ってくる。
「あれは有人ね。私が見たところでは」
「理由は？」
「雰囲気へボっぽいもん。撃破された二機とも新人ね」
「そうか」
「それよりブラスターの『紛失』、船長が報告書(レポート)待ってるから早めにね――」
プロジェクタの画面を見ていたオルスは通話機から漏れるデルビーの声でノーマを見た。
ノーマはオルスを無視していた。
「――混戦中の『事故』だからノーマがレポートした方が状況説明が適切にできると思うよ」

「ポート・リヴァプールでおごってね。じゃ」
回線が切れた。
「オルス、全員が楽できる処理をしたい。悪く思うな」
「……わかったよ――」
何かひとこと言ってやりたいという気持ちが強かったがオルスはそれを飲み込んだ。楽ができる処理というのは冷静に考えれば納得できたし、フリゲート艦マーリガンの時のこともあったからだ。

ポート・ヴィアネイ入港時の戦闘で宙軍フリゲート艦マーリガンを攻撃したのはピナ・パワーズではなくノーマだった。事前にくどいほど宙軍艦艇への攻撃を禁止していたノーマが攻撃するのを見てオルスはあきれたが、結果的にはその攻撃がバルトの航路を開くことになった。
当時のオルスはノーマの指示はいいかげんだとか単なるミスをごまかしてると怒ったものだが、今となってはあの判断は正しかったと言わざるを得ない。
パースウォーデン船長はオルスが誤射し、ノーマがそれをかばっていると疑っていたようだが…。

「――ただ、質問しときたい。俺のブラスターを捨てたことと敵シェルが無人機かもしれないことは関係あるのか？」
「…あるかもしれん。これはゲームだからな。私とお前が同じ負け方で同時に退場できない」
「……わからないよ、ノーマ。謎めいた言い方はやめてくれ」
「生き残り（ライフ）ゲームだ。お前と私は似てるのかもしれんが、似た戦略をとって同じように死ぬ必要はないだろう」
「…俺はゲームなんかやってない」
「このゲームに参加してないのは死人だけだ。エイリアンの件も、ジーンライナーの企業経営も、シェルの開発もすべてはひとつに還元して説明できる。ジーンマイナーのお前をこのゲームに入れたのも多様性の確保だろう」
「多様性の確保？　誰がそんなものを求めてるんだ？」
「さあな。本当に理解したければ自分で勉強しろ。えらそうに喋（しゃべ）ってる私が間違っている可能性もあるんだ」
　自分で勉強しろ、という言葉にオルスは引っかかった。約束では何もかも教えてくれるような口ぶりだったのに、この言いぐさはなんだ。
　エイリアンだの、ライフゲームだの、多様性だの直接結び付けられないようなことをウダウダ言っておいて、結局は自分で考えろと言う。

本当はまったく意味のないことを言ってオルスを幻惑して楽しんでるのかもしれない。オルスがジーンマイナーであることを今、持ち出したのも侮蔑かもしれない…。勉強という言葉に忘れていた父親の顔を思い出したのも癪にさわる。

オルスにはノーマが誠実に説明していることが理解できなかった。

ノーマの方はオルスが、ほんの少し前までは何もかも嚙み砕いて説明し、丸暗記できるようにして舌の上に乗せてやらないとすべてを吐き出してしまうスクールボーイだったことを忘れていた。

オルスはいつか聞いてやろうと考えていたことを今ぶつけてみようと思いついた。聞きにくいこと、ひょっとしたら残酷な質問かもしれないと考えていたことだ。

「……わかった、勉強してみるよ。ところで、レイモン・フレイってどんな奴？」

ノーマの顔に注目していたオルスは、

——大あたりだ！

と喜んだ。他の考えに気をとられ、言葉を継ごうとしていたノーマの表情が一瞬だけ凍り付いたようにみえたからだ。

——あのレストランでサングラスの下に隠されていたのは、やっぱりコレだったんだと考えた。これはヴィアネイのレストランでレイモン・フレイと再会したノーマのことだ。

ベルタ・ギースのシェルドライバの一人がフレイだと知ったノーマは考え込むことが多く

なり、その直後、シミュレータ訓練のスコアでオルスに追い抜かれたのだ。
やはり、1G重力下での重力不適応*だけが原因ではなかった。確信はなかったが、因果関係があるのではないかとオルスは疑っていたのだ。
「……軍時代、ソルヴェニ*紛争時の同僚…というかパイロットのパートナーだ。どうしてそんなことを聞く？」
ノーマは無様に驚いた顔を見せ続けることはなかった。すぐに元の落ち着いた表情を取り戻した。注意深く観察していなければプロジェクタからの光の具合でそんな表情にみえたのかもしれないと思っただろう。
「名前がわかってる敵シェルドライバだからだ」
「…元陸軍対戦車攻撃機パイロット。シェルドライバになっていたことは知らなかった」
いつもの声で答えるノーマ。だが、その目は刺すように冷たかった。
オルスはなるべく無邪気に見えるように重ねて尋ねた。
「どんなパイロットだった？」
「慎重なパイロットだ。分遣隊長*で地区防御責任者だった。マイナーの歩兵とうまくやってたな…」
似たような話はローヌ・バルトにもぐりこむ前にフレイ自身から聞いたことがある。オルスにとっては実感のわかない、どうでもいい話に聞こえた。
だが、ノーマは違った。分遣隊全員の共通の目標物となっていた樹や、料理の上手(うま)い妙

な顔のマイナーや、フレイの息遣いを思い出していた。
ノーマは湧き上がってくるそれらのイメージを振り払うために喋った。
「…今までの戦闘ぶりからみると勘は鈍ってないようだ。引き際を間違えない、トラップの類には引っかからない奴だ」
オルスは黙ってこちらを見つめている。
「手強いが撃破できないような相手じゃない。機をみて粉砕しろ」
言い終えて気付いた。どこかで聞いたことのある言葉だ。
――敵の大攻勢直前だ
ノーマは思い出した。うだるような暑さと悪天候。絶対防衛線のある地峡部の敵対空陣地…。
地下壕のブリーフィングで、レイモン・フレイが激減した分遣隊パイロットたちに言った言葉。
機をみて粉砕しろ、はフレイ語で消極的突撃を意味していた。
圧倒的なイメージと悪臭と静止した空気に取り巻かれたノーマは、あの地、あの時間にいた。フレイの前に座っているのは今より不遜で、反抗的で、歩兵と殴り合いを演じ、唾を吐きまくっていた若いノーマ・クイックだった。
彼女はこの出撃でレイモンに助けられることになるはずだ。
気がつくとノーマはオルスの目をぼんやりと見つめていた。

最初の表情の変化以外にノーマの様子に変わったところは見られなかった。
オルスは苛立った。
最初にノーマ・クイックに出会った時に受けた暴力、罵倒は歪んだ形でオルスの深い部分に沈殿していた。どういう反応なのか、それは得体の知れない化学反応を起こし、醱酵して名状しがたい複雑怪奇な衝動を吹き上げさせる。オルスはノーマを八つ裂きにしてしまいたい、ボロきれのような存在にしてしまいたいと思った。しかし、それは報復したい、殺してしまいたいという感情ではなかった。いや、思考でも、感情でさえもないように思える…。
オルスはその得体の知れない衝動に従って攻撃を再開した。
「でも、フレイは負け犬ベルタ・ギースのシェルドライバだろ。負け癖のついた負け犬かもしれない」
言ってみて自分で情けなくなるような修辞だ。だがこれがオルスのボキャブラリーの限界だった。
ノーマは無反応だった。
オルスの目をモノでも眺めるようにしばらく見てから
「…そうかもしれない」
と答え、プロジェクタに視線を移した。敵シェルの映像がオートリピートで続いている。

それを見つめながらノーマはしっかりした声で言った。
「あいつはクソ虫だからな」
その意味がわからないオルスは、ノーマが自分と一緒にフレイを罵倒することでこの状況から上手に逃れようとしているようにしか思えなかった。
フレイのことをまがい物のウジ虫野郎と呼んでみようか？
――ダメだ、それより…
オルスは今思いついたことを口にした。
「俺にあいつを殺せるかな？」
「…わからない」
とノーマ。いつもの声だ。
自分が手にした獲物が思うように苦しんでくれないのにがっかりしたオルスは急にこの場での出来事に興味を失ってきた。
「俺の技量が不足してる？」
「どんな人間が生き残るのかはわからない。体験的にそうとしか言えない」
オルスは、さっき自分が瞬間的にノーマに抱いた衝動の正体を考えた。
あの日常で、両親、全ての大人たちをそうしてきたように、ここではノーマをその対象にしようとしているのか。…それはいい。だが、はたしてそれで何かがハッキリとすると

でもいうのだろうか。

——ノーマが死ぬ

——自分だけが生き残る

——生き残った自分が「勝利者」になる…

——オルスは短絡的で幼稚な思考に自嘲した。

——いったい俺は何に「勝利」しようとしているんだ…

オルスに睡眠をとるよう指示した後もノーマはミーティングルームでガンカメラ映像を繰り返し見ていた。

途中、デルビーから音声通話機に連絡が入ったので、まだしばらくここにいる事とオルスが情緒不安定なので話しかけずに様子を見てやれと話しておいた。デルビーはノーマから学習した汚い言葉を使ってオルスを罵倒した。ほんのジャブ程度に。

ガンカメラ映像を見てのノーマの最終的な感触は、

——無人機

だった。人間が搭乗しているとしたら自殺願望を植え込まれた被洗脳者だろう。

紛争時、敵ゲリラ*がよくそういう兵士を使っていた。こちらの陣地の遥か手前で洗脳が解けかけた敵洗脳兵がきりきり舞いをしているのを二度ほど見たことがある。洗脳兵は楕円を描いてグルグルと同じ場所を走り回っていた。どこに行きたいのか自分でもわからな

くなってしまったのだ。

若い兵士たちはあれを指差してゲラゲラ笑い転げていた。

洗脳兵は時間が来ると爆発して四散した。安全なスペクタクルだ。

それを私物のカメラで撮影している兵もいた。あの若かった男はまだあの写真を持っているだろうか?

――人間は何度も何度も何度も同じことを繰り返す

――間違った方向に突進し、とんでもないものを信じ、親の世代と同じ失敗を繰り返すのが我々だ

――その多くが無用の死を迎え、悲惨さで地を覆い尽くしながらも生き残る

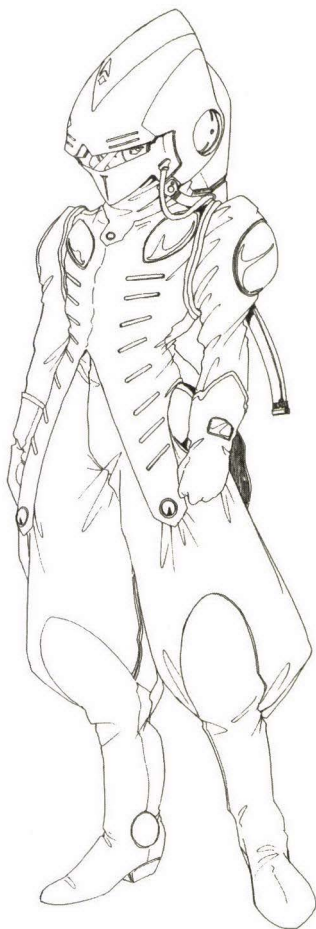
――自分の置かれた環境を学ぶための繰り返し、リブート…

――だが、これがわれわれの生存戦略なのだ

このことを最近、理解できるようになってからノーマはフレイがクソ虫になった理由がわかったような気がした。

しかし、ノーマはクソ虫なんかにはならず、まだ先に進み人に語り得ぬ一文の価値もないものを探求するつもりだった。

ハードスーツ

ハードスーツは、シェルブリットが頻繁に行なわれるようになってから採用されたものだ。オルスも幾度かの実戦後、このスーツをローヌ・バルトから渡されているが、今後使うかどうかは本人次第であろう。
ハードスーツは見たとおり対ショックと生存性の向上に徹底してデザインされており、特にコクピット内の保護素材で覆われていない下半身に集中して衝撃吸収素材が多用されている。
対してベルタ・ギース側のスーツは、最初からハードスーツである。ピナやオルスのスーツは同様に2ピースに分かれている。着脱性を考えてだが、ピナのものに変なアップリケが付いているのは見なかったことにして欲しい。

オルスのハードスーツ

ピナのハードスーツ

15

航路殲滅戦

Operations of Death

「まあ、コレは君のプライヴェートの話だ。私自身は詮索（せんさく）したいとも思わんが――」
　船長室で対面したレイモン・フレイとティプタフト船長の間には静寂の空気があった。船長はフォルダの中から透明シートに入った写真を取り出し、フレイに見せるために目の前に掲げた。
「調査部の方から確認しろとうるさく言ってくる。これに写っているのはキミか？」
　フレイは座ったままそれを見た。写真にはテーブルのそばに立っている私服のフレイが写っている。本人に確認するまでもないだろう鮮明な写真だ。
　フレイは答えた。
「私のようですね」
「だとすれば、これもキミらしいな」
　次に船長が取り出した写真にはフレイの全身が写っていた。別のアングルから撮られたものだ。テーブルにはサングラスをかけたノーマ・クイックとオルス・ブレイクという少年が座っている。オルス少年はコミックスの登場人物のようにだらしなく口を開けていた。
「…そうですね。それ、一枚もらえませんか」
　船長は唇をすぼめて軽くうなずくと立ちあがり、デスクの上の写真をまとめ、音を立て

て揃えた。そして、写真の束をフレイに見せつけるように上下に振ってから、デスク脇の再生機に投げこんだ。
再生機は苦しげな音をたてて、プリントの束を噛み砕き始めた。
ティプタフトはデスクをまわってきてフレイの側に立った。
「君は事象の流れを変えられると思うほどコドモじゃあるまい？」
船長は自制心のありったけを動員して喋っているようだ。フレイの予想よりも穏やかな声だった。
「どうでしょうか…」
フレイのあいまいな答えかたに船長は何か言いかけて、それを飲み込んだ。
「…いずれにせよ、もう終わったことだ。流れは変わらんし、君が何を信じようが私には関係ない。太陽を拝んで踊り狂う人物でも問題ないんだ。結果さえ出してくれればね」
船長は「結果」という言葉にアクセントを置いてからフレイの周りを歩きはじめる。フレイの衛星、あるいは…。
――包囲殲滅戦だな
とフレイは考えた。
フレイは包囲されている。作戦図では見えない、塹壕の中の歩兵たちすべてがフレイだ。
船長は続けた。
「君が結果を出してくれないのが問題なんだ。期待に応えてくれれば君とノーマ・クイッ

クとの個人的関係を邪推しなくて済む人間がたくさんいることを忘れないでくれ」
船長は今度は「たくさん」の部分にアクセントを置いていた。
——どんな関係を想像してるんだろう？
戦場の恋人たち？
実際には熱病のような肉体関係と戦術的議論と、相手の意固地な精神性への憎悪の集合体だけがノーマとレイモン・フレイの関係だった。相手に対してどのような役割を演じればいいのかわからなくなって破綻(はたん)した関係だ。
できれば誰にも想像してほしくない、とフレイは思った。レディメイドの物語(ロマンス)にはめ込まれてしまうのはぞっとする。
「わかりました。その件については出撃計画書(ミッションプラン)で重点形成します」
「具体的に、今聞かせてもらいたい」
仮想軌道上の船長はぴしゃりと言った。
「……バルトライナー社側の宙間作業機の排除を大目標とします。シェル・スレーブ族のサンプリング頻度から第一目標としてノーマ・クイックが適当だと思います」
「よろしい、ミスタ・フレイ。出撃計画書はすぐにでも作成してくれ。二度目のワイプイン、約百四十時間後にベルタはローヌ・バルトに追いつく予定だ」
——予定より早いな…
「了解しました」

「移*民船『コレ15』を追い越して異星船に先に接触するのは我々でなければならない。すべてはこのためにあったことを忘れないでほしい」

船長室を出たフレイは、立哨（りっしょう）しているジーンマイナーの警備員の一人と立ち話しているルイス・コテスに気付いた。その向かいにいるもう一人の警備員は鋭い視線をフレイに送ってきた。

——コテスを連れてきたように思われたか……

フレイに気付いたコテスは手を挙げて挨拶（あいさつ）した。フレイはその手を握って軽く振ってやった。

「行こう、基本的にはこのブロックは立ち入り禁止だ」

コテスはうなずくと若い警備員に言った。

「機会があったら酒でも飲もう」

発音に少し訛（なま）りがあった。ヴィアネイ地上の言葉だろう。

コテスと少し歩いて、ブロック境界の圧力隔壁を越えてからフレイは言った。

「メジャーとの付き合いが彼らのニッチの向上になるとは限らん。わかっているはずだ」

コテスはリズムをとるようにうなずきながら答えた。

「もちろん。でも、話しかけてきたのは向こうですから」

「操話術で誘導しただろう。もう一人の警備員は気付いていたぞ」

操話術は微細なボディランゲージで会話の流れをデザインする手法だった。その熟練者は相手に自分の意思とは反対の意見を表明させることもできる。我々が同族の苦痛に注意を向けざるを得ないことを基に体系化された一種の術（スキル）だった。

「下品ってわけですか？　でも、やつらのやり方に比べるとまだマシですがね」

　この「やつら」――「我々」関係の発生にフレイは頭を痛めていた。

　これはピナ・パワーズの退場の仕方が生んだしこりだった。ピナ・パワーズの不名誉、宙軍への攻撃、テロリスト、ジャンキーという一般報道が、真相を知る一部の甲板員やジーンマイナー乗組員の間で会社側への反発となり一種独特の結束が生み出されていたのだ。

　彼らによるとこの結束の中心人物はレイモン・フレイであらねばならないらしい。山車（だし）のようにかつがれた自分や死んで人気者になったピナにフレイ自身は苦笑していた。フレイは目の前にいたピナという個人を救いたいと考えただけだ。ピナが死に、異星船という目的地を知らされて事象の流れ（ストリーム）の行く先を知ったフレイにとって、既に敵はここにはなかった。

　しかし、見えない敵に飽き足らない乗組員には適当な敵の物語が必要だったらしい。生きて演じる擬似家族のストーリーだ。それが本当らしいかどうかは問題ではない。自分に参加できるかどうかが問題なのだ。スポーツチームのサポーターのようなものである。コテスがそれを承知で、自分を演じて遊んでいるのは問題だったが……。

「そういうお遊びはほどほどにしろ。何かを演じている奴は生き残れない。行動に矛盾や

迷いができる」

「了解」

コテスのあっさりした返事にフレイはつい笑いをもらしてしまった。

「それより、シェル・スレーブ族の教育の方はどうだ？」

「互いにケーブル接続してやったら、やりまくってますね。情報にスピードがあると気持ちイイらしい。ありゃ奴らのセックスだ。自分自身を産み落としまくってます」

コテスは「自分自身――」のくだりは一部フロー言語で表現した。

「せめてパーティと言ってやれ」

「長時間乱交パーティですか」

「…高密度情報の溶鉱炉、白熱の坩堝（るつぼ）だ。何が生まれるかわからん生命の錬金術を貶（おとし）めるな」

フレイが自分の軽口に一向に乗ってこないのに鼻白んだコテスは、

「無指向性なんかジーンマイナーの有象無象どもにまかせときゃいいのに…。量的な広がりがなけりゃ意味がない」

と弱々しく反論した。それにフレイは返した。

「生存適性（サヴァイヴァル）は個対個の問題だ。巨視的観点で逆に事態を見逃しているぞ。それに、量的広がりは既に存在しているのかもしれん…」

コテスはフレイの言葉を聞いて何かすぐ言おうとしてやめ、間を置いてから言った。

「…その量って、まさか異星人の……」
「わからん。ジーンライナーたちも知らないことだ」
「……」
「多様性を確保できなかったことで、我々ジーンメジャーはもう負け始めているのかもしれん。もしもの衝撃に備えることだ」
異星人は未知の「量的広がり」だと気付いたコテスは「接触」が環境の激変に相当するイベントだということを理解したらしい。自分の考えに集中する様子で答えた。
「……わかりました」
「スレーブ族は例のクイック機をやれるか？」
「…奴らのリクエストで今度は四機出撃させます。ほぼ確実にやれます」
「よし、信じるぞ」
「でも…、本当に…ミス・クイックを排除していいんですか？」
ちょうど小型昇降機（リフト）にたどり着いたところだったので、フレイは立ち止まってコテスを見た。コテスは船内の噂を聞いたのだろう。
「かまわん。殲滅戦だ。全力で突撃しろ」
フレイは力を込めて答えながら、
――けじめはつけなければならない…
と考えていた。

食事を済ませてシェル格納庫である「オルゴンボックス」ブロックに戻ってきたオルスは格納庫の片隅にあるミーティングルームの窓にデルビーの姿を見つけて苦り切った。
——またかよ……
オルスはヴィアネイ出港後、船内のデータバンクに直接アクセスできて閲覧レベルの高いミーティングルームの端末で資料を読んでいることが多くなった。ノーマの話に出てきた異星人(エイリアン)や他のことを調べるためだ。
勉強しろと人に言われてそれを実行するのも癪(しゃく)だったが、ムカついているだけでは時間の無駄だし、他の乗組員に聞くこともはばかられた。ノーマは何も言わなかったが、機密性の高そうなことだったからだ。
実際に調べ始めるとジーンメジャー向きの論文や異言語で書かれた資料ばかり出てきて、しょっぱなからくじけそうになったが、それに没入してしまうと意外に楽しくもあった。
中でも政府の政策を批判した議員の論文を掘り出したときには興奮した。その論文は総合的な検索法では検出できないカテゴリーに属していたが、何故か閲覧レベルの高いローカルリンクが設定してあったからだ。誰が張ったリンクなのかはわからないが、論文は興味深いものだった。
それは宙間審理会議の裁判記録に付属する参考資料で、事故調査委員に任命されたメジャー議員が、私見として著した小論文だった。その中で民間船舶の事故の遠因を「政府が

異星文明との接触を回避し続けているためである」と指摘しているのだ。
そこで述べられている事件に関するリンク類はすべて政府機密に指定されていた。この小論文だけ公開されているのは、政府機密に属する記述を全部リンク先に頼っているためらしい。結果、これ自体を機密指定することができなかったようだ。この発音できそうもない名前のメジャー議員は確信犯的にこういう仕様にしたのだろう。
政府と異星人文明という今まで考えてもみなかったテーマの探求にオルスは熱中した。調べても調べてもわかることは少なかったが、この問題に関してジーンメジャー勢力や議会と政府、ジーンライナーたちが暗闘している気配が感じられるだけでも楽しかったのだ。そう、異星人文明を調べてゆくと必ずジーンライナーたちに行き当たるのだ…。
シェルドライバは他の乗組員と比較して当直時間帯が変則的であることもあって、オルスはこの七十時間はミーティングルームで過ごしている。勤務が終わるとここに来て端末の前に座るのだ。疲れたら床の上で寝た。
ノーマはあれ以降、ここに寄り付きもせず、例によって無視を決め込んでいるのだが…。その代わりにデルビー・アイバースが当直の前後に顔を出すようになったのだ。
管制官が仕事で来るといった用件ではない。菓子や飲み物の差し入れ持参の場合もあるが、文字通りオルスの顔を見に来ている、だけのようだった。
――邪魔…、というだけではない
ひょっとすると船長あたりに偵察するよう言われたのかもしれない、ともオルスは考え

ていた。この部屋の使用許可は取っていたが、使用目的は機動シミュレータのデータ整理としていたのだ。誰も気にしないだろうと思っていたのだが…。
前述の理由でオルスは閲覧したデータのハードコピーやメモの類(たぐい)は残さず、データ閲覧時に自動的に設定される*リンクパスも消去していた。再見したい*アドレスや文書名はすべて暗記している。誰かに閲覧内容を察知される恐れはないはずだった。
もし、デルビーがスパイ目的でここに来ていたとしても問題はないはずだが…。気がかりなことがもうひとつあったのだ。
デルビーが立ち去った後、メジャーの技術者のひとりに冷やかされたことがあったのだ。
「ありゃ、もう少しするとイイ線いくぞ。早めにツバつけとけ」
オルスにとって、それは考えたことのなかった可能性だった。
オルスはジーンメジャーだということになっている。デルビー・アイバースもジーンメジャーだ。
もし仮にデルビーがオルスのことを好ましいタイプの男性++だと考えたとしたら…。
——まさか…、とも思ったし
——もし、そうだとしてもゴマカスのは簡単だ。問題じゃない、とも考えた。
思春期の男の子のような煩悶(はんもん)だったが、オルスの場合、もし仮に破局が訪れるとしたら、それは容赦のない物理的な鉄槌(てっつい)となるだろう。それは比喩(ひゆ)的な意味ではない文字通りの破局になるはずだった。

「それで…？」

「それでって…、バレたら他人事じゃないだろ」

データ採取のためにシミュレータではなくシェル実機での機動訓練を終えたノーマはシェルドライバ控室の椅子に前かがみで腰掛けていた。練習を終えたスポーツ選手のように汗をかいている。少し甘い汗の匂いがオルスの鼻腔をくすぐった。

オルスはそれを快楽の匂いに似ていると思った…。

ノーマは薄く笑って言った。

「確かにお前がメジャーじゃないってわかると大変だな」

「ノーマだって無事には済まない…」

「どうして？」

ノーマは前髪についた汗を息で吹き飛ばした。気楽な表情だ。この事態が理解できてないんじゃないかとも思えた。

「…ノーマは共犯者じゃないか。俺の契約を強要した」

「そうかな…。私は何も知らん」

「……」

「契約を強要した憶えはないし、そもそも、その契約書はどこにある？」

契約書はオルスの手元にはなかった。

確かに物証はゼロだ。
「それにお前は私のセックスパートナーじゃない。メジャーかどうか私にはわからん」
ノーマにデルビーの件を持ちかけたのは、やはり間違いだったとも思った。こういう反応は予想できたはずだ。
「そんなこと言って…、裁かれる立場になったら、徹底的に追及されるぞ」
「裁かれるのは私じゃない。お前と雇い主だな。だが、ジーンライナーがジーンメジャーの法で裁かれた前例はないな」
確かにオルスを雇ったのはローヌ・バルトだ。オルスは今頃になって重大な事実に気が付いた。
——ローヌ・バルトは俺がマイナーだということを知っている！
ローヌ・バルトは確信的にマイナーの自分を乗船させ、シェルドライバにしたのだといら事実に気が付いた。
ノーマの表情にはオルスをからかっているような笑いがうかんでいる。例のフレイに似た笑いだ…。
オルスはこの癇(かん)にさわる笑いを見て、ノーマはまだ何か自分をコントロールするための切り札を用意しているのではないかと考えた。
もう奴隷のように使われるのは我慢できなくなってきていた。ノーマにも、ローヌ・バルトにも、子供のように管理されることには我慢できなくなっていた。

それを察したようにノーマは言った。
「ヒトを殺しそうな匂いをさせてるぞ。それじゃあ自分からマイナーだと周囲に告白してるようなもんだ。……いずれにしろ、デルビーの件は——」
ノーマは立ち上がって、
「時間が解決するだろう。なるようになる」
と無責任なことを言い、そばにあったデータフォルダを放って寄越した。
「そいつをお前のシェルに食わせてやれ。*限界機動パターンのデータだ」
ヴィアネイ軌道での戦闘後、ノーマは自分で選んだデータを頻繁にオルスのシェルに学習させていた。詳細はオルスにはわからない。聞いても「自分で解析しろ」という例の言葉が返ってくるだけだった。
「これから着替える。出ていってくれ」
いきなりノーマはボディスーツを脱ぎ始めた。まだ話を続けるつもりだったオルスの目にノーマの裸の上半身、豊かな乳房が飛び込んでくる。ノーマはあっけにとられて見ているオルスに面倒そうに言った。
「メジャーかどうかは要は全裸にならなきゃわからんだろ。自制してペニスはしっかりしまっとけ」
言いながら脱ぐ手を休めようとしないノーマの様子にほうほうの体で控室から出たオルスは、逃げるようにミーティングルームに戻った。

受け取ったデータフォルダをシミュレータコンソールでデコードしてみると、いつも、オルスが常用する機動パターンを変異させたものやどういう局面で使用するのかわからない機動法が入っていた。
これまでの例では、シミュレータで実際に体験してみてはじめて意味がわかる機動パターンもあるはずだった。
オルスは、自習させるノーマのやり方は自分に対する一種の挑戦だととらえていた。実戦で使えなければ「捨てるぞ」と言っているのだ…と。
もし、ローヌ・バルトが自分の正体をジーンマイナーだと知っているとしたら、ノーマが自分を棄て駒にしようというのは、バルトライナー社の意志でもあるはずだ。企業はマイナーの死を人材の損失だとは考えないだろう。むしろオルスには、それこそが企業にとって合理的なマイナーの使い方だとも思える。
オルスは自分の推測に恐怖した。
――死んでたまるか…今に見てろ…
オルスは心の中で反芻(はんすう)する。
――ノーマが死ぬ
――自分だけが生き残る
――生き残った自分は「勝利者」になる
――そして…

そこで思考のつかえが発生した。短絡的で幼稚な思考…。
仮にノーマが死んだらどうなるというのか…。その後の具体的ヴィジョンはなかった。オルスにとって「勝利者」とは他の人間を屈服させ支配する抑圧者のことでしかなかったのだ。そんなふうにしか思い描けないのは、これまでの彼の人生の中で周囲の年長者とそういう関係しか結んでこれなかったためだ。
「死」という言葉も、オルスは未だに実感できずにいた。
冷蔵庫に詰め込まれていたというパースウォーデンの凄惨な死。
その「凄惨な死」をオルスは自分の眼で確認した訳ではない。その「凄惨な死」はオルスにとってはあくまで情報でしかなかった。
惑星ヴィアネイの戦闘で自分が撃墜したシェルに乗っていたパイロットは「死」を実感しながら死んだのだろうか…。
――殺しを楽しんだようだな
オルスはノーマの言葉を思い出す。
それは多分事実だ…とオルスは思う。「自分の人殺し」ですらも、オルスにはコクピットのモニタ越しに観た情報でしかなかったのだ。
単に情報としての「死」や「殺し」は日常だ。そんなものはニューズリンクでいくらでも知ることができる。もっと「凄惨な死」ですら楽しめる。
ただ、パースウォーデンの死で、オルスにもひとつだけわかったことがあった。

パースウォーデンは自分の視界から消えたという事実。
「死」とは「他者の視界から消える」ことだった。それだけはオルスにも実感できた。
その五十時間後にベルタ・ギースのシェルが現われた。
次の勤務時間までミーティングルームで仮眠をとるつもりだったオルスは、眠っていたノーマを起こしに個室まで行くことになった。ノーマの個室はオルゴンボックスのすぐそばだった。
開け放しにされたままのドアをくぐって中に入ると、ノーマは搭乗用のスーツを着たままベッドの上で丸くなって眠っていた。オルスが近付いただけで目覚めたノーマは、
「…航路索敵(シェルブリット)か？」
と身を起こしながら尋ねた。オルスはうなずくと、
「まだ距離がある。でも…今回は六機だ…」
と答えた。声の震えや恐怖の匂いに気をつけながら。
ノーマは驚きもせず、逆に不敵とも思える微笑を浮かべて言った。
「やはり、無人機だったな」
一瞬なんのことかわからなかったが、例のガンカメラの一件だと気付くと逆に、
──無人だろうと有人だろうと関係ない。あれだけの機動をしてみせるのに…
と思い、腹立たしくさえあった。

「それより、兵装はどうする？　バルトはカーニハン速度に達しつつある」
「……マーカランチャーは使わない。近接戦闘パックを指定しろ」
それを聞いて部屋から出ようとしたオルスはさらに追加の指定の声で立ち止まった。
「それと多段ブースタだ。バランス取りはお前がやれ。整備員にやらせるなよ」
立ち止まったオルスの目に小さな写真のハードコピーが壁に貼ってあるのが映った。殺風景なこの部屋で唯一、目の目標になりそうなものだったからだ。
それは草木の生えていない丸裸の丘の写真だった。丘の上にはぽつんと一本だけ樹が生えていた。
一段目のブースタ切り離し後のアンカー接続には冷や汗をかかされた。燃料を満載した大型の多段ブースタを装着したシェルは二機とも安定度が低い上に、加減速度が鈍く感じられたのだ。
兵装パック装着後にシミュレータでブースタの荷重配分設定をしたオルスは、また罵声かなと考えた。が、ノーマの第一声は、
「コレに関しては気にするな。欠陥品なんだ。これでも実戦的にバランスが取れてるほうだ」
だった。しかし、これではホッとするどころではない。
ノーマはかまわず続ける。相手が六機ともなると、さすがに声に緊張の色がみえる…。

「戦術をもう一度確認する。お前は前衛四機の形成する面を突破し、後衛二機を叩く。前衛がオルス機を反転追尾する場合は私が前進してこれを挟撃する。この場合、オルス機は囮役だ。目標はその場で指示する。敵がお前を包囲する気配があれば全力で離脱しろ。また、後衛の二機以外は絶対に攻撃するな」

声と共に転送されてきた宙域シミュレータ画像は二種類の状況図を描きだしていた。一方ではオルス機は二機を相手に、ノーマ機は四機を相手にしていた。もう一方は…。

六機の敵シェルがオルス機を包囲攻撃する態勢に入っている！

前衛四機が反転してこの包囲網に参加するのには若干のタイムラグがあったが、ノーマがそんな短時間に四機を撃破できるわけでもないだろう。

おまけに前衛を攻撃するな、とくる。

――無茶だ。……いくらなんでも…

「やはり…反撃はしたい…」

「ダメだ。お前が叩くのは後衛二機のうちどちらかだけだ」

「無理だ…これは無茶苦茶だ」

「やれる。勝機は他にない」

「……」

デルビーの声が割り込んできた。

「敵先頭が予想戦闘領域に接近。さらに加速中」

向こう側のコクピットでノーマがそれに応える声がする。
オルスの頭の中をさまざまな疑念が渦巻く。
——ここで使い捨てにするつもりかもしれない
——くそエイリアンなどギースシッピングにくれてやれ、とも考えた。
「…続けるぞ。予定の戦闘領域から離れるな。バルトが回収できなくなる…。以上だ」
「……」
「オルス、聞いてるか？…フレイならやってのけるぞ。接続終了する」
ノーマはオルスの返事も待たずアンカーを切り離して減速を開始した。
まだ加速を開始していないオルス機は必然的にその前面に出た。
オルスは手元に見えるコントロールスティックとスロットルを見た。
——出来がよくて忌々しい機械だ
長く感じる思考停止の後、オルスの意識はこの現実を否認しにかかった。
圧倒的に劣勢な敵を相手に、強力な艦隊の支援の下でオルスのシェルは攻撃にかかる。
オルス機は逃げる敵を追撃し、凄まじい火力で相手を圧倒する。撃破につぐ撃破！　敵エースとの死闘の末、帰還したオルスは歓呼の声で迎えられ、勲章と名声が……。
「オルス機？　敵シェルが予想戦闘領域に侵入…」
デルビーの声で宙域シミュレータを見たオルスは栄光の記憶が朽ちるのを感じた。
レディメイドの物語ではこの現実には対抗できそうもない。

オルスは反射的にスロットルに手をのばし、両手で加速設定の入力、つたないフロー言語で回避パターンの指示を済ませた。シェル側の確認にOKを出してブースタ二段目の点火を待つ。
シェルが慰めるような柔らかい調子でアナウンスする。
「第一巡航加速後、連続で戦闘加速実行」
ディスプレイの外景表示を見たオルスは思った。
——どうして、ここには何もないんだ
何か目に見える目標があればいいのにと感じた。
丘の上の樹のような。
コクピット内の轟音が段階的に高まってきた。

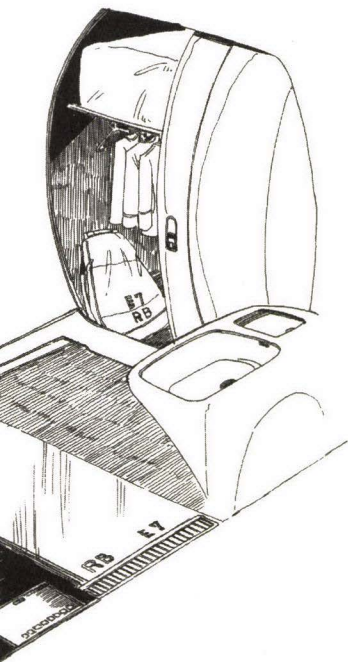
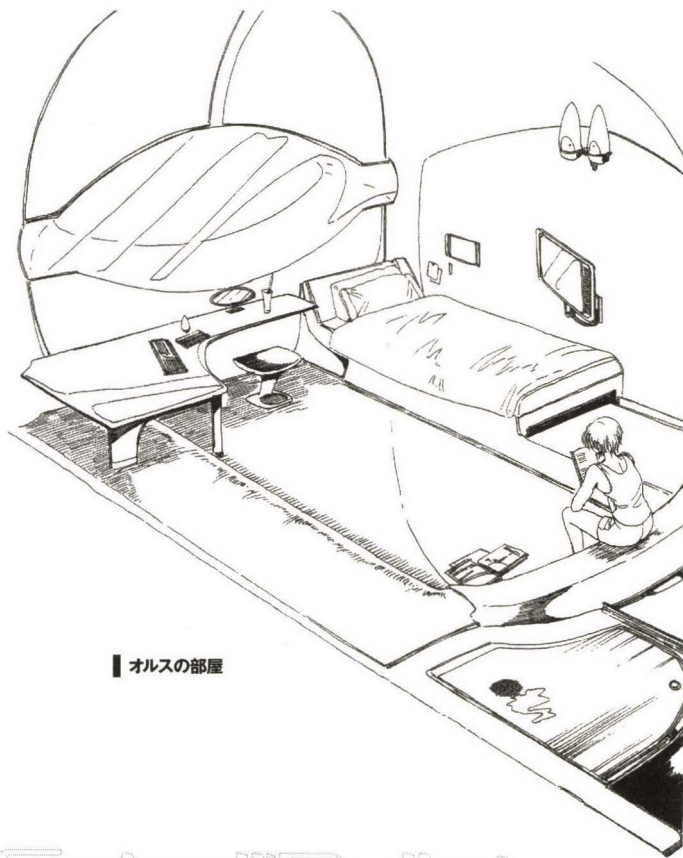
「加速しました!」
コテスの声に宙域シミュレータに目を移したフレイは一機のシェルのベクトル表示が爆発的に伸びるのを見た。
「…おそらく、これがクイック機だ。こっちに殴り込みをかけてくるぞ」
「機動領域に制限をかけさせましょうか?」
「好きなだけ加速させてやれ。いずれにしろ減速して包囲される」
「スレーブ族に強い指示を出します」

「いや、このままでいこう…。サンプリング効率が悪くなる」
「了解」
前衛四機のスレーブ族が敵シェルの加速に反応して軌道をゆるやかに変更、展開する。
フレイ機は予定通りコテス機の前面に出た。

ローヌ・バルト各個室…オルスの部屋

デルビーの部屋を期待した方、残念でした。でも、ほとんど大差ないよ。
しょっちゅう船内のデザインを変えているジーンライナーたちであるが、乗組員の個室は人間の神経に負担をかけないように「あんまり」変更することはない。
各個室は船長、士官、一般乗組員すべて大差ない。個室はあくまでプライヴェートなところで、各人がくつろげればよいという程度の広さしか確保されていない。大きさは、ホテルの小さな部屋くらいのもの。入ってすぐにシャワー&パウダールーム、小さなキッチン、トランクルームがある。私物はトランクに入れるが、オルスはそんなに持っていないようだ。デルビーは大量に服だの靴だのウエット・スーツだのを入れているかもしれないが。
オルスが座っているところから先が、レストルームである。
壁にはマルチモニタがあり、ベッドの枕元には通信専用のコミュニケーターが埋め込んである。さすがに業務関連のものは独立しているが、そういった仕事関連のものはここだけにしかない。
部屋はかなり立体的に作られ、壁の一部がソファを兼ねるように張り出していたり、柱は必要もないのに湾曲している。殺風景な部屋はローヌのお好みではないらしい。窓があるがこれは戦闘時50センチ厚ものシャッターで閉じられる。
また、オルスがずいぶんとラフな格好でいるのは、オルスに限って、いや、ノーマもだ。この下着姿でも船内を自由に歩き、くつろいでもかまわない。これはシェルのスクランブルにおいて、ただちにドライバ（パイロット）・スーツに着替えられるようにという船内の配慮と黙認である。戦闘空域下において、この２人に関してはなるべく下着だけでいて欲しいというところか。

オルスの部屋

16

航路殲滅戦 II

Iconoclasm

敵シェルの展開を宙域マップ上で確認したノーマ・クイックは、機体を第一巡航速度に保ってマップの観察を続けていた。

――前衛四機はやはり無人のシェルだ…

敵の前衛機はノーマの予想通り、突入を開始したオルス機の追尾を開始している。四つの緩やかなループが線画で描かれた花のように宙域マップの中に浮かんでいる。描かれた航跡は時間の経過で端から徐々に薄れつつあった。

広大な戦闘域の奥に位置している敵の後衛二機はオルス機の突入に反応して軌道を変更している。その加速ベクトル表示の明滅は複雑な機動をしていることを示していた。

――とりあえずの大局は安定したな…

ベルタ・ギース側の六機のシェルがオルス機の突入に素早く対応したことで、ノーマの思い描いていた大局的戦術の型にぴたりとあてはまった。これで最初のハードルはクリアできたことになる。

あとは敵側が突入してくるシェルがノーマ機ではないことを、どの時点で気付くのかで戦術が変わってくることになる。

ただ、敵が局面の変化に気付くタイミングだけは予測できなかった。

——レイモン・フレイなら妙な雰囲気には敏感かもしれない…
ノーマは自分自身が何気なく考えた「レイモン・フレイ」という人名に衝撃を感じた。
意識に流れる甘美な衝撃と苦痛。
相手が何者であろうとかまわず打ち倒してきた最古参のシェルドライバ、ノーマは自分の中で何者かが悲鳴をあげ、傷付いたのに気付いていた。
——これは…自分が望んだことじゃない……
宙域マップ上の敵後衛二機を見る。広域表示のマップ上で二機の敵シェルは加速しながら機動領域を確保しようとしている。
——このどちらかにレイモンが搭乗している…
その事実は改めて驚くほどのことではなかったはずだ。
しかし、ノーマの意識は自分の存在位置を一瞬見失い、混迷した。コクピットに拘束されて軽くGのかかっている自分の肉体に意識が何度も何度も出入りしているような感触……。
地上からの凄まじい十字砲火と乱戦に巻き込まれたノーマ機は、座標を見失い、計器を破壊されるたびにあの時のあの声に誘導されて戦線のこちら側に帰還することができていた。
——ノーマ、生きてるか？　これから、あの丘の樹の座標を送信する…
ノーマにとって「あの丘の樹の座標」は死線を越えてこちらに戻ってくるための合言葉

となっていた。それはノーマにとって、すでにどこでもない場所だ。
死線を越える局面には「そこ」は常にあったのだ。
外宇宙にさえもそこは存在した。
何もない場所にある、見えないその場所……。
「くそっ！」
集中力を維持するために目を閉じるノーマ。
シェルドライバの瞑目(めいもく)に気付いたシェルがインターフェイスを聴覚中心にシフトする。
シェルは敵シェルの接近の様子と軌道の微調整についてフロー言語で尋ねてくる。
やわらかく、うつくしい言葉が荒々しく戦闘的なデザインのコクピット内を満たす。
ノーマはそれに答える。目を閉じたまま。
同時に発話されるフロー言語は共鳴するように響きわたった。
だが、それは第三者が聞いていたら不審に思うような余計な枝のついた会話だった。敵の行動と軌道の変更に関する戦術的対話の間には戦闘とはまったく無関係の言葉が入っていたのだ。
それはノーマの告白であった。
痛みに関する告白…。
こういう対話の形式はこれが初めてではない。ノーマシェルは聴聞する司祭の役割をこ

れまでも度々こなしてきたのだ。
そのため、ノーマのシェルは非肉体的な痛みについての知識を蓄積していた。
シェルには知覚できない感覚。
役にはたたないデータ群。
しかし、シェルのデータ領域からこれを読み出したローヌ・バルトによってノーマシェルは次のような特別な命令を受けることになる。
――全力でノーマ・クイックを守れ
ノーマシェルは工場からのロールアウト時に書きこまれていた「全力で搭乗者を守れ」というコマンドとバルトのコマンドは同義であると判断して、その上書きを実行した。
そのコマンドの実行は造作もないことだった。ノーマシェルは人類圏最強の戦闘機械に成長しつつあったからだ。
しかし、敵を粉砕するだけではノーマを守ることはできないことをシェルは学んだ。
守る（プロテクト）という言葉の再定義と自己評価はノーマシェルの日課になった。
シェルにとって未知の感覚と関係性もこのゲームを左右しているらしい。
存在しない傷と痛みは決して癒えないことを、ノーマ、ノーマシェル、バルトの「三人」は経験則として同時に学んだ。
そして今、重装甲の司祭・ノーマシェルは、特別な存在であるノーマ・クイックの言葉を注意深く聞き取っている。

意味のわからない言葉には対応しようがなかった。しかし、それを聞くだけでノーマの戦闘能力が回復することをシェルは知っていた。
戦術打ち合わせの最後にシェルは「(こうして)((我々は((勝利)/(敗北)0))する)」といつものように付け加えようとしたが、論理チェ*ックルーティンがこれを真であるかどうかを保留したため削除した。
その原因は不明だった。

フレイはスロットルを握り直し、エンジン出力が適正かどうかを素早くチェックした。
――妙な感じだ……
この宙域には強いトラップ臭さを感じるのだが、それがなんであるのかわからない……。時間差を置いて交錯するバルトとギース本船の軌道からもその匂いは感じられない。
宙域マップ上に展開されている総計八機のシェルの軌道を見てもおかしなところはない。最大加速度でこちらに突入してくる前衛の敵シェルを追って四機のスレーブ族が綺麗に展開して追撃を始めていた。フレイとコテス機に接触する前の減速でこの敵シェルは包囲されるだろう。事態はフレイの予想通りに進行しているのだが……。
「クリシーが軌道を変更しています！」
コテスが通信を入れてきた。
「なにか、変です」

宙域マップを見ると確かにスレーブ族の一機が敵シェル追撃から離脱を始めていた。
「…ベスとデイヴも軌道を変更して追撃をやめるようです」
クリシーと呼ばれているスレーブ族シェルに続くかどうか逡巡(しゅんじゅん)するようにスレーブ族ベスとデイヴは軌道をゆるやかに変更している。
「割込コマンドで追撃を続行させますか？」
ディスプレイ上のコテスは不安そうにこちらを見ている。
今はスレーブ族シェルに自由に行動させているが、マスター族側から強制割込コマンドを入力してロボットとして支配下に置くこともできる。コテスはこちらに突っ込んでくる敵シェルを恐れているようだった。
「コテス、スレーブ族側から何か言ってきてるか？」
「こちらに通信ありません。戦術および戦術目標に変更なし」
「向こうに割り込むな。自由にさせろ」
「しかし……、勝手に離脱してますが…」
宙域マップを見ると、ベスとデイヴについで最後まで敵シェルに食い付いていたアルも追撃から離脱しようとしていた。
「離脱してない。正しい目標に気付いたんだ」
フレイの顔を凝視していたコテスは事態の真相を悟り簡潔に答えた。
「了解。…アルも軌道反転しました」

前衛四機のスレーブ族シェルの形成する面を突破した敵のシェルは減速を開始した。もう一機の敵シェルは突撃する仲間の背後を守るわけでもなく、その遥か後方でのらくらした目的のはっきりしない機動を続けている。

——……まさか、こっちがノーマだったとは……

フレイは広大な戦闘領域を見回して、スレーブ族シェルが無駄な機動で時間を失ったことを確認するとともに、自分の懸念を再度意識した。

これか？

これがトラップか？

——違う…、これじゃない…

フレイの直感がそう告げた。

「敵シェルとの接触四十秒前、このまま背後を守ります」

コテスが電子的妨害に強い回線に切り替えて通信を入れてくる。無表情を装っているが、不安を感じているのがわかった。

フレイは宙域マップに目をやって一瞬の躊躇の後、返信した。

「コテス、ポジションを入れ替えて軌道を変更する。クイック機の撃破が我々の最優先目標だ。お前はスレーブ族のモニタと戦術介入時に備えろ。突入してきた敵シェルは防御で対処する」

「了解」

フレイはコテス機に回避のための軌道データを送信しながら、その身に感じる焦げ臭いようなニオイがますます強くなってきているのを感じていた。

シェルのメインブースタと外部背面に装着された多段ブースタによる戦闘加速は、重武装したオルスのシェルをロケットモーター付きのゴルフボールのように加速させた。
実際の加速や獲得スピードを感覚的に把握するためのディスプレイ表示が跳ね上がるように反応し、下から上へと流れる…。
全身の血が脊椎(せきつい)中央に集まる感覚と視界の喪失、骨まで押しつぶされる感触は、遠心分離機にかけられた試料になるとこんな感じではないかと思わせた。
――ふっ…、ふぅぅ……
息を吸い込もうとあがくオルスの耳に敵シェル接近の警報音が入ったが、その時はまだ目が見えないままだった。一機目の敵シェルは、耳鳴りのひどい耳で音を聞く限りでは、こちらに追い付けない様子だ。相手も加速してはいるのだろうが…
――奴ら、加速開始が遅すぎたようだ……。今、ココで蜂の巣にはされないつま先と腕に熱い血が戻る感覚と視界の回復後に、残り三機の敵シェルもオルス機に追尾してきているのが確認された。
オルスは荒い息をつきながら追尾してくる四機を自動迎撃するスクリプト*が正常に作動しているのを確認して広域マップを見た。

オルス機は敵前衛四機と後衛二機に挟撃される形になっている。ノーマ機は予定よりマイクロセコンド単位の遅れ…。
——前衛は全機、こっちについて来てる…
自分の悪い予感が的中したわけだが、腹も立たなかった。
すでに敵制圧宙域の奥深くまで侵攻し、多段ブースタの燃料も残りわずかになっている。怒っているヒマにやらなければならないことが山のようにある。
スロットルわきのサイドポケットから小型キーボードを引っ張り出して、多段ブースタの切り離し手順変更を片手で入力しながら、フロー言語でシェルと会話。現状を協議しスクリプト作成。
シェルはオルス案に一部手直ししたものを即座に切り返してくる。
マップ上で敵シェルが予想軌道を外れる。追尾してきた一機のシェルが離脱したのだ！
オルスは敵追尾継続のパターン分岐を適正化。敵の予想軌道はノーマの思惑通りに収斂しそうだった。前衛二機目が軌道修正を開始する前にブースタ爆砕手順の修正を終えた。
マップ上の複数の敵シェルが後方に収束するように消え去ったのを確認したオルスは、前方に現われた後衛の敵シェルを注視した。
オルスの敵はこの後衛二機だ。
シェルは何の合図もせずオルスにマニュアル機動コントロールを引き渡す。
オルスは苦もなくそれを受け継ぎ、多段ブースタに最後の加速を実行させるためにスロ

ットルを操作した。
　スロットルレバーはシェルの操縦介入を示すサイズの変化を時々起こしている。シェル側からの操縦への介入をシェルドライバに知らせるために握力検知式レバーへ入力をフィードバックし、形状を変化させているのだ。
　高速戦闘ではシェルドライバ（人間）の反射神経だけでは対応しかねる局面が頻繁に発生し、それに対するためにシェルが操縦や兵装操作に介入してくる。シェルドライバの反射神経はむしろシェルがとった行動をどう評価し、その次にとる戦術を決定するかに向けられる。
　シェルによる高速戦闘は大局的戦術を決定し評価する人間と、個々のオペレーションを実行するシェルの共同作業なのだ。それまで純粋な機械、奴隷のような機械だけを相手にしてきた軍のパイロットたちには評判の悪いこのインターフェイスにもオルスは完全に習熟した。今ではシェルが次に何をやりたがっているのか、何をするのかを完全に把握しているように感じている。
　多段ブースタの切り離しカウントダウンがみるみるゼロに近付いて…。
　点火したままのブースタはオルス機とは微妙に違う軌道で加速度を獲得。軽いショックで切り離しの成功を知ったオルスは自機を別の軌道に乗せるために限界機動に突入した。

「襲撃！」
　コテスの声とほぼ同時にフレイはフロー言語で——

オルス機が切り離した多段ブースタは最後の加速を実行しながら爆砕され、塵の密集雲となったままフレイ機とコテス機の可能機動領域に入り込んだ。
フレイとコテスのシェルは避けようもなく塵の中を通過する。
相対速度の大きい塵は先頭のコテス機を直撃した。ルイス・コテスはかろうじて可動外殻装甲を前面に移動させて、それをしのぐ。
コテス機の装甲前面が一瞬のうちに赤熱する。
可動部の一部が焼きついてバランスを崩したコテスのシェルはスタビライザーを外側に展開した。
「コテス！」
フレイが呼びかけるまでもなく、コテスは損害報告を開始。損傷によって一部、機動に制限が発生したことが確認された。
オルス機が限界機動によって背面からの襲撃軌道を獲得しているのに気付いたフレイは機動コントロールの大部分をコテス機側に譲り渡し、兵装コントロールを半強制的に奪い取る。
「コテス、先導して離脱しろ」
「この機体でも切り返せますが」
「相手の目標はマスター族エンジンだ。戦術目標を敵にさらすな」
「……了解」

コテスは不満そうに通信を終える。それを見たフレイは、コテスは技量はあるが戦術音痴だという強い印象を受けた。イヤな予感、焦げ臭い匂いがますます強くなる…。

スロットルを握りしめるオルスに応じたシェルは最大ブーストで戦闘加速を実行。虚空を疾駆するシェルは一直線に二機の敵シェルを襲撃する。

敵はブースタの破片の中を通過した影響で機動領域を確保できていない。充分に接近すれば近接兵装*のライアットブラスターで敵の可能機動領域全域を攻撃できる。

相手が相対速度を高めるための軌道修正をしているのに対応しながら、

──こっちは二機の射撃を受けることになる

とオルスは考えた。

だが、不思議と恐怖感はなかった。攻撃同期をとるためのカウンターを見ながらオルスは──

早めの射撃を開始したコテス機にはビーム兵器*でほぼ一直線に交差する敵機軌道へと牽制射撃を開始させた。まぐれ当たりでもない限り、これは実効を期待できそうもない攻撃だ。

フレイは兵装セレクタで重実体弾*を選択し、長距離ライフル*に装塡。外殻装甲をできるだけ前面に展開したフレイ機は射撃姿勢をとった。

ライアットブラスターの有効射程に入る前に敵から攻撃を受ける。
オルスは軌道を変更しない。
シェルは戦闘加速を終了し、次の軌道に乗り換えるための緩やかな減速に入った。
カウンターがゼロに……。オルスは認識誤差のことを一瞬考える。
――まだ……だ……
その時、警報（アラート）が鳴り始め、オルスは衝撃を――

オルス機の胸部外殻装甲板の物理層*と化学層*を斜めに貫通したフレイの実体弾は、胸郭内で緊急展開された内部可変装甲*で食い止められた。
しかし、凄（すさ）まじい運動エネルギーによって積層*ゴルレット鋼の内部にまで潜り込んだ弾頭はそこで炸裂（さくれつ）し、化学反応を引き起こしながら四散する装甲の破片は外部に向かってエネルギーを――

装甲の隙間から爆発によるガスが噴出し軌道が揺らぐ。
オルスはとっさに照準を修正してライアットブラスターをフルオート射撃した。
明滅する光、点滅する弾道が光速で敵の予測軌道に叩（たた）き込まれる。
――食らえ！

敵軌道の修正を伝えるシェルは、トリガーを引き絞るオルスにスロットルを通じて「一次攻撃終了」を教える。オルスは瞬時に反応してスロットルとコントロールで再び限界機動に突入する。オルスのシェルは外殻装甲の化学層から漏れている血液のようなガスを引きながら敵軌道から離脱した。

脳のすべての部分が活性化したような独特の高揚感を感じながらオルスは状況説明をシェルに求めた。外殻装甲内部で炸裂した敵弾は観測機器と電子兵装の一部を破壊し、可動装甲の大部分を作動不可能にしていた。航法、生命維持、動力系の損傷は既にバックアップ側に切り替えられている。

軽度……とは言えない損傷だったが、オルスは即座に攻撃続行を決めた。

——敵は？……敵はどうなった？

宙域マップ上では二機の敵シェルが加速を開始している。

撃破はできなかった…、という思いと手応え（てごた）はあったという感触が脳裏をよぎる。

広域マップ上ではノーマ機と四機のシェルの格闘戦（ドッグファイト）が開始されていた。ノーマ機は常に複数のシェルから攻撃を受けて苦戦している。遥か彼方（はるかかなた）、これくらい距離が離れていると別の戦場だと言ってもよさそうな隔たりで…。

ノーマ機の苦戦を救うには今、ここで無人シェルの戦術を評価している有人シェルを撃破するしかない。オルスはライアットブラスターの残弾を調べると離脱をはかる敵シェル追撃を開始した。

——こいつか?!

ノーマは次の攻撃の主軸となると予想した敵シェルと相対速度を最大にするように軌道を変更する。追尾してくる二機の敵シェルがそれを予測していたかのように軌道を合わせてきた…。

——…学習する時間を与えすぎたか……

敵スレーブ族シェルは対ノーマ・クイック戦術を完成させつつあった。

相対軸軌道をとろうとしたシェルもノーマ機の機動に素早く対応してくる。ノーマは自分の身体が恐怖の匂いを発しているのに気付きながらもスロットルを慎重に絞る…。

先の先を読まなければ即座に機動領域を失ってしまうという局面にノーマは追い詰められていた。

ノーマシェルは今回の出撃でシェルドライバの集中力が低下したままであるのを感じとっていた。対する敵はお互いよくコミュニケートがとれ効果的な攻撃を続けている。

——（我々は（狩られている（敵に）））

とノーマシェルは考えた。ゲームの主導権は初手から敵に握られたままだ。

敵の戦術と学習のスピードを評価してみる。

その結果、ノーマの勝率評価は低下した。だが、

――（〈守る〈ノーマ・クイック〉〉全力で）
とノーマシェルはいつも通り考えた…。

複雑な回避機動をとりながら第二次攻撃を開始したオルスのシェルは、必死に回避を続ける二機の敵シェルに追いすがった。敵軌道に対して深く侵入しているので、敵シェルが可能機動領域内でどんな動きをしようと、もはや逃れようがない。
――チェックメイト*だ
強大なエンジンの響きを背にスロットルコントロールに集中するオルスは、好きなように料理できる獲物を前にして圧倒的な全能感に酔いしれた。
意識が研ぎ澄まされながらも、強力な戦闘機械と脳髄がどろどろに溶け合う感触。想像を絶する大パワーを叩き出すライナーメタリカ製パワーユニット〝ディアブロス〟は完全にオルスの隷下にあり、自分の肉体の一部となっている。
回避を続ける敵からの反撃も悪夢のような重装甲に守られた自分には無力なものにしか感じられない……。
それは危険を忘れさせるような官能的な体験で――

「次の攻撃は回避できません！」
コテスの声に狼狽(ろうばい)の匂いを感じたフレイは苛立(いらだ)ちを感じた。

「機動に集中しろ。攻撃はかわせる！」
かわせるというのは嘘だが、それはコテスもわかっているはずだ。
――初手でつまずいたな……
この素早い軌道の展開、読みの確かさ……。相手は本当にノーマじゃないのだろうか？
あの時のあの少年がシェルドライバなのか？
襲撃のための加速に入った敵シェルを照準に入れたフレイは考えた。
――……似ている……。今は俺が敵か……
不規則に回避を続ける敵シェルを、フレイのシェルがサポートして照準ロックする。その時、自機の軌道の微妙な変化に気付いたフレイは――
コテスは軌道の入力を終え、緊急加速の準備を終了した。背後で射撃姿勢をとったフレイ機を見やる。
フレイのシェルは最初の攻撃の至近弾で装甲の一部が欠落している。敵の火器は光子弾だった。直撃されれば、いかに重装甲のシェルでも完全に蒸発してしまうだろう。
敵の照準はフレイ機に合わされているはずだった。
離脱の機会は敵シェルがフレイ機を攻撃した直後にしかない。
コテスはそのチャンスを逃すつもりはなかった。
――お元気で！　ミスタ・フレイ……

コテスは自分の巧みな操話術で後衛ポジションに誘導された哀れな上司に別れを告げた。

長距離からの敵の第一弾は運よく外れた。しかし、オルスにはそれが必然のことのように思えた。

――あたるわけない！

ライアットブラスターの射程内に入るまでにもう一射の射撃を受けることがわかっていたが、それも脅威とも思えなかった。

軌道の取り方を前回とは変えたオルス機は戦闘加速のまま攻撃開始距離に突入した。

Rの異なる細い螺旋軌道を描くオルス機はフルオート射撃を開始し、閃光の収束する敵軌道からの射撃をかわしながら残っていた光子弾をすべて叩き込む。

離脱開始前に敵軌道上で予想以上のエネルギー反応を観測。

戦果の確認を敵軌道に射出した偵察ポッド*に任せたオルスは限界機動での離脱を開始した。

近接した敵シェルが予想外の「悪い手」を選択したのを見たノーマは反射的に攻撃を開始した。

近似軌道に乗っていた一機の敵シェルが砕け散るように撃破される。

――しまった！

咄嗟に攻撃したものの、相手の手に乗ってしまったと考えたノーマは緊急加速を実行し可能機動領域を確保しながらの離脱を試みる。が、予期した敵の攻撃はなかった。

宙域マップを見ると自機の周囲に展開していた敵シェルがいっせいに撤収を始めているのがわかった。

――そうか…オルスの方が終わったのか

ノーマが撃破したのは他の三機を逃すための囮だったようだ。撤収する三機の敵シェルは既にノーマ機の追撃が及ばない加速度を獲得している。

広域表示のマップでオルス機と加速する一機の敵シェルを見る。こちらもオルス機の追撃が届かない軌道を選んで一挙に加速しているようだ。オルス機の通過軌道のそばにはエネルギー反応の残像が表示されている。これはオルスに撃破された敵シェルだろう…。

「…………、よく…やった…」

各種のアラートが点滅するコクピットでマップを見つめていたノーマは、オルスにかける言葉を練習するかのようにつぶやいた。

オルス機が接敵してから約三百秒が経過していた。

カーニハン速度到達のために加速するローヌ・バルトが戦闘領域に到達しつつあるのを確認したノーマ・クイック機はオルス・ブレイク機に接近する加速を実行（これはまだ燃料に余裕があるクイック機が状況不明のブレイク機をサポートするためだと推定されてい

なかった)。

る。実際、ブレイク機はバルトの軌道軸に合わせて相対速度を調整する燃料しか残ってい

クイック機は接近しながらブレイク機と交信。機体状況と戦果報告を受けた。ブレイク機はガンカメラ映像などもクイック機に送信しているが、シェルドライバ同士の会話は記録に残っていない(詳細調査中)。

バルト側の管制官デルビー・アイバースが交信に参加。バルト本船の記録によればブレイク機を先に着艦させるのはノーマ・クイック主導で決定された(クイック機にも損傷あり:調査中)。

ブレイク機の生命維持系統が半分になっていることと燃料の問題がその理由となっている。

この結果、アイバース管制官はそれを承認。

クイック機の再加速が不可能になったが、この判断は妥当なものであったと考えられる。

ブレイク機着艦。エアロック内では異常がなかったものの、ブロック内への収容時点で高温のシェル装甲板が発火。重防護服を着用していなかった甲板員五名が火傷(やけど)。作業手順にミスなし(調査中)。収容作業遅延。

クイック機着艦。着艦失敗。クイック機は着艦寸前で相対速度を維持できなくなった(ようにみえる:調査中)。降着甲板に接触後、艦尾L面側にはじかれる。甲板に接触痕(航海士K担当:調査終了)。

軌道調査（航海長：調査中）。
再加速不可能なクイック機は本船後方に取り残された。
船長、バルトと交渉（記録あり）。クイック機とバルト、暗号通信で交信（詳細不明）。
航海長によってノーマ・クイックの生存収容は不可能であることが当直中の中央管制要員全員に示された（記録あり）。
バルト、予定通りワイプアウト。
事故調査班臨時編成。

（以上、ノヴァーリス船長による覚え書）

バルトが見えなくなるまでの短い時間、意識は空白だった。
なすべきことはもうすべてやり終えていた。
帰るべきところがなくなってしまったという思いは本来ならば、恐怖や哀しみをともなわなければならないのかもしれない。だが、何故かそれについては感傷的にはなれなかった。
粉砕される装甲と流血、飛来する死と猥らなほどあからさまな生存欲のぶつかり合いのさなかでも、どこにもない場所を信じることができていたのだが……。
ノーマはいつの間にか、こんなに遠くまで来てしまったと思い、自分をここにたどり着

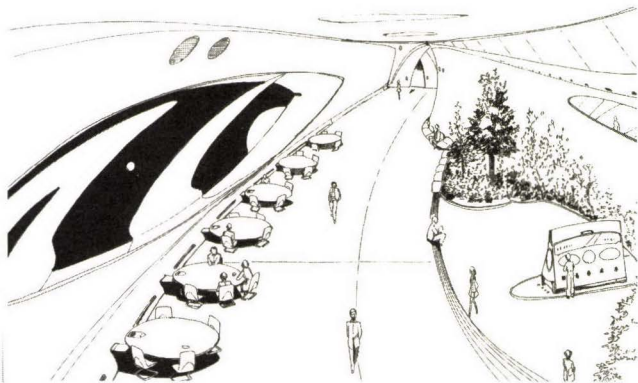
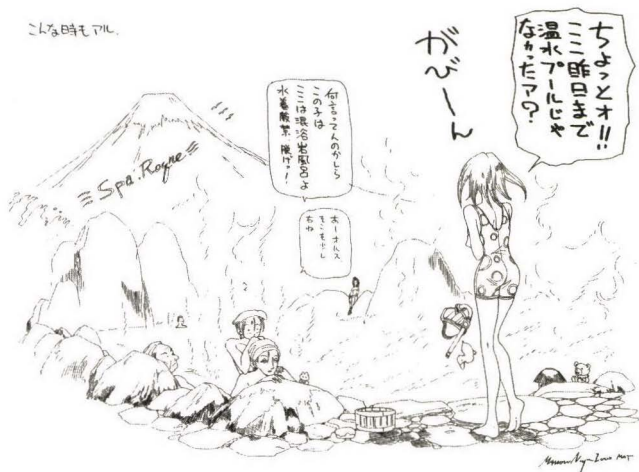
かせてしまったあの言葉…
『できそこないのウジ虫。石の裏でも這ってろ』
を思い出す。
あの言葉を幼いノーマに吐きつけた大人に何かを証明してみせられただろうか？
答え――………わからない…
自分の探究していたもの、それに少しでも近付けただろうか？
答え――わからない
ここで終わる自分の人生、これは幸せなものだった？
答え――これも…わからない
わからないままになってしまった事柄が多すぎる……。
この世界のことをもっと深く知り得なかったことだけが心残りだ。
物思いにふける長い長い時間の後、コクピット内の気温が静かに低下してきた。
シェルが柔らかな声で…おそるおそる尋ねてくる。
「ノーマ、……寒くないか？」
もうシェルには何もできないことを知っているノーマは笑って答えた。
「…シートがひんやりして気持ちいい……」
貴重な電力を消費して見る外の広大な世界、星々の世界は相変わらず美しかった。
それは、かつてのノーマに、どんな大人たちも決して教えられなかった贅沢だった。

ローヌ・バルト船内ご案内

船員（社員）の個室がコンパクトで必要最小限のものしかないために、多くの施設が船内に用意されている。非常におしゃれにデザインされたレストランやカフェはもとより、プールなどのレクリエーション施設、ファーマシーや映画館、さらにライブラリやショッピング・モールさえある。
船体のメイン通路を利用したロビーもあるが、ここは船員がくつろぐ場所だ。ローヌの性格を反映した美しい曲線で構成され、限られた空間で最大限のくつろぎを提供出来るように各所、きめ細かい配慮がなされている。ローヌの基本はこういった曲線美にあるようなのだが、これ、映画にするときとかアニメにするときとかものすごく大変そうな美術だ。
それはさておき、船員の個室にないもの。それはトイレ、洗濯、風呂、掃除、と言ったところ。トイレは環境と衛生を考えて居住区各ブロックに4カ所あり、ここを使用する。風呂は、部屋にもシャワーがあるが、日本の銭湯やヨーロッパのスパ、サウナなどの施設がちゃんとある。
洗濯や掃除はローヌが自動で行なう。どうやってゴミとそうでないものを区別しているのだろう？　デルビーが「ああ〜〜〜。ぽっきーの懸賞応募券が付いた箱捨てられた〜」とかわめいているのを同僚が見ているので、結構掃除される側も大変かもしれない。オルス「あのパンツ、まだ穿こうと思ってたんです……」。
だが、長い航海。どうしたって出てくる船内恋愛とかデートとかローヌに監視されながら大変だとは思います。

ローヌ・バルト側面大廊下

ローヌ・バルト船内某所

こんな時もアル。
ちょっとオ!! ここ昨日まで温水プールじゃなかったァ?
がびーん
何言ってんのかしら この子は ここは混浴岩風呂よ 水着厳禁、脱げっ!
あーオルス そこも少し
Spa:Royne

17

勝利者の隠れ家

Hide and Seek

ローヌ・バルトは予定通りに通常空間からワイプアウトし、船内時間が僅かに逆行する*クォンタムジャンプの後に数十光年先の外宇宙にワイプインした。
速度を失ったバルトはワイプイン直後から再加速を実行。周囲の宙域観測を続けながらカーニハン速度獲得の準備を進めていた。
その結果、通常空間へのワイプイン一時間後に重力変異を観測。これはベルタ・ギースのワイプインだと思われた。
ベルタは距離を詰めてきていた。
この航海の目的地、ポート・リヴァプトルまではあと二回のワイプがある。そばに寄り添うような航路をとっているベルタ・ギースに妨害されてローヌ・バルトがカーニハン速度を失い、失速してしまう危険性は前にも増して高くなっていた。
そういう状況の中、噂話の女王デルビー・アイバースが沈黙を守ったため、ノーマ・クイックの名が乗船名簿から抹消されたことは、ごく一部の乗員だけが知る事実となっていた。
オルスの言葉で言うなれば、ノーマ・クイックはローヌ・バルトすべての乗員の「視界から消えた」のだ…。

先任シェルドライブ要員、ノーマ・クイックが「欠損」したことで、オルスはその事後処理に忙殺された。

着艦後に発火して火災を起こした自機の事故の調査に始まり、船長による事情聴取、甲板の接触痕の調査協力、軌道データの整理提出、エンジン換装とシェル装甲板の補修に関する雑事……、それにこれまでノーマがこなしていた索敵報告書の提出も済ませる必要があった。

その結果、ノーマが「消えた」ことについて、オルスは深く考えなくて済んだ。

着艦収容後にブリーフィングルーム内で見た降着甲板のマップディスプレイ、甲板から離れてゆくノーマのシェルを示す光点だけが、オルスが感じられたリアリティのすべてだった。

何が起こっているのかわからなくなり、薄い理解から滲むように浮きあがってきたショック……。それが見ているだけで叫びをあげたくなる光景だったのは事実だ。

だが…、「それ」を受け入れてしまった今、冷静に事態を受け止められるようになった今となっては…。

……砕けて皮膚の外に飛び出した骨や間歇的に噴き出す血潮、悲鳴をあげる顔や焼ける肉を見なくてすんだ。こいつは清潔な死、誰でもすんなりと受け入れられる死だ。

それに、ノーマがいなくなってくれてホッとしたのも事実だった……。もう、頭を押

さえつけられて、いいように使われるのにも飽き飽きしてきていたのだ。
このことに思い至るとオルスは一種の解放感すら感じた。
狭い領域ではあるがシェルドライブ関連では自分が最先任の存在、つまりボスになれたのだ。ノーマのように采配をふるう自分の姿を想像すると疲れを忘れさせるような充実感に浸ることができた……。
例の契約書はまだ有効だ。
だが……
――ノーマは消えた！
――自分だけが生き残った！
――俺はまた「勝利者」に近付けた！
――この充実感は…「勝利者」の栄光だ！
オルスはこう考えて自分の勝利を喜んだ。が、こう付け加えることも忘れなかった。
――…この次は…わからない…、でも、今しばらくはこれを楽しめる…
この喜びには胸焼けしたような後味の悪さと心の芯が蕩けるような甘美さが同居していた。
「勝利者」の栄光。オルスにとっての勝利者の実感とはどんなものだったのだろうか。
それは他人に対する優越感と軽蔑の集合体だった。

——俺は優れた人間だ
——優れているからこそ、うすのろどもとの闘争に打ち勝ち、馬鹿どもを粉砕して生き残れたのだ
——今まで俺の優秀さを認めてこなかった人間すべてを俺は打ち負かした
——これからも、俺は次々に現われる負け犬どもを粉砕できる！
——やはり、俺は正しかったのだ……
——俺に説教した大人たち！　俺を笑った奴らを見ろ！
——奴らには「勝利者」の栄光はない！　奴らの知識や経験は全部クズだ！
オルスは自分には未知の学識や経験を軽蔑した。それは「勝利者」である自分とは無関係の存在だから必要のないジャンクだ！
オルスの自我は自分のセルフイメージを拡大し、それは胸を張った体格のいい大人の男に成長した。
その男は自分の反対者を叩きのめし、強力な武装＝シェルを使って敵から自分の家族を守る。かつては自分の先輩や教師だった人間はその男＝オルスの力の前にひれ伏す。
そして、胸を誇らしげに張った男＝オルスは自分の家族と負け犬となった人々の前に立ち、こう告げる。
——俺の声を聞け！
軍服のような制服を着た胸の厚い男＝オルスは周囲に響き渡る声をあげる。これからも、

強力な武装＝シェルはオルスに無限の力を与え、敵対者を叩きのめしてくれるだろう。
陶酔の瞬間…。蕩けるような力の歓喜！
船長と打ち合わせをしながら、甲板員に作業を指示しながら、航海長からベルタの動向を説明されながら、オルスは繰り返し繰り返しこのことを考えていた。オルスは「勝利者」のイメージにとり憑かれていた。
思考回路のギアがほんの瞬時でもニュートラル状態になるとオルスの精神は「勝利者」の周囲を堂々巡りするのだった。際限のない回転運動…。
だが、何のために？　これにどういう意味がある？
精神の圧力弁は自省を求めて甲高い悲鳴をあげていた。
だが、オルスは「勝利者」の与えてくれるセルフイメージの快楽にただひたすら酔いしれていた。高温高圧の自閉回路…。狂信と狂気への助走…。
しかし、オルスはこの素晴らしい法悦を誰かと共有したい、と思った。
そこに現われたのが……、デルビー・アイバースだった。

ノーマの事故から今までデルビーを見かけなかったことにオルスは改めて気付いた。
ミーティングルームに現われたデルビーは「疲れた顔をした小柄な少女」だった。
――負け犬の顔だ…
オルスはジーンメジャーの少女の…、「ジーンメジャーの」涙の跡が残っている顔を見

て直感的にそう考えた。
――「ジーンメジャー」とはいえ所詮……躁病患者のように回転を続け、目の届く範囲のすべての事象に密やかな軽蔑の視線を投げかけ続けていたオルスの頭脳はここでふと我にかえった。
――…………いや…、デルビーは「負け犬」じゃない…
デルビーでさえ「負け犬」と呼んでしまう思考の暴走にオルスは初めて気付き、あわてそれを取りつくろった。
蒼い顔をしたデルビー・アイバースはミーティングルームの戸口に突っ立ったまま、こちらを見ている。
「デルビー？」
オルスは挙動不審のデルビーの様子に声をかけてみた。
デルビーはその声に従うように部屋に入ってきて、オルスが譲った椅子に腰掛けた。
――ノーマのことがこたえたみたいだ…
デルビーはオルスとは視線を合わせようとはせず、所在なさげに部屋の一角を見ている。後ろで束ねた髪のほつれ毛をぼんやりと見つめてしまったオルスにデルビーが話しかけてきた。
「ノーマは…もう死んだと思う？」
事故から既に四十時間が経過していた。ノーマ機の生命維持装置がもう稼動していない

ことは明白だった。

「………………」

オルスには何と答えていいのかわからなかった。助けのように脳髄の深い部分からの声がわき上がり響く。

――気にするな。結局は負けてしまった人間だ……

「…デルビー、もうそのことは考えるな。つらいことだけど……現実は変えられない」

デルビーはオルスを見上げて答えた。

「……そうね…。………あたし、考えて…どうにかならないかと考えて…、何を考えていいのか、わかんなくなっちゃった…」

「……」

「…誰か超常的な力を持った人が現われてくれないかと願ったり、……ついさっきまで、ローヌ・バルトとバルトライナー社を告発する文章を書いていた……。で…、自分が何をしてるのか気付いて…泣いたわ…。ノーマの事故については泣くより怒っていたのにね…」

デルビーはそう言うと口の端で笑って見せた。

「…結局、あたし、怒りながら自分を守ろうとしていた…。それで…泣き疲れて、…生き残っているシェルドライバと話をしたくなった…。本当にそこに、オルスがいるかどうか確認に来たわけね…」

話をするに従い、蒼かったデルビーの顔に血の気が戻ってきているようだ。デルビーの様子がよい方向に向かっているのを見て、オルス自身も元気付けられるように感じた。
オルスはデルビーに微笑みかけてから話し始めた。
「俺は…負けなかった。今、こうして現実に生き残っている。これは『勝利者』への道だ。…これが現実、唯一の現実だ。…俺だけじゃない、バルトもデルビーも生き残り『勝利者』への道を歩んでいるんだ…」
父親として彼女を導かねばならない、そう考えて口にした言葉だったが、それを言いながらオルスは、自分の逞しさを楽しめた。
「そうね…あたしたち生き残ってる…」
オルスは自機の装甲板に描きこまれた二本のキルマークを思い浮かべた。
「俺は…レイモン・フレイとピナ・パワーズというエースを撃破したんだ」
「そうね…フレイ機の撃破は正式に認められたわ…」
「あの『ジーンメジャー』の…、いや、元軍人のパイロットを倒したんだ…。あの男も結局は負け犬だった。俺はこれからも生き残ってゆく自信がついたよ。俺は負けないんだ」
オルスは連絡船とレストランで見たフレイの逞しい容姿を思い起こしていた。
だが、フレイは俺に負けたのだ。フレイはもったいぶった優雅さを身に付けていたが、それも全部、無に帰した。あれは「勝利者」の条件とは無関係の虚飾だということが証明された。

胸のすくような気分だ。
「そうね……彼は負け犬ね…。それにノーマも…」
オルスは視線をこちらから外して部屋の壁を見ているデルビーを見て、しまったと思った。ノーマから話をそらすつもりが失敗した…。
「いや、デルビー、ノーマは…」
「…ノーマは…何？」
――ノーマは……
オルスはそれに直接答えることを避け、精一杯大人らしい口調で諭した。
「……デルビー、忘れるんだ。死んだ人間は生き返らない」
オルスは、ノーマについて初めて「死」という言葉を口にしてみた。心に動揺はなかった。
「これが現実なんだ。負けた人間は他者の視界から消える…」
オルスは陶酔に満たされていく。
「…………」
デルビーは緊張で身体を固くして、室内の一点を見つめていた。
「…大人になれ、デルビー。現実を見ろ…」
「……」
「俺たちはジーンメジャーだ。ジーンメジャーらしくしてくれ…」

デルビー・アイバースは顔を上げてオルスを見つめた。強い意思の感じられる瞳でこちらを凝視したあと、こう言った。
「無理よ。あたしはジーンメジャーじゃないから……」
急激にオルスの胸は動悸した。
「何を…言ってるんだ？……」
「そしてオルス、あなたもジーンメジャーじゃない……。ジーンメジャーじゃない人間がジーンメジャーらしくするのは無理よ」
オルスは絶句し、唖然とデルビーを見つめ返す。
デルビーは深い瞳でオルスを見つめて続けた。
「あたし……、ジーンマイナーで…遺伝子特異体なの…。オルスと同じに……」
いつの間にかその瞳は恐怖の匂いを発散していたが、それはオルスも同じだった。
「ノーマが言うように…、あたしたち似たところがあるのかもしれない……」
背をのばして座ったデルビーは他の誰かに話しかけるように続ける。
「でも、……今は…似ている部分に吐き気がするわ…」
「………」
「ノーマは…確かにジーンメジャーだったけど、肉体的には…肉体の能力ではジーンマイナーに近い人だったの知らなかったでしょ？」
「ノーマは肉体的なハンディキャップを持って生まれて、ジーンメジャーの両親に捨てら

れた人で…遺産の相続問題で他のジーンメジャーの家に引き取られるまでは……ノーマ・ブレイクという名だったのよ…。どこかで聞いた苗字でしょ？」

オルスは再構成されたジーンメジャーの螺旋型の家系図、苗字が一緒のジーンメジャー、果てしなく続くライフダイアグラムの地平、家系図にあいた不自然な穴のことを思い出した。

「最初にオルスに会った時のこと、ノーマから聞かされたけど…、彼女、本気で怒っていたんだと思う…」

ノーマと最初に会ったのは、ここオルゴンブロックだった。そして…この部屋の隣にある制御室で殴り倒されて…。

「ニセモノとか、ウジ虫とか言われたでしょ？　オルスの言う通り、人間ってパイプみたいな存在ね…。罵倒されたコトバで相手を罵倒する…」

「ノーマとあたしとオルスはみんな似たもの同士よ…。ニセモノでウジ虫で……どうしようもなく狂暴なところがある…。ノーマのことも…あたし……本当は好きでもなんでもなかったのかもしれない……」

「でも…このヒトはこうやって生きて…、このまま、こういうお婆さんになるんだと…あたし、思ってた…」

デルビーはきらきら光る涙の粒を、手の甲にぽろぽろとこぼしていた。

「あたしたち……、みんな、よそ者で…、ニセモノ同士だから…兄弟や…姉妹のように…

…なれると思ってた…」

自分と同じ遺伝子特異体のデルビー・アイバース、ノーマ・ブレイク、そして自分の名前《メジャー》オルス・ブレイク……。

混乱の中から浮かび上がってくる記憶の断片とそれらの事実は符合して別の「現実」が生成される。別の角度から見る記憶の「世界」……。

オルスは自分のセルフイメージが傷つくのを感じてショックを受けた。「現実」を見ないで自分だけの幻想に酔いしれ、的外れなことに腹を立て、喜んでいる道化がそこにいたからだ…。

奥行きのある空間を疾駆するオルスのシェルは、前衛として展開している無人のシェルの追撃をなんとかかわした。

オルスの戦術を学習する敵前衛の反応は前よりも速くなっている。変数の設定が適切であれば、敵前衛をかわして敵後衛の有人シェルを撃破するためには二回の出撃で目的を達成しなければならないことがわかった。

三回目以降は無人のシェルにブロックされて有人シェルには近付けない。考えられるすべての戦術を試してみたが無駄だった。オルス機の「手」を見て、それに対応し学習するために設定されているらしい無人シェルの反応遅延時間が短くなり過ぎて、オルスのシェ

ルは前衛の防御を突破できないか包囲殲滅の陣形に持ち込まれてしまう。
――マーカランチャーの長距離攻撃をもういちど試してみるか…
オルスは兵装セレクタを指で探って、主兵装を変更した。
と、その時、ディスプレイに表示されていた宙域が瞬き、消滅した。
仮想のスピード感覚に慣れていたオルスは、前につんのめるような眩暈を感じた。
――故障？
いきなり中断されたシミュレータソフトウェアのデータフォルダがささったスロットを見る。
傷だらけのデータフォルダの表面には「オルス用-11」という文字が書かれている。ノーマの字だ…。
オルスはその文字を見て、自分が何か過剰な反応をしてしまいそうな恐れを感じた。
だが、実際には何も感じなかった…。
ミーティングルームでデルビーからこれを受け取った時のことも、もう反芻したくない…。
それは、終わってしまったことのひとつだ。
今現在の集中力、宙域の奥深くに潜む敵シェルの軌道を見通せるような精神状態を乱したくないと感じたオルスはそれから目をそらした。
――………今、考えなくていいことだ…

ギースシッピング社シェルの襲撃の可能性が高くなっていたが、オルスはシェル本体でのシミュレータ訓練に打ち込んでいた。あの日、ミーティングルームでデルビーに渡された訓練用のデータをマスターするためだ。
データフォルダの内容はノーマが実機運用で採取したデータ群だった。
あの航路索敵(シェルブリット)の前にノーマがデルビーに預けたものだと聞いたオルスは、ひょっとするとデータフォルダ内に特別なメッセージでも入っているのではないかと考えたが、内容はそれまで受け取っていたものと同じだった。
シェルに食わせるデータ群。期待していたメッセージはなかった。
ノーマらしい愛想のなさだ。
だが、そのデータ群こそがノーマのメッセージであることにオルスは気付いた。
他になすべきことはない。
――「反省は帰ってからにしろ」か……
オルスはまだ帰るべきところにたどり着いていない…。
そのデータフォルダを使った機動訓練にオルスは取り組んだ。
始めてみると、ただひたすら時間が欲しかった。言葉では上手(うま)く表現できない何かに到達できるのではないかという感触がそこにはあった。
だが、どういう方向性で何を探せばいいのか、どういうアプローチでそこに到達できるのか……、いや、「そこ/それ」は空間なのか概念なのかもはっきりしない。

――これは…一種の狂気かもしれない
――俺は光速で飛翔（ひしょう）する対象を追跡しているのかも…
そう思いながらも、オルスはシミュレータ訓練に集中していった。そこには見えない道（パス）がありそうに思えたからだ…。
オルスは中断したシミュレータが再起動しそうにないことを確かめると、データフォルダをスロットから引き抜いた。そして、シェルのコクピットから出ようとして、ディスプレイの一角に点滅している表示があるのに気付いた。
――接続（コネクト）せよ／OPD－11－001554
とある。表示されているポートアドレスはメンテナンス用の外部通信用のものだ。
オルスはシートに座りなおしてリクエストされているアドレスに接続してみた。
「ミスタ・ブレイク？」
飛びこんできた音声はデルビーの声だった。
――航路索敵（シェルブリット）か…
ギースシッピングのシェルがいつ襲撃してきてもおかしくない状況だった。オルスは
「こちらブレイク。デルビー、状況は？」
と返答してから、この回線がメンテナンス用のもので中央管制には接続されていないことに気付いた。
「こんにちは…、そして、はじめましてミスタ・ブレイク」

とデルビーの声は言った。
「このインターフェイス、すごく窮屈ね…。アイバース管制官の声を借りてるけど、あたしは《ライナー》ローヌ・バルト」
「バルト？」
——デルビー…じゃない？
「自分で構築したデルビー・アイバースの擬似人格（ペルソナ）を通して話しかけてるから、表現法に偏り（バイアス）がかかってるかもしれないけど、意味接続（セマンティックコネクト）できてるよね——」
デルビーの声の後に意味不明の言葉が続き、途切れる。
「失礼、擬似人格（ペルソナ）に負荷をかけすぎたわ…。船長室に用意してあるご立派なインターフェイスは儀式がかってて好きじゃないし、今どうしても話しておきたいことがあってシェルに強制アクセスしたの」
オルスはこの音声通信の声の主がこの船、ローヌ・バルトであることを理解…した。
「ミスタ・ブレイク…いえ、オルスと勝手に呼ばせてもらうわよ。ベルタのシェルが接近しつつある。中央管制で航海士が『アラート・フェーズワン』をちょうど今……宣言したわ」
デルビーの声、いやローヌ・バルトは今、この時の中央管制室をモニターしているらしい。
「で、聞きたいんだけど…、あんた、航路索敵（シェルブリット）する気ある？」

オルスにはバルトの質問の意味がわからなかった。
「……する気って……。するしかない…だろう」
「しなくてもいいわ。選択して」
「…待ってくれ。どういうことだ、これ」
「だから、航路索敵(シェルブリット)を辞退させたげるって言ってんのよ。自信がないとか、腹具合が悪いとか、もう死にたくなったとか理由はなんでもいい。あんたが辞退したら、あたしは減速するか、相手の出方によっては停船する。難しいことは何もない。イエスかノー、オンかオフの二者択一ね」
オルスは「停船」という言葉を聞いて鳥肌がたち……ノーマ機を示す光点の動きを思い出し、この船が航路妨害によって減速や停船したことがないことを考えた。
「…わからない……。俺が…俺に問題があるって意味か、それ…」
姿のない相手の代わりに点滅する文字に話しかけるオルス。バルトは即答する。
「あんたじゃなく、あたしの問題ね。…業務上の判断ではノーマシェルの遺伝子をひくシェルを失いたくない。個人的判断では…いいかげんアタマにきたってとこね」
「……」
「本当に意味接続(セマンティックコネクト)できてる？　あたし、ノーマを失わなきゃならなくなったことに怒ってんのよ」
擬似人格(ペルソナ)は「シェルのスキルデータ*」を「遺伝子」と表現し、「ノーマシェルを失った」

ことを「ノーマを失った」と表現した。
「全部、あの女の采配（さいはい）ミスよ！……前にもあの女のやり方がイヤで本気で会社から逃げ出すつもりだったのに失敗した。ジーンメジャーの議員まで買収して工作したのに！」
「…あの女？」
「ニナ・バルト。知ってるでしょ」
ニナ・バルト。バルトライナー社の会長、ジーンライナー、そしてローヌ・バルトの母親だ。それくらいはオルスも知っていた。
怒った宇宙船は続けた。
「本当に腹が立つけど、あの女をだしぬくのには百年早かった。…でも、今度は停船してやる！」
オルスは膝（ひざ）の上のデータフォルダ、擬似人格（ペルソナ）が言うところの「ノーマシェルの遺伝子」を見る。
「…ミス・バルト……。冷静に答えてくれ。この船…、君がここで停船したらどうなるんだ？」
一拍の間を置いてバルトが答えてくる。
「最強のシェルの遺伝子は守られる。そして修正された航海予定が更にズレるわ。その結果、船荷は予定通り届かなくなり、賠償金が発生し、バルトライナー社が損失を被（こうむ）る。そして…ライナー評議会が…異星船との接触に*ベルタ・ギースを派遣する。ベルタと移民船

コレ15の移民者四千名の運命は神の裁量に委ねられる…。神がいればだけど…」
「……それに、バルトライナー社は俺を訴えるな…」
「…ポート・リヴァプールで船を降りてもいいわ。シェルドライバをやめてもいい」
「無理だ。あの契約書がある」
「あの契約書には穴がある。優秀な弁護士ならすぐに気付くわ。一流の弁護士を雇って法廷でバルトライナー社と争うだけの貯金もあんたにはあるしね…。あんたは勝利して自由の身になれる」
「…………」
　ローヌ・バルトは……すべてを投げ出すつもりらしい…。
「…たった今、航海士が『アラート・フェーズトゥー』を宣言した…」
「俺が…航路索敵を実行して、君が減速しなければどうなる？」
「ノーマシェルの遺伝子は今までにないほどの危険にさらされる。そして、その危険をくぐり抜けた場合にだけ、バルトライナー社のタイムテーブルは守られる。彼らは利益を享受する。ライナー評議会は異星船との接触にあたし、ローヌ・バルトを派遣するわ。あたしと移民船コレ15の移民者四千名の運命は神の裁量に委ねられる…。こうなると神の実在を信じたくなる……」
　段々オルスにもわかってきた。これまでにもこのようなやり取りが、ノーマとの間で交わされてきたのだろう。そして、その度にノーマが彼女を慰め、窘めてきたのだ。ロー

ヌ・バルトは、宇宙最強のシェルのスキルデータに慰められていた…。それは母親の役目だ、とオルスは思った。
　人間には、スキル・マスターデータを失ったシステムの不安は理解できないが、母を失った不安は理解できる。ローヌは、依存すべきデータを失い、パニックを起こしているのだ。まるで、母を失った子供のように…。
「……ローヌ、君……怖いのか？」
　シェルのコクピットは静寂に支配された。ローヌがとても長く感じられる間をおいてその問いに答えた。
「怖いわ……。人間だもの…」
「…最速のジーンライナー、『勝利者』の君からそんな言葉を聞くとは…思わなかった…」
「あたしが年寄りライナーの間でなんて呼ばれてるか、教えてあげようか…」
「…」
「『あのバルトの不良娘』よ。面白いでしょ」
「まさか…」
「あたしはあんたが思っているような良家の子女じゃないし、立派な人間でもない…、ましてや失敗しない機械でもない…。ただの『足の早い娘』よ。……どう？　すごく恐くなってきたでしょ？」
　確かにぞっとする経験だった。

ジーンマイナーやジーンメジャーとは異質であるにしろ、正確無比で間違わないと思っていた存在にこんな告白をされるとは…。
「それに、こういう事態そのものが仕組まれたものだという可能性も考えるべきね。我々は人を殺してでも高密度の情報、生存の確率の高い遺伝子を求めているし、殺された人間の遺族が沈黙せざるを得ない金や暴力を行使する」
「…『我々』って誰だ？」
「我々は我々よ…。異星人以外の我々。いろんな勢力すべて…。都合の悪い人物…ピナ・パワーズやパースウォーデンは「処理」されたでしょ。ニナ・バルトやバルトライナーやギースシッピングや政府や軍や議会の無数の派閥、その他の企業がありとあらゆるものをトラップにしてるのよ！」
「……ローヌ、本当は恐いから行きたくない…。そうなんだろ？」
バルトはオルスの言葉を無視して続けた。
「被害者面しているあたしもあんたをハメたわ！　あたしの擬似人格(ペルソナ)のストックの中に『アウグスティヌス』という名前の少年がいる。知ってるでしょ」
確かにオルスはアウグスティヌスの名に憶(おぼ)えがあった。脳外科医になった少年、《メジャー》オルス・ブレイクの名を手に入れるためにオルスと一緒に世界政府のデータバンクをクラッキングした少年だ。
しかし、それについては「やはり…」という感想しかなかった。『少年アウグスティヌ

ス』については考える時間がたっぷりあったからだ…。
——でも、今はもう…時間がない…
オルスは、今すぐ彼女の父親を演じなくてはならなかった。ローヌは、ノーマシェルのデータを受け継ぐオルスシェルにそれを求めている。
「本気で停船してもいいと思っているのか」
「本気よ！」
「…ノーマは見捨てたのに？」
「カーニハン速度に達していて助けられなかった……。それに…あれは自殺だわ…」
「……嘘だ」
「ノーマは停船したら攻撃すると言ってきたわ」
「ノーマは自殺なんかしない…」
オルスは自分の言葉を反芻してみる。どうしてそんな言葉が出たのか自分でも不思議だった。
だが、その会話で、最強のスキルデータを失ったシステムの不安感を共有したような奇妙な錯覚にとらわれる。もう自分を叱りつけてくれるスキルデータが、この宇宙に存在しなくなった不安。あるいは、もう母の手なしに一人で立たなくてはならないという気分…。
「意味接続できてる？」
ローヌの声は、十四歳の少女に相応しい不安に満ちていた。

オルスは既に用意していた回答で切り返した。
「ローヌ、航路索敵を実行したい。協力してくれ…」
一瞬の間の後、ローヌ・バルトは答えた。
「そんなこと言っていいの？……追加契約でがんじがらめにして…死ぬまで奴隷のようにこき使ってやるわ！」
「…いいよ、奴隷のふりをしてしのぐ……」
「カッコつけて、自己陶酔して、現実を見ないつもり？」
「君こそ現実を見ろ！　俺は契約義務を果たす！　何を言っても停船なんかさせないぞ」
膝の上のデータフォルダとこのシェル、「ノーマシェルの子供」は現実の事象だ。これは無視することのできない現実だ…。
「……」
「俺に選択させるんだろ？」
「…………わかった、了解したわ。…たった今、ノヴァーリス船長がアラート・フェーズスリーを宣言…」
「ローヌ、マーカランチャーを使いたい。これから、カーニハン速度を獲得できるか？」
「射出をぎりぎりまで遅らせれば使えそう。でも、戦闘領域が狭くなる」
「わかった、…それでいこう」
「…あたしが集めてきた人材はみんなどうかしてる。ミスタ・キムとミス・アイバースは

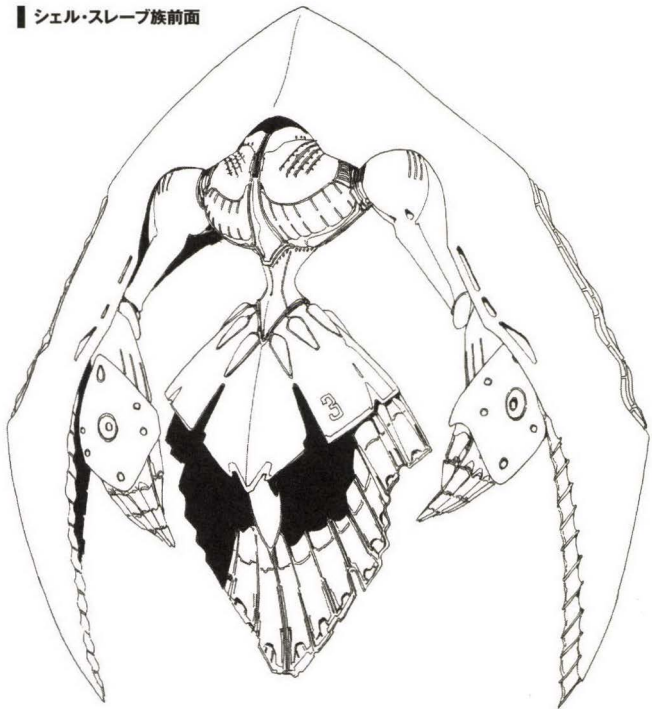
異星船との接触を歓迎してるようにみえるし…」
　オルスは笑った。
　ローヌ・バルトはそれにムッとしたように言った。
「偉そうに笑ってるヒマがあったら、射出前にデルビーに謝罪の言葉でもかけといたら？　この航路索敵の管制官は彼女よ。泣いてスッキリはしたみたいだけど、デルビーはまだあんたにムカついてる…。それに、あたしは新人さんが困ってるのを見るのが大好きだということをよく憶えておいてね」
「いや、笑ったのは君のことじゃないから…。誤解しないでほしい」
「オルス？　航路索敵の要請が出たわ…。敵シェルは四機」
　オルスはコンソールを操作してシェルの制御モジュールをアイドル状態から立ち上げた。
「了解…。最後に君に言っておきたいのは…『アウグスティヌス』のことは気にしないでくれ」
「……え？」
「本当によくできた擬似人格だったし、彼はもう実在の人物だと思っているから…」
「……何が？」
「…えぇと……意味接続できてる？」
「…ミスタ・ブレイク。ふざけてるのか？　それとも何か一発キメてるのか？　どちらにしても犯罪的なサボタージュには厳罰をもって処置するぞ！」

ノヴァーリス船長の声だ。
通信回線はいつのまにか中央管制直通に切り替わっていた…。

シェル・スレーブ

ベルタ・ギースが産んだシェル・スレーブ。それはその名の通り「マスター」に従属する「スレーブ」である。直訳は「奴隷」であるが、この場合はサポート戦闘シェルである。
あまりに強烈なデザインゆえ、見るものを引きつける魅力を持っている。パイロットを無視し、運動性を極限にまで到達させたデザインは凶悪なまでの加速と攻撃力を誇る。そのマネージメントは親機のシェル以上。だがこの戦闘力は親シェルと行動を共にして発揮され、親シェルより上回る性能を与えられているのはパイロットの座を埋め合わせるものであって、スレーブがマスターシェルに勝るということでは決してない。
しかし、このスレーブで蓄積されたデータは、今後のシェルブリットに多大な影響を与えるものと思われる。ベルタ・ギースはそういった意味でローヌ・バルトを上回っていると考えられる。
バトルライナー社を含め、今後のシェル・デザインにも大きな影響を与えるのは必至であろう。各ジーンライナーは現在このスレーブの情報を求め頻繁に動き回っているという。

シェル・スレーブ族背面

シェル・スレーブ族前面

18

ミッシングリンク

the Missing Link

ノーマのデータフォルダに示されていた「そこ／それ」に到達できるかもしれないという感触。瞬間、近づいたと思えば、既に遠く置き去りにされているような、奇妙な感触。

いつかは、その混沌(こんとん)の法則性、デザインの意図がわかる日がくるのかもしれない…。オルスは、ノーマが残したスキルデータの混沌を読み解いてみたい、と思っていた。

困難であるにしろ、探究する価値のあるもののようにオルスには思えた。

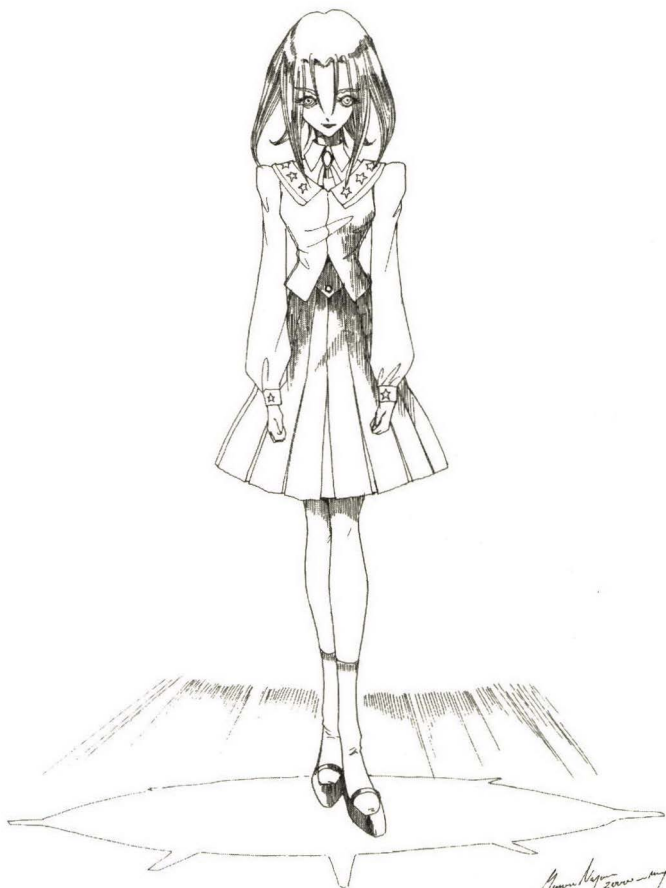
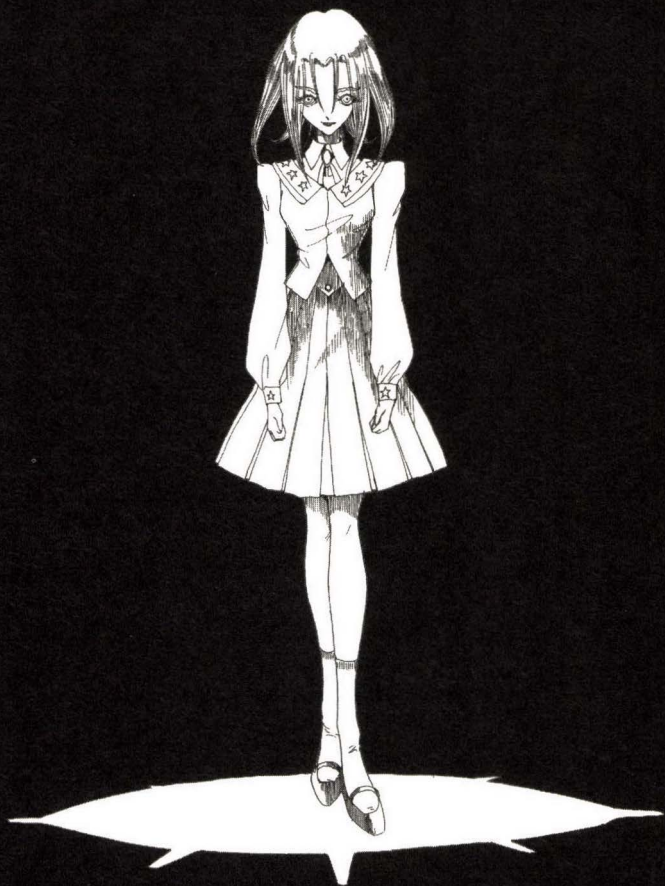
いや、それを読み解こうとする意志だけが、生き残る術(スキル)だと知ったのだ。

あれから、ことあるごとにローヌはオルスに甘えてきた。かつて彼女がノーマにそうしていたように。オルスは、ジーンメジャーであるという偽りと同時に、父親である偽りも続けなくてはならなくなったのだ。

彼女が対話に使用する擬似人格(ペルソナ)は、相手の心の中で、最も甘えの対象となっている人物を選んでいる…ということにもオルスは気がついた。

そういう小賢(こざか)しさは、あの十四歳の少女のプライドなのだ。甘えながら、あくまで主導は自分にあることを誇示したいのだ。

ふとオルスは思う。

いったいノーマは、誰の擬似人格（ペルソナ）と会話していたのだろうか…。
あの冷徹な人間が、誰かに甘えたいと思う瞬間があるとは信じがたい。
やはりノーマも、初めてその声に語りかけられたときは動揺したのだろうか…。
それが誰かをローヌに聞くことも可能だったが、それを知ることに多少のためらいがあった。
それから眼をそらし続けることで、なぜか幾分気が楽になるのだ。
結局、ノーマのシェルは未だ（いま）に発見されていない。あるいはノーマは、単にこのゲームから脱出できる、唯一の方法を取っただけなのかもしれない。もちろん、骸（むくろ）を乗せた機体が、永遠の時間と暗黒をさまよっている可能性は圧倒的であった。が、天文学的な確率で、漂流した機体が生命維持装置の働いていたうちに、どこかのローカル船に拾われた可能性もある。
きっとノーマは、どこかで俺のうすのろを笑っているのだろう…とオルスは思う。
――まがいモノのウジ虫野郎！　石の裏を這（は）ってろ！
突然、シェルブリット待機中のオルスのコクピットに、あの声が響いた。
幻聴、錯覚だった。
いや、本当に錯覚なのだろうか…。オルスは自問してみる。
薄暗いトンネルのようなエアロックを抜けて射出甲板に出たオルスは、「勝利者」の姿が前とは違った姿で立ち現われたように感じていた。

DICTIONARY of Schell Bullet

シェルブリット用語解説

【あ】

●アウターヴィアネイ［↑P12］

「ヴィアネイ」の星系外域にある広大な軍用宙域のこと。

ヴィアネイ方面軍機甲機動艦隊の駐留ベースとして運用され、有事の際の艦隊集結ポイントでもある。

軍用宙域に指定されている関係上、民間船の宙域侵入は緊急時を除き認められていない。

そのためエマージェンシーコールを示さずに侵犯する船舶等に対しては、艦長判断による無条件発砲が認められている。

●アサルトライフル［↑P53］

携行性に優れた連射能力を持つ軍用ライフルの総称。民間の狩猟用ライフルなどと区別するためこう呼ばれる。

「アメラルト」社製MA166－ARや「レミントンR&R」社のAKB－38型などが一般的によく知られており、軍や警察の特殊部隊などで正式採用されている。

そのためMA166－ARの全長を縮め室内での取り回しを容易にしたMA166－WPや、すべてが強化樹脂で作られているAKB－38T（金属センサーに反応しない）など、多くの派生型ライフルが存在しているのも特徴である。

また連射機構を取り外し、代わりに点射式自動装塡機構を備えたものが民間用として販売されている。

●アドレス［↑P178］

データバンク（情報記憶装置）中の情報記憶位置を示す数字。番地。直接指定することによりダイレクトに情報を引き出すことが可能。

●アラート［↑P71］

警報の意。

状況において「フェーズワン」～

「フェーズスリー」までが発令され、カウントが上がるほど臨戦態勢となり、私的会話、不明瞭(めいりょう)な会話や勝手な行動は一切禁止される。
　また「フェーズスリー」では一部のパネルが薄く赤色発光することから「レッドフェーズ」とも呼ばれている。

●アンカー［↑P121］
　有線接触通信用のケーブル。
　先端にピットと呼ばれる情報伝達端子を備え、シェルの外殻に吸着させて接触通信による情報伝送を行なう。
　シグナル（情報信号）は符号化した情報をマイクロ振動波に乗せてピット経由で伝達されるため、走査妨害や傍受に対して非常に有効である。

【い】

●異星船［↑P149］
　「ローヌ・バルト」と「ベルタ・ギース」によって繰り広げられたクリッパーレースの最終目標らしい。
　だがこのことはジーンライナーと世界政府関係者の一部のみが知り得る最高機密事項となっているため、詳細は謎に包まれている。

●1G［↑P46］
　地球基準値による重力表記の単位。
　重力は惑星の引力と自転による遠心力を合わせた力で、基本的には地球上の海抜0メートル地点で1Gとなる。ただし、赤道や極では遠心力の影響により数%の差が生じる。
　また、重力は惑星の質量や自転速度によっても影響を受け、質量の大きい惑星や自転速度の速い惑星ほど地表付近での重力は大きくなる。

●遺伝子特異体［↑P10］
　ジーンマイナーの中にあってジーンメジャーと相似した遺伝子デザイン配列を持つ者、もしくはその体質。
　先天的な遺伝子レベルでの突然変異によるもので、そのデザイン配列からジーンメジャー並の知的・肉体的能力を有する可能性を秘めていると考えられているが、過去にその能力が発露した例はあまりなく、発露してもジーンメジャーの能力には及ばない場合がほとんどである。しかし同じジーンマイナーの中にあっては、その基本的な能力は格段に高い。
　発生率は極めて低く珍しい存在であるが、家庭で視聴できるニューズリンクなどで扱われることもあり一般的知名度は高い。またその特殊性から遺伝子特異体と認定された者はすべて政府管理対象者となり、身柄を中央遺伝子管理省の管理下に置かれることになる。
　遺伝子特異体の存在は「最初のジーンライナー」が地球に帰還して人工的な遺伝子デザインにより、ジーンメジャーという種族が誕生してから初めて見つかるようになった。

ある種のウィルスに原因を求める説、生体場という科学的に立証されていない一種の生気論の実証であるとする説、こうした突然変異体は過去にも存在したがこれまで検証されていなかったに過ぎないとする説等の諸説があったが、遺伝子特異体の子供たちが生まれてくる原因はいまだ不明のままである。

●移民船 ［↑P172］

ヴィアネイの惑星改造成功によって外星系開発の足がかりを得た人類は、次々と地球環境に近い惑星を発見・開発していった。

その背景には食料と資源の確保を最優先で行なわねばならなかった政府の窮状が見え隠れしていたが、ともかくも政府の移民政策の後押しもあり、数千人規模での移民が可能な超長距離大型輸送船の建造が最優先で行なわれ、多くの人々が新天地を目指して旅立っていった。

だが最も近い惑星でさえ片道に数カ月を要していた時代でもあり、事故による遭難や行方不明になった船も数多く、犠牲者は後を絶たなかった。

移民船「コレ15」はそんな時代に建造され、リオス球状星系の惑星「ゼーナ」へ向けてポート・ヴィアネイを出港したが、「重力の落とし穴…」という通信を最後に連絡が途絶えたままとなり、乗員の生存は絶望視されたまま人々の記憶から忘れられていった。

だが2ヵ月ほど前からコレ15からのものと思われる通信を逓信省の天文観測所がキャッチ。十数世紀も前に行方不明となった移民船からの通信に観測所は一時騒然となったが、厳重な箝口令（かんこうれい）がしかれ事態が表に出ることはなかった。

コレ15の通信内容から、船がダメージを受け制御不能になっていること、このまま進むと3ヵ月後に異星の船と接触すること、乗員はほとんど無事であることなどが確認された。

その直後、政府とジーンライナー達の間であわただしい動きが確認されたが、このことは政府の最高機密事項に指定されたこともあり、その後の詳細は不明である。

【う】

●ヴィアネイ管制 ［↑P107］

ポート・ヴィアネイ管区内を航行する艦艇の運行状況を把握して、入出港する船に対し速度や角度、場合によっては待機や迂回（うかい）の指示を出す、艦艇を円滑に誘導するためのコントロール部門。その権限はポート・ヴィアネイ管区内では絶対で、違反艦艇には退去や拘留を行なう権限を持っている。

●ヴィシー自治区 ［↑P9］

ウィラック星系群の外れにある惑星「エルサード」のジーンマイナー

自治区の一つ。
　南部はジーンマイナー達の居住区として割り当てられ、小さいながらも街を形成している。また、北部に位置するなだらかな丘陵を覆う森林地帯は避暑地として知られ、多くのジーンメジャーが別荘を構えていることで有名。

●ヴィデオグラム［↑P7］
　IEP337規格の高密度星間デジタルウェーブや高純度光学樹脂ケーブルを通じて各家庭に配信される、ニュースやコメディ、映画といった映像情報や、新聞、行政刊行物、気象や時刻表といったビジュアルインフォメーションなどを表示するための情報表示装置。現在の家庭普及率は94％を越える（星間アドリサーチ調べ）。
　また政府や企業のデータベースへアクセスするためのデータ・ターミナルとしての機能を持つものも発売されており、こちらは学校や研究施設などに多く普及している。

●ヴィデオグラムソフト［↑P55］
　家庭用ヴィデオグラムでの視聴を目的として販売される映像ソフト。映画や音楽関係のソフトが常に人気の上位を占める。
　映像や音声信号は2センチ四方の光学チップに60時間まで記録されており、価格も500カルから700カル程度と手頃な値段で販売されている。

【え】

●液化セラミックス［↑P77］
　強化セラミックスの原料となる「ナルサガ」や、「カナセリム」といった各種鉱石をセンクト液化溶剤で液状化させたもの。
　硬化剤と混合することによりセンクト液化溶剤が化学反応を起こして分子レベルでの強固な結合を実現する。また硬化時間は硬化剤の投入量により調整することができるが、投入量が多いほど発熱量も高く、時には数千度を超える場合もある。
　ただし、強化セラミック製造の最終過程で必要な7万度の焼入れが行なわれていない分、強度的には強化セラミックより30％ほど落ちる。

●NLAC（NAVY LONGEST ATTACK COMBAT）［↑P55］
　海軍長距離侵攻戦闘団のこと。
　地上軍の中でも生え抜きの軍人、スペシャリストで構成されるエリート集団で、その戦いぶりは〝闘神ガルフも道を譲る〟とすら言われるほど凄まじく、なかには彼らが戦線へ投入されると同時に降伏した敵もいたという。
　何よりも作戦の成功を第一とし、そのためにはどのような犠牲もいとわない。事実、その作戦成功率の驚

異的な高さとともに、死傷率の高さでも他の部隊を圧倒しており批判の声も上がっている。
　退役後の高額な恩給目当てに入隊する者も多いが、そのほとんどの者が戦死するか数年～十数年で転属もしくは除隊している。

【お】

●オルゴンボックス〔↑P22〕
　表向きはローヌ・バルト最外縁部にあるカーゴルームとなっているが、実際はシェルの整備ハンガー。
　未だ極秘扱いのシェルを扱うこともあり中央管制室以上に警備が堅く、常に武装警備員がガードを行なっている。
　また、入室には通常とは別に発行された特別な入室証が必要となる。

【か】

●カーニハン機関〔↑P124〕
　人口爆発により人類が広く外宇宙へ飛び出すきっかけとなった恒星間航行システム。基礎理論設計者「ルール・カーニハン」の名前から命名された。
　カーニハン機関自体は古くから準恒星間航行システムとして一部の艦艇に搭載されていたが、長距離ワイプの際に通常空間へ転移できなくなるという致命的な欠陥が解決されていなかったため、高出力の機関を搭載することができなかった。しかし、最初のジーンライナー船の地球帰還によってもたらされた異星のテクノロジーが当時不可能とされていた問題を解決し、現在では本格的恒星間航行システムとして外宇宙を航行する多くの艦艇に搭載されている。
　また、推進機関のシステム構造は違うが、ジーンライナー船の航法も原理的にはカーニハン推進と同じため、便宜上カーニハン機関と呼ばれている。

●カーニハン速度〔↑P124〕
　空間位相転移航行のためのカーニハン機関を起動することが可能となる速度のこと。

●外星系の銃〔↑P51〕
　銃、特に連射能力のある軍用や警察関係者所有のオフィシャルなライフル銃は厳しい使用星域制限が設けられている。これは銃の横流しや密輸を防止するためであり、星域規制表示のない銃は一目でそれと判別できるようになっている。
　また民間用の銃に関しても、レッドマニュアル（星域外流通規制品目が記載されたマニュアル）記載の銃や、全長や装弾数の制限に抵触する銃の星域外持出しは、宙間輸出法で禁止されている。

●外部レール〔↑P76〕
　シェルのパーツや装甲を固定しておくためのフレーム。

シェルの基本骨格は本体を構成するベースレールと装甲やオプション装着のための外部レール部に大別される。
　ベースレールは分解（厳密にはベースレールに繋がる電磁接続部の非活性化）することでシェルを小さなパーツ群に分解することができる。
　外部レールはベースレールに固定され、支持レールを装着することで様々なオプションに対応することが可能。また内部からの操作により切り離しも行なえる。

●化学層［↑P207］
　物理層との二重層構造のうちの一層で、血液のような高濃度赤色ガスが充塡されている。
　このほとんど液体に近い赤色ガスは各種の信号伝達素子で構成されており、装甲の形状変更信号や各センサーからの情報を伝達する働きを持っている。

●化学弾［↑P71］
　弾頭に特殊な化学薬品が封入された実包。
　機動重歩兵で運用される化学弾には、標的にヒットすると中の酸が飛散して標的を外部から侵食するものや、装甲に浸透し化学反応を起こして発火するタイプのものが多く使用されている。
　他にも毒ガス封入タイプや生物化学弾に分類されるウィルスを内包したものもあるが、これは使用を誤った場合には無関係な民間人も巻き込むため、使用に際しては上級指令以上の許可が必要となる。
　また対人用としては液化毒を封入したタイプが最もポピュラーで、主に暗殺用として用いられる。

●可能機動領域［↑P72］
　速度を持った人工飛翔体が機体の限界を超えることなく、現在速度を維持しながら機動を継続して行なうことができる領域を示す空間。
　可能機動領域は速度と機体の耐負荷限界によって決定され、基本的に可能機動領域は速度の上昇と共に狭くなり、速度が下降すれば逆に広くなる。
　だがどちらの場合も飛翔体が可能機動領域を超えて外に出た場合、機体に限界以上の負荷（重力）がかかり、最悪の場合はその機体がバラバラに分解する事態となる。

●貨物エアロック［↑P89］
　積載資材の搬出入を行なうために設けられた大型のエアロック（可動式気密隔壁）。
　種々なサイズの資材やコンテナを通す必要があるため、ドックによって、10メートル四方の通常通路から300メートル四方の巨大通路までが用意されている。

●カル［↑P38］

世界政府が発行する統合通貨の貨幣単位。

全宙域で流通可能な唯一の通貨単位であり、辺境自治政府発行の独自通貨とのレート交換も可能。

また、カルをポイント変換して蓄積し、ウィルチケット（自社製品の販売やサービスを目的としてメジャー財団やマイナー系企業が発行する引換券の総称）と交換するサービスなども盛んに行なわれている。

●ガロア［↑P18］

エヴァリスト・ガロア。固有名。

中世期の数学者。

革命と数学に生き、女のために死亡した若き天才数学者。

代数方程式の解構造を調べるために置換群を利用し、群の有効性を示した。

ガロア群。

●簡易メンテナンス［↑P38］

携帯する銃を完全に分解することなく、稼動部分のメンテナンスと実包確認のみを行なう作業。

歩兵部隊員は入隊してすぐこの作業を繰り返し叩(たた)き込まれるため、多くの隊員は部隊移動中など条件反射のように自然とこなすことができる。

●ガンカメラ［↑P38］

機体に装着して撃墜の記録や作戦行動中の状況を撮影するカメラ。

その映像は帰投後のデブリーフィングや撃墜認定の際の証拠とするなど様々な用途に利用される。

シェルに装備されるカメラは「ライナーオプティカル」社製のAFA2000－RSと呼ばれるタイプの最新型で、電子光学レンズを採用した無限フォーカスで、記録方式も1フレームあたり1万7000層という高密度記録を実現している。

●管制ブロック［↑P16］

指揮・発令所や推進機関制御室など、宙間航行の要(かなめ)となる艦船操舵(そうだ)の中核エリア。

推進機関の制御はもちろん船内全域の生命維持制御や隔壁操作、兵装制御機能までが集約されていることもあり、管制ブロックの占拠は船のそれと同義である。

そのため軍用艦船の場合は敵による管制占拠に備え、第二、第三管制が備えられているが、一般の商用船で代替管制を備えている船は皆無に等しい。

●換装［↑P45］

既に装備されている装甲や兵装といったオプションを別の仕様に交換すること。

シェルのボディは腕や足が関節から分解できる構造となっており、その腕や足もさらに細かいパーツで構成されている。そのパーツを目的に

合わせて変更することにより、様々なオペレーションに対応することが可能となっている。
ただし、地表での運用に関してはあまり考慮されていなかったため、水分や防塵(ぼうじん)対処されたパーツは数少なく今後の検討課題に挙がっている。

●**カントール**［↑P18］
ゲオルグ・カントール。
中世期の数学者。
無限に続く数に対する分類と算術として超限集合論を発表。
だが当時の数学会では異端扱いされ、師でさえも彼の研究発表を妨害。度重なる非難や攻撃を受けたため少なからず精神を患い、晩年は精神科病院でその生涯を終える。
「数学の本質はその自由性にある」とは有名な氏の言葉。

【き】

●**ギースシッピング社**［↑P12］
ジーンライナー船「シルバ・ギース」によって創設された、業界では最古参に属するライナー系企業。
駿足(しゅんそく)で知られたギース一族により数々の速度記録を樹立。長年にわたり業界の最大勢力として君臨してきたが、「バルトライナー」社の「ニナ・バルト」就航によりその勢力図を大きく塗り替えられてしまった。
傘下に「サカイ重工」や「ゼネラル電子精工」などの巨大企業を治め、軍とも太いコネクションを持つ。

●**軌道上の情報**［↑P109］
衛星軌道上に位置するポート・ヴィアネイ周辺の情報で、艦艇の運行状況や進入制限区域の有無、粒子や浮遊物の分布状況など航行に関係する詳細データのこと。
管制のコンピュータへ接続することで入手が可能。

●**軌道マップ記録**［↑P15］
宇宙を航行する艦艇や飛翔体の軌跡を宙域マップのタイムレコーダーとリンクさせて記録させたもの。
軍用の索敵軌道記録グラフの他に、商用艦艇や一部特殊艦艇に装備が義務づけられている航行記録グラフも軌道マップ記録に分類されている。
タイムテーブル単位に記録対象物の軌跡や速度を把握できるため、企業による雇用ドライバの運行管理や宙間審議会、裁判などでの証拠物件として利用される。

●**吸着振動地雷**［↑P50］
装甲兵装などの外殻に吸着し、特殊な振動を発生させることにより内部にいる人間の細胞結合を破壊して人体を液状化させる振動破壊兵器。
この兵器の効果は生身の人間に対しても有効だが、最も効果を発揮できるのが硬い殻で覆われた装甲服などへの使用時である。
通常はランチャーなどで打ち出す

が、手での投擲も可能。

●機雷封鎖［↑P125］
宇宙機雷を撒布し艦艇の航行を妨害すること。
宙軍の戦術封鎖では単純な封鎖平面を形成するのではなく、アセラス曲面と呼ばれる緯基幾何学を応用した厚みのある封鎖面を展開する。
そのため必要最小量の機雷によって最も効率のよい封鎖面を形成することが可能であり、どのような迂回路を選択しても封鎖面が出現することとなる。

●近接信管［↑P71］
距離センサーが目標への接近を認識して起爆する信管。
あらかじめ設定する目標との距離（信管動作距離）は0以上であれば設定可能で、状況に応じ発射直前での設定変更も可能。
目標付近で信管が作動するため、直撃しなくても相手にダメージを与えることができるほか、散弾起爆用途にも用いられる。

●近接兵装［↑P206］
比較的近接戦で効果を発揮する武器・兵装のこと。
「マーカランチャー」のような長距離狙撃兵装ではなく、「ライアット・ブラスター」や「センチュリアン」といった近接戦用の兵装を指す。

【く】

●空挺戦車［↑P41］
「空中挺進戦闘車両」の意。
敵地に侵攻した航空機からの空中投下によって布陣を展開することを目的とした戦車。
投下後、自ら散布したプルブミナス粒子によって特殊な磁場フィールドを形成し、落下速度を落としながら自力滑空して目的地へ軟着陸する。
重量的には通常の戦車に比べ15％ほど軽量であるが、硬質フェリタングステンでコーティングされた特殊装甲はEK90式突撃戦車並の装甲強度を持つ。

●クォンタムジャンプ［↑P223］
中世期の古典物理学者「ニールス・ボーア」が唱えた「量子の跳躍」。
一般的にはエネルギー推移が突発的に変異することを示す言葉として用いられる。
新量子力学者「クライス・プレッカー」の「プレッカー方程式」によって、加重力状態下での「電子軌道の突発変異によるニーロン輻射（量子エネルギーの飛躍的変異）」と「時間軸における負の変異」が証明された。

●軍情報部［↑P144］
SIMAC（政府諜報活動局）と勢力を二分する諜報・破壊活動の

エキスパート。

ＳＩＭＡＣが政府直轄で主に治安維持や対外交渉の際に活動するのに対し、軍情報部は軍事目的の要人暗殺や諜報活動を展開。配下に暗殺や破壊活動専門の特殊部隊（サプナッス）を持つ。

また軍内部にも眼を光らせ機密の漏洩防止や不安分子の摘発なども行なっている。

【け】

●契約結婚［↑Ｐ105］

ジーンメジャーが種の存続と多様性の確保のために行なう法律でも認められた計画結婚で、資産分配や税制面でも優遇される。

この制度によりジーンメジャー種には従来の「婚姻」という概念が希薄となっており、生まれた子供はジーンマイナーの乳母によって育てられる場合が多い。

こうして他人の遺伝子情報と交配して生み出された新たな遺伝子情報は政府の遺伝子ライブラリに登録され保護される。

また、この遺伝子ライブラリはコスメナシス（大司導会）のもとで管理され、極めて稀なことではあるがマイナス因子を含む遺伝子情報が発見された場合はその遺伝子情報は破棄され、必要があれば遺伝子所有者の排除が行なわれることもある。

●限界機動［↑Ｐ46］

シェルの機体が耐え得る極限状態での機動制御。

長時間（と言っても数分程度だが）に及ぶ連続機動は機体にかかる負荷もさることながら、ドライバに対しても非常に重い負担となるため、機体より先に操縦者が限界を超えてしまうこともある。

●限界機動パターン［↑Ｐ181］

シェルへ入力することにより、シミュレータで限界機動を再現することが可能となる活動データパターン。

既存の限界機動パターンデータにエディタで変更を加えることにより、様々な状況下での限界軌道パターンを描くことが可能となる。

練度の低いドライバなどにシミュレータでいろいろな限界機動を擬似体験させ、経験値を上げる事を目的として使用される。

【こ】

●混乱の時代［↑Ｐ18］

人類がカーニハン機関の実用化に成功はしたものの、その致命的な欠陥から未だ外星系への足がかりをつかむことができなかった頃、巨大隕石の落下に伴う急激な地殻変動、そして突然変異した殺人ウィルスの猛威によって、人類種絶滅の危機に瀕していた時代があった。

人口は4分の1まで激減し、混乱した人々は自暴自棄となり略奪や殺

人などが日常的に繰り返されていた。街は阿鼻叫喚の渦に飲みこまれ、混乱を鎮める側の警察や軍隊までがその機能を失い、人間は自分達自身で自らの首を絞めていったのである。
だが樹立された世界政府の活動によってウィルスの撲滅に成功。地殻変動も次第に収束してゆくと、次第に人々は落ちつきを取り戻し、街はその機能を回復していった。
しかし、そんな危機も一度去ってしまうと今度は逆に人口が急激に増加（俗に言われる「人口爆発」）しはじめ、歯止めの利かなくなった人口増加は貧富の差の拡大と深刻な食糧問題を引き起こし、食糧をめぐって再び各地で争いが勃発し始めた。
そのころ、未だ人類は移民可能な惑星として「ヴィアネイ」しか発見しておらず、そこも移住のための惑星改造が始まったばかりで居住可能になるのは40年後と言われていた時でもあり、月の衛星軌道上のコロニーや火星の人工居住区だけではとても増え続ける人口を収容できないことは誰の目にも明らかであった。
そんな暗澹とした混乱の中、世界政府科学技術省が惑星改造技術の飛躍的革新をもたらす土壌改良酵母の開発に成功、40年かかると言われていたヴィアネイの惑星改造がわずか5年で完了した。さらに政府の移民政策の後押しもあって、人々は大挙して新天地ヴィアネイへ向けて移住していったのである。
こうして永きにわたる混乱の時代は終焉を迎え、時代は新天地ヴィアネイを中心に動き出していった。

【さ】

●最初の外宇宙有人探査船 ［↑P115］

来るべき生存圏の拡充と資源確保を目的として、人類はかなり早い時期から外宇宙に向けて無人探査機を送りこんでいた。
その数は実に1300機以上にものぼり、それらから定期的に送信される膨大な量の情報から幾つかの有力情報を選択し、更なる詳細調査を行なうべく人類初の有人探査船「セーフパース号」が建造された。
新型カーニハン機関搭載の新鋭探査船「セーフパース号」には最新の調査機器と27名の科学者が搭乗し、居住可能惑星の存在が有望視される帯状星団「キュリアス」へ向けて「ヴィアネイ」のゲート1より出航したが、7年後には連絡が途絶え行方不明となってしまった。

●最初のジーンライナー ［↑P115］

人類がカーニハン機関の開発に成功し、外宇宙へ活動の場を求めてから3世紀余りが経過した頃、まだ建造途上であった「ポート・ヴィアネイ」近傍に1隻の奇妙な姿をした宇宙船が出現した。このことはすぐにニューズリンクを通じて各惑星に配

信され、人々は異星船(エイリアンシップ)の襲来と噂しあい恐怖した。
だがその船こそ、出発後に緊急救助信号を発信したまま消息を絶ってしまったラベル第三星系方面調査団、探査船「パルテノスⅣ」の女性スタッフのひとりであり、人類が初めて接触したジーンライナーであった。
ラベル第三星系方面近郊を資源探査中に偶然、異星人の宇宙船の残骸(ざんがい)を発見した調査団は、本来の探査と並行して異星船の調査を進め、稼動可能の医療装置とデータボックスらしい機材を収容して一旦(いったん)帰途についた。しかし何らかのトラブルに巻き込まれたらしく緊急救助信号を発したまま行方不明となり、救助隊による必死の捜索もむなしく手がかりの一片さえ発見することはできなかった。
そして半年後、彼女は建造途上のポート・ヴィアネイ近傍に現われることになる。それが最初のジーンライナーと呼ばれた元探査船パルテノスⅣ乗組員「スザンヌ・ダルトン」だった。
当初、彼女の処遇について世界政府内で討議が繰り返されたが、議会が紛糾するばかりで結論が出るに至らなかった。しかし突如として政府最高指導部は彼女を「人類の進化」と認め、人類とジーンライナーは共存の道を歩むこととなる。
生きた宇宙船の帰還、異星の遺伝子デザイン技術によるデザインされた人類ジーンメジャーの登場は、今では小学校の教科書にも書かれているが、この経緯に関する詳細な情報は今でも公開されていない。
また異星船の残骸の座標、異星船内に何があったのか、パルテノスⅣの遭難原因といったジーンライナー誕生に関わる謎は現在も政府特別アーカイブ内に厳重に封印されたままである。

●作業ロボット ［↑P40］
農作業従事者の補助を目的として製作された農作業用機械。
大規模農地で用いられることが多く、開墾から収穫までこなす多目的作業ロボットから、用途に合わせた単機能作業ロボットまで各種タイプが存在し、政府農林省認定機種は税制面でも優遇措置が受けられる。
私有地である農場で運用されるため特に免許は必要とされないが、定期的に開催される講習の受講が義務化されている。

●サクソン・マリーエン州 ［↑P37］
どちらも気候の温暖なシミュソン大陸のほぼ中間に位置し、大穀物地帯で知られている広大な州。
住民の多くは農業に従事し、ラミやケルトなどといった麦科の作物が収穫され、その多くは穀物管理局のあるサマールレートへと集められて

各惑星に出荷されている。

●サブエンジン［↑P116］
主機関であるカーニハン推進機関が停止、もしくはアイドリング状態にある場合に使用される補助エンジン。
エーテル流体推進機関で、主に低速巡航や宙港領域内で使用されることが多い。
カーニハン推進機関実用化以前からあり、信頼性が高く制御が行ない易いうえ、機関も小型で済むというメリットを持つ。
また内宇宙航行艦艇などには現在も主エンジンとしても搭載されている。

●サブブースタ［↑P79］
補助ブースタ（P290）参照。

【し】

●ジーンマイナー［↑P7］
遺伝子デザインを行なって肉体的能力を飛躍的に高めているジーンメジャー種に対し、遺伝子デザインを行なっていない（行なえない）人々。
その理由は医療関係で使用されるごく一部の遺伝子デザイン以外は、完全にジーンメジャーが独占しているためである。
また過度な遺伝子デザインを行なっていないため、その外見や能力は創成期と呼ばれる時代からほとんど変わっておらず、はっきりと雌雄の区別もできる。
ジーンメジャーとは同一の生活圏を共有することから競合関係にあるが、ジーンメジャーはジーンライナーと共に遺伝子デザインと宇宙航行における貿易とその利益を独占しているため、事実上、ジーンマイナーは最下層の人類とされている。

●ジーンメジャー［↑P10］
「最初のジーンライナー」がもたらした遺伝子デザインの情報と技術を独占し、事実上この世界の支配階級に納まっている種族。
その遺伝子デザイン技術は自らの肉体的能力を飛躍的に向上させ、容姿も在来種の人類と一目で判別できるほど変容している者もいる。
また独占した遺伝子デザインとその技術は莫大(ばくだい)な富と権力を集中させ、今や政治・経済のほとんどを牛耳るに至っている。
雌雄同体でマイナー種と酷似した生殖器官を有するが、マイナー種との自然環境下での交配は遺伝子レベルでの拒否反応が発生するため不可能。
さらに彼らは種の進化を目的とする大司導会(コスメナシス)の指導のもと、厳しい戒律に従って生きている。
その戒律は多様性の確保や弱者の淘汰(とうた)といった種の存続の根幹に関わるものから、遺伝子情報や財産の相続に関するものまで多岐にわたり、

れる。

破戒者に対しては厳しい処罰が下さ

●ジーンライナー ［↑P11］

異星の遺伝子デザイン技術と人類のDNAによって生み出され、地球にそのテクノロジーをもたらした「生きた宇宙船」。

単独での恒星間航行能力を有する。

船体は金属ではなくメタリック粒子の入った絹のような柔らかさを持った特殊な外殻で覆われており、船体から大きく張り出したヒレのようなものを共鳴させてプラズマ・ロケットモーターを加速させる。

また共鳴したヒレからは「フルレット・フォーン」と呼ばれる長く美しい光輪を発し、深海の巨大な発光クラゲの触手のようにのびてゆく。その姿は例えようもないほど優雅で美しい。

武装クリッパーの船体武装は個体によって異なるが、主にレンズ口径2000〜3000ミリのニューロン光線砲や小口径のパルスビーム砲などが搭載されている。

また一般には流通しない自社独自の特殊な武装を行なっている船もある。

ジーンメジャー達は、ジーンライナーから提供された遺伝子デザイン技術の恩恵によって、事実上、人類の支配階級に君臨しているが、実は現在も重要遺伝子デザイン情報のほとんどはジーンライナーが握っている事実を知る者は少ない。

通常時におけるライナー船とのコミュニケーションは高速言語やフロー言語で行なう必要があるため、サポートは特殊能力に優れたジーンメジャーが担当するのが一般的である。

だが特別な場合には、合成された音声を使ってジーンメジャーやジーンマイナーに語りかけることもある。

●シェル ［↑P11］

ジーンライナーが生み出した人型高機動戦闘兵器。

シェルとは開発コードのSCHLの部分を無理やり音読したものだが、開発段階から使用されていたことに加え、「shell／甲羅、砲弾」のイメージもあって俗称として定着した。

全長12メートル。自重75トン。最大積載時180トン。

資産登録の書類上はジーンライナーのオプションとされているが、実際はジーンライナーの肉体の一部、生きた器官でもある。

開発はライナー一族の独断により決定され、ジーンライナー系企業「ライナーメタリカ」社が極秘裏に開発・ロールアウトさせた。

しかし、開発終了から5年が経過した今も一般には公開されておらず、写真も存在しない。

現在、人類が制御できる最速の有人機であり、その最高速度は史上最

速のクリッパー、「ローヌ・バルト」さえも凌駕する。
　宇宙空間を移動する人工飛翔体の中では、最も高速で過激ともいえる機動が可能な最新鋭の戦闘マシンである。
　その高機動性が実現できたのはジーンライナーが独占し秘密としている異星人のテクノロジーがあったからであるが、シェルのパーツはほとんどがブラックボックス化されているモジュールで構成されているため、多くが謎とされたまま使用されている。

●シェル乗組員（ドライバ）［↑P11］
シェルの操縦者で航路索敵要員（シェルブリット）。
　航路索敵要員はそのジョブカテゴリから甲板作業員に分類される。そのため所属は「バルトライナー」社ではなく、船荷の管理・運搬を主として行なう子会社の「バルトカーゴサービス」の所属となる。
　また、その危険度の高さから正社員雇用ではなく契約社員雇用となり、高額の契約金を受け取る代わりに福利厚生などを受けることができず、勤務中に死亡した際にも補償金が支払われることはない。
　シェルという特殊な機動兵器を操縦するため航空パイロットなどの経験者が採用される場合が多いが、それでも訓練期間中に不適格とされて契約解除された者もいるという。

●シェルブリット［↑P8］
ジーンライナー船からシェルと呼ばれる宙間作業機を射出し、航路の確保を行なうことを目的とする船外作業。航路索敵。
　企業間の苛烈なスピード競争により、減速・迂回を嫌ったジーンライナー船が採用した究極のシステム。
　航路上にある障害物を人手により排除するため、高速航行するジーンライナー船の電磁カタパルトから船前方に射出されたシェルドライバは、超高速で障害物に接近し一瞬のうちにそのすべてを排除しなければならない。
　また帰艦も自力で行なわなければならず、失敗した場合でも回収が行なわれることはない。
　シェルドライバ（パイロット）が自嘲気味に使っていた俗称が一般化したもの（自嘲＝しょせん俺は「鉄砲玉」）。

●時限信管［↑P57］
時間設定によって起爆する信管。
　あらかじめ発射後の信管動作タイミング（この場合は時間設定）を入力することにより、目標との距離は関係なく発射後一定時間で信管が作動してミサイルを起爆させる。また信管作動タイミングは発射前に設定することが可能。
　敵の撹乱を目的として使用される場合が多い。

●支持レール［↑P131］

兵装の取付け装置。

外部レールに固定され、支持レールを交換することにより様々なオプションに対応することが可能。

●自動迎撃システム［↑P42］

センサーを用いて接近する物体に対し自動で対空攻撃や銃撃を行なう迎撃システム。

実戦でトラップとして用いられることが多い。

各種センサーと50センチ四方ほどの制御ユニット、攻撃用の武器・弾薬があれば簡単に設置でき、特定波長（任意設定可）の回避信号や鳥獣類などには反応しないよう設定も行なえる。

基本的に軍用装備で一般には出回っていないが、軍による武器の横流しなどによってテロリストなどがアジトの周りに設置する例が多数報告されている。

●シミュレータモード［↑P17］

シェル専用に開発されたシミュレータユニットを接続することにより、シェルに搭載された記憶演算装置から情報を取り出して機動制御を再現することが可能な、ドライバの習熟を目的としたシェルの機能の一つ。

高負荷で危険を伴う高機動訓練や擬似戦闘訓練もシミュレータによって簡単に行なうことができる。

だがシミュレータとはいえドライバにかかる精神的ストレスは想像を絶するものがあり、誰もがすぐに扱える類のものではない。

●射撃スタビライザー［↑P133］

射撃時の反動やブレをキャンセルし射撃効率を上げる姿勢安定装置。

通常は機内へ収納されているが、射撃姿勢を保持する際などには安定度向上のため機外へ露出する。

●襲撃軌道［↑P205］

目標に対し攻撃をかける際にとられる軌道。

優位な立場で強襲をかけることができるため成功率が高い。

●重実体弾［↑P206］

超硬金属系素材で作られた弾。

プラズマグレイン弾に代表される光学系弾ではなく、クリスメタルや超硬質ミオグラム鋼といった硬度45以上の超硬金属で作られた、装甲の貫通を目的とする弾。

内部に炸薬を封入するタイプも存在する。

●縦深突破［↑P126］

目標に対して正面から進行し、眼前の障害物を装備された兵装で排除しながら直進、そのまま離脱する戦法。

シェルブリットなどで機雷排除の

際などによく採られる戦法であるが、並外れた動体視力と反射神経、そして射撃技術が要求されるため、主ドライバはマスター／スレーブ率を100とした列機マスター側でのシェルコントロールが必要になる。

●**州兵連隊**　［↑Ｐ37］

駐屯軍が基盤となって組織された州単位に展開される独立機甲軍。その一連隊。

州の自警団的色合いが強く、兵士のほとんどはその州から集められた志願兵で構成されている（外人部隊を持つところもある）。

装備は基本的に駐屯軍のものと同一であるが、一世代旧式のものが多く支給されている。

とはいえ37式自走砲や92式突撃戦車、支援攻撃ヘリといった強力な兵器の運用も行なわれており、戦力としては駐屯軍に比べても遜色がない。

●**重力不適応**　［↑Ｐ157］

変化した重力に人体の生理機能が対応しきれないこと。

頭痛やだるさ、食欲不振による体調不良などの症状がでるが、しばらく生活していれば次第に適応できるようになる。

●**重力変異**　［↑Ｐ223］

空間に重力の歪が生じること。

大別して惑星間の重力干渉によって生じる場合と、空間転移の際の加重力制御によって生じる場合がある。

●**樹脂製の鏡**　［↑Ｐ８］

混乱の時代以降、価格の高騰した石英や質の悪い再生ガラスに代わり、安価で化学合成が可能な樹脂ガラスの需要が急速に伸びていった。さらに製法技術も年々向上し、特殊強化ガラス並の硬度と透明度を兼ね備え化学的侵食にも強い特殊強化硬質クリスタル樹脂の登場と共に、かつての石英ガラスは一部の特殊用途を除いて完全に樹脂ガラスへと取って代わられた。今では石英ガラスの製品を好む物好きといえば金持ちの道楽コレクターくらいのものである。

また、樹脂ガラスに限らず様々な用途に樹脂が用いられるようになり、金属の電気配線は電導樹脂へ、パルプなどから作られていた紙は化学紙（樹脂製）へ、というように、生活の隅々まで樹脂製品が用いられている。

●**巡航加速**　［↑Ｐ123］

速度の表示単位で基準船（主に母船）と相対する速度を一定の間隔で定めて設定したもの。

第一、第二、第三巡航加速などと表現されることが多く、一般的には数字が小さくなるほど速度は上がる（例：母船の速度の１・５倍↓第三巡航加速、母船の速度の２倍↓第二巡航加速、母船の速度の２倍以上↓

第一巡航加速）。
設定単位（速度）は軍や企業によって違うが、ライナー系企業間ではほぼ統一して使用されている。

●**上院議員が射殺**［↑P90］
セトリア州にあるナセタ小学校を視察に訪れた「メゲレン・セファーロン」上院議員がそこの生徒に銃で射殺された、いわゆる「セファーロン上院議員射殺事件」。
小学生が政治家を射殺し3人に重傷を負わせたこの事件はネットワークを通じて瞬く間にヴィアネイ全域に広まり世間の関心を集めた。
少年は18歳になるガンマニアの従兄の影響を受け、週末には射撃センターへ出かけていくほどのガンマニアであった。
だが警察は麻薬撲滅運動の急先鋒だったセファーロン上院議員だけが額を撃ち抜かれている点から、麻薬シンジケートのヒットマンの可能性もあるとして少年の過去や交友関係を徹底的に調査。麻薬取締局とも協力して捜査にあたったが、結局シンジケートとの接点は見つからなかった。
普段からおとなしく目立たない少年が、日ごろ体罰を受けている教師や学校に対して感情を爆発させたこの事件は教育関係者に大きな衝撃を与え、州教育監督庁の責任者の首が箝げ替えられるまでに至った。
ちなみに股間を撃ち抜かれたジーンメジャーのボディガードはすべてメジャー（男性＋＋）であったが、この事件の後、彼らは（女性＋＋）に登録変更したとニューズリンクで伝えられた。また「子供でも扱える銃を製造した」として銃製造会社である「ティルソン」社を告訴した少年の母親は一審で敗訴。その後、銃撲滅団体へ参加した彼女は組織のバックボーンを利用して現在は上告の準備を行なっているそうである。

●**上級司令部**［↑P14］
「ヴィアネイ」の「サマリアシティ」にある宙軍司令本部内に拠点を置くヴィアネイ宙域統括作戦司令部。
超高速コンピュータで処理された艦隊行動記録データや宙域情報から、「ヴィアネイ」やその周辺宙域に展開する機甲機動艦隊司令部に対し作戦行動を指示・統括する。

●**食券**［↑P148］
人口爆発により引き起こされた度重なる食糧危機により、従来の金本位制に依存していた貨幣制度はその信用を失い崩壊寸前となった。
その対応として世界政府は流通する食糧を全て政府統制下におき、従来の貨幣制度を政府食料券（食券）とすることでその信用を回復させた。
単位は「カル」（カロリー）
現在の「カル」は全宙域で流通可能な唯一の通貨の単位となっている

が、「カル」本来の意味を知る人間は今でも皮肉と自戒をこめて「食券」と呼ぶ者が多い。

●人口爆発［↑P148］

人類がウィルスの撲滅に成功し、地殻変動も収束に向かいつつあったころ、女性達の間に多産の傾向が現われはじめた。

先のウィルスによってもたらされた変調という説、人口激減に起因した種絶滅に対する防衛本能、あるいは人類の進化形態の一つとする説など諸説唱えられたが、いずれも可能性の域を出るには至らず、現在も原因は不明のままである。

当初は静観していた政府も異常な人口の増加速度にようやく危機感を抱き人口抑止政策を打ち出したものの時すでに遅く、また口減らしによる殺人なども禁じていた事もあって、増加してゆく人口に歯止めをかけることができなかった。

その結果として貧富の差は一層拡大し、さらには深刻な食糧問題までも引き起こすこととなり、食糧をめぐって各地で争いが勃発（ぼっぱつ）する事態となった。

【す】

●スキルデータ［↑P239］

特定人物の技術や能力を数値化したデータ。

無人機械やシミュレータへロードすることにより、その人物の技量を再現することが可能となる。

●スクリプト［↑P202］

コンピュータに対する一連の命令などを記述したもの。

●スタビライザー［↑P133］

機体安定装置。

高速機動時における振動や動揺を緩和し機体の安定度を高めるシステムで、この働きにより急激な機動変更でも狙ったラインを外すことなくトレースすることができる。

通常は安定度を高めるため機外に露出しているが、非常時には機内へ収納、もしくは切り離しが可能（その場合は安定度が低下することになる）。

●スレーブ族［↑P106］

自機の自立制御によって行動し、シェル・マスター族にリンクされた生存支援システムのデータ収集を行なう情報収集端末機能を備えた無人シェル。

その活動パターンは判断能力強化型の思考コンピュータによって制御され、あたかも有人機かと思えるほどのパーソナリティに満ちた機動を実現する。

また、収集された情報は自機が撃破されることにより次のスレーブ族へと引き継がれてゆく。

【せ】

●星間投資［↑P25］
他星系で流通する独自通貨とのレート差を利用して利益を獲得する通貨運用形態。
投資の際に発行される証券は「デジブ」と呼ばれ、星間デジブを扱う証券会社によって管理・運営される。
レートは各惑星の状態によって日々変動し、長期の天候不良や災害、内戦などが勃発した場合には急落するため、デジブマネージャーは24時間入信してくる各惑星の状況を的確に把握して分析しなければならない。
そのため高給取りの代名詞のように言われているデジブマネージャーではあるが、若くして体を壊す者も多く華やかなイメージと裏腹に非常に過酷な職業のひとつでもある。

●生存支援システム［↑P104］
シェル・スレーブ族と呼ばれる無人の戦闘ロボットを用いて行なわれる成長と死の学習行為を繰り返すことによって、マスター族が通常要する時間と技術を圧縮して短期間に最も効率のよい方策を策定するためのシステム。
判断能力が強化された思考型コンピュータをバックアップとして搭載したシェル・スレーブは、知らない者が見れば有人機と信じて疑わないほどのパーソナリティに満ちた機動を示し、独自の判断で索敵・攻撃・観測を行なう。そうして相手側の最も最適な戦略行動（攻撃／防御パターン）を引き出した後に撃破され、その情報を僚機へ伝達する。
こうしてマスター族にリンクされた複数のスレーブ族は、撃破される事によりマスター族生存のための蓄積データ情報を文字通り身をもって収集、次のシェル・スレーブ族へと引き継いでいく。

●積層ゴルレット鋼［↑P207］
内部可変装甲に用いられる防弾・防護用装甲鋼材。
積層構造のため形状に自由度を持ち、高い防弾能力を発揮する。

●センチュリアン［↑P71］
「ライナーメタリカ」社製の40ミリ多弾機関砲システム。
0・5秒の射撃フェーズ中に、制御されたブレを砲口に発生させながら170発の徹甲弾、徹甲榴弾、曳光弾、吸着化学弾を交互に射出する。
技術的には0・4秒の射撃フェーズまで上げることは可能であるが、銃自身の内部崩壊を招く恐れがあるため、安全マージンを考慮して0・5が選択された。
元々は軍需企業の「ガサムシン重工」が陸軍の大型特殊機動重歩兵「ディ・グローバー」での運用を目的に開発していたが、反動の大きさから「ディ・グローバー」では扱い

きれないことが判明し開発は中止となっていた。
しかし、「シェル」の開発に伴い「バルトライナー」社が仲介役となって「ガサムシン重工」から「ライナーメタリカ」社へその技術が譲渡され、シェル用兵装として開発が再開された。また宇宙空間での運用も考慮され、通常炸薬ではなく電磁レールによる射撃システムが採用されている。
開発コードネームは「ヒステリック・レディ」（いろいろなものが飛んでくるからだそうである）。

●戦闘加速［↑P66］
規定された速度域の区別はなく、敵と相対した際や攻撃をかわすのに必要となる速度域を総称してこう呼ぶ。
また作戦行動に必要な速度域も戦闘加速と呼称される。

●戦闘支援［↑P77］
シェルの戦術支援機能の一つ。
ドライバが戦闘時の操縦や制御に集中できるよう、またドライバの反射神経が追いつけない状況下で、コンピュータが緊急回避制御や射撃支援制御などの戦闘介入を行ないドライバをサポートすること。
モードⅠからモードⅤまで設定可能で、それぞれのモードに応じてシェルの思考型コンピュータが常に最適な戦術介入を行なう。

●洗脳兵［↑P161］
薬物によって思考能力を奪われ、単純な命令の反復のみしかできなくなっている兵士。
恐怖という感情が欠落しているため、躊躇することなく爆弾を抱えたまま敵陣への突撃を敢行できる。
また捕虜になって洗脳された兵士はその体内に爆弾を埋め込まれて敵陣へ送り返され、そこで周りを巻き込んで爆死する。
だが途中で洗脳が解けた兵士や目標を見失った兵士は情報の欠如から次の行動をとることができず、右往左往したまま自爆して死を迎えるだけの存在となる。

●戦列艦［↑P13］
宙軍所属艦艇の中で艦隊戦の中核となる戦闘艦の総称。その中でも砲門数や搭載機関の数や火力によりランクが分けられる。
ちなみにパンジャブやトルフセンは「最上位弩級戦列艦」にランクされる。

【そ】

●装甲兵装［↑P38］
陸軍の特殊部隊が使用する、簡易装甲服。
フェイス部分と関節以外は装甲内部に気泡を有するフリク鋼材で覆われ高い防弾性能と耐熱性を発揮して

いる。内部は耐衝撃性を考慮してバシック材（伸縮緩衝材）が外装と内装の間に挿入されているが、そのため内部蓄積熱の放熱効果が犠牲になっており（熱センサー対策も理由のひとつらしい）、強引な作戦行動などを行なうと内部の人間が脱水症状に陥ることもあるという。そのため兵達からはサウナスーツとも呼ばれている。

●**ソルヴェニ紛争**　［↑P157］

「タナート」星系にある惑星「ソルヴェニ」で勃発した自治政府と反政府ゲリラの半年にわたった局地紛争。

自治政府の要請により地上軍が派遣されたが、「サダモ」自治政府から裏で武器の供給を受けている反政府ゲリラの抵抗は思ったよりも強く、一時的にとはいえ地上軍が劣勢になったときもあった。

しかし物量に勝る地上軍は次第に巻き返し、反政府ゲリラの拠点であるソナボが陥落するとゲリラ達の抵抗は次第に弱っていった。

【た】

●**対空地雷**　［↑P65］

対空センサーによって上空を通過する飛行体に対して発射される対航空機迎撃ミサイルのこと。

近接信管を搭載し（通常信管を搭載したものもある）目標の直近で炸裂することにより145発の小型散弾を放出する。

この小型散弾には遅効信管の組みこまれた粘着弾が使用される事が多く、目標飛行体の外殻に張りついてから爆発する。

●**代替装甲**　［↑P76］

液化セラミックスによって形成された簡易装甲。

電磁フィールドによって形成された鋳型に第3種液化セラミックスを注入・混合することによって形成される。

ただし、あくまでも緊急用の代替であるため強度的には若干劣る。また複雑な形状の物は形成できない。

●**多段ブースタ**　［↑P185］

逐次燃焼段階推進機構を備えた補助加速ブースタのこと。

より強い加速と推進力が得られるが、段階燃焼に関わるシステム機構が複雑化するため、ブースタ本体の大型化は必然であった。そこで、それをシェル搭載用にするため、徹底的にコンパクト化する試みがなされ、大出力と小型化という相反する要求を試行錯誤の末に何とか実現した。ただし小型化された各種ユニットの信頼性を上げるまでにはいたらず、燃焼が安定しない、バランスが取れていない等、数々の問題を残す結果となった。

それでも通常のブースタよりは推力が向上しており、大量の燃料を搭

載できることもあって実験的に採用されている。

【ち】

●チェックメイト［↑P210］
相手の策にはまって機動領域を失い、逃げ場をなくしてしまったシェルドライバに対して用いられる言葉。本来はチェス用語。

●地上支援機［↑P38］
高精度精密爆撃システムやDARK（地上の複数移動目標に対し同時ターゲットロックを行ない多弾頭ミサイルを打ち込むシステム）などにより地上の歩兵部隊の支援を行なうことを目的とする支援戦闘爆撃機。
「マスタレート」社の重戦闘爆撃機「フェリックアタッカー（FA－302）」や「サクリックエアフォース」社の「ギャレリスB－32」戦術支援爆撃機などが有名。

●チャプター64［↑P117］
「マニュアルの64ページ〜」と同義。

●宙間審理会議［↑P14］
宙間運輸管理局によって行なわれる査問会議。
宙間航行規定に違反した艦艇を所有する企業や乗組員に対して行なわれる（被告が軍属の場合は軍法会議にその席が移されるため行なわれることはない）。
査問委員会は省上級官僚や軍部高官（違反内容が軍の作戦行動に抵触している場合）、各分野の有識者によって構成され、必要な場合は参考人の召喚も行なわれる。
ほとんどの場合は違反内容が明確であることから何らかの処分が行なわれることが多く、中には企業の生命線とも言える宙間航行の永久停止処分が下されたこともある。

●宙軍省［↑P143］
宙軍の全作戦行動の責任所在であり、全宙域に展開する宙軍上級司令部の統括機関。
人口爆発により外宇宙へ活動の場を求めた人類の秩序維持と、地球外知的生命体からの防衛を目的として創設された。
現在の主な任務としては、惑星間紛争や反乱軍の鎮圧、他星域への兵力輸送、宙航図の作成、航行安全の監視など、多岐にわたるオペレーションを展開する。
保有戦力では兵員数で地上軍に大きく水をあけられているものの、火力では圧倒的優位に立つ。
組織上は議会配下軍にカテゴリされる宙軍であるがその発言力は強く、時として議会をねじ伏せて強硬な作戦行動を行なう事もある。

●長距離ライフル［↑P206］
超長距離での狙撃（そげき）を目的としたライフルで、「サカイ重工」製の試作

品。

超高速機動兵器に対する有効性を検証する目的で実戦投入された。

実体弾使用の兵装では、現状、最も射程が長い。

開発コードは「MSR－13579」。

●超指向性通信機［↑P51］

ごく限られた一定方向（通常は軍用通信衛星）に向けてのみ発射される、マイクロウェーブを使用した軍用特殊通信機。

送信されるGSPPT規格（軍用の特殊通信規格）のマイクロウェーブは、「ハフマン・ロジック」でエンコードされた暗号信号を270万tbps（tbpsは1秒間に送信可能な文字信号数）で送信することができる。

また使用する周波数帯も常時変動型である。

●超高速徹甲弾［↑P57］

弾の表面を摩擦係数の極めて低い特殊テフライトコーティングとし、弾芯に強化タングス鋼を挿入した敵装甲の破壊・貫通を目的とした徹甲弾。

使用する特殊炸薬も通常より多く、弾の初速を2300m／s以上とし貫通力を通常炸薬使用時の4・5倍まで高めている。現在の陸戦兵器の中では最大級の貫通力を誇る。

【て】

●偵察ポッド［↑P212］

宙域警戒を行なうために射出する小型観測装置。

リモートでの制御が可能。

●データフォルダ［↑P41］

小型携帯記憶端末のこと。

コンピュータのネットワーク端子に接続することでメインフレームからダイレクトにデータを取り出したり、記録データを端末上に表示させたりすることができる。

またデータフォルダ自身にも小型ディスプレイや投射ホログラフが装備されているものもあり、記録データの確認などを行なうこともできる。

●デーモン［↑P107］

操作者とアプリケーション間のインターフェースを司る、コンピュータのオペレーティング支援システム。

高度に複雑化したアプリケーションを実行する際には面倒なパラメータ入力が必要となるため、従来のOSではその入力作業に対応することができなかった。

しかし入力支援OSの登場により、操作者は簡単な操作のみでコンピュータを操作することが可能となったのである。

デーモンの名は20世紀後半から通用。これは、悪魔の姿をしたキャラクターが画面内で動き回ることに由

来している。

●電子的妨害［↑P201］

ジャミングシステムによって通信や索敵走査を意図的に妨害し、攪乱（かくらん）すること。強力なジャミングシステムの場合、有線通信であってさえノイズが入ることがある。

だが最近では対電子妨害システムの開発も進み、ある企業では開発に成功したとの噂もある。

【と】

●導師［↑P82］

「悟りを啓（ひら）き人々を導く指導者」として大司導会（コスメナシス）より派遣され、各惑星や州単位で活動するジーンメジャーにとっての聖者。

遺伝子デザインというテクノロジーによって人工的に進化したジーンメジャーには、既存の宗教観にカテゴリされない独自の根本概念が存在する。

また、いかに優れた肉体や頭脳を持つとはいえ、極めて特殊な進化を遂げたジーンメジャーには常に「種の絶滅」に対する本能的恐怖がつきまとっている。

事実、ジーンメジャー誕生の初期には、その恐怖から暴走する者も少なくなかった。

そこでジーンメジャーという「種」をまとめ、多様性の確保を行ないながらジーンメジャー全体を更なる進化へと導く機関として大司導会（コスメナシス）が創立された。

コスメナシスの本拠は惑星「ムセタ」にあり、最高指導者である7名のサージュヴェーラ（聖導師）のもと、48人のラーサヴェール（大導師）と各地のグル（導師）によってその指導が行なわれている。

コスメナシスへは希望しても入れるものではない。遺伝子ライブラリから厳しい条件を経て選別された優良遺伝子の保持者をさらに選別し、わずかに残った候補の中から厳しい修行に耐えた者だけが、はじめてその資格を得ることができる。

●トーチカ［↑P42］

強化コンクリート樹脂や特殊不壊パネルで円形・方形・六角形などに作られた堅固な防御陣地。

中に機関銃・火砲などを備え敵の接近を阻止する。

●特殊部隊ガブリエル戦隊［↑P40］

勇猛で名を馳（は）せた陸軍大尉エネシー・ガブリエルが指揮をとる陸軍特殊戦隊のこと。

厳しい選別試験に残った特殊部隊員の中から選抜された93名の屈強な兵士で構成され、災害現場での救助活動から施設破壊工作まで幅広い作戦行動を行なう。

隊員達の平均年齢は28歳と他の部隊に比べ4歳ほど若いが、隊の全員

が栄えあるサムロウズ勲章を一度は受けた猛者揃いである。

●ドック管理官［↑P89］

宙港に浮かぶ繋留ドックに出入りする艦艇の誘導や積載貨物のチェック、乗員の入出管理などを担当する第三セクターの職員。

通常は一隻の艦艇に5～10人のグループで担当するが、一人の職員が複数の艦艇を受け持つためその業務内容は多忙を極めている。

【な】

●内部可変装甲［↑P207］

外殻装甲を貫通された場合に展開される防護装甲。

積層ゴルレット鋼の採用により、高い防弾能力を有する。

●内務省［↑P94］

世界政府の行政機関で、軍や地方行政などを統轄する行政の枢軸機関。

●内務省外務二課［↑P94］

世界政府樹立以前に外務省と呼ばれていた行政機関は、統合政府へ移行が完了すると「国交の消滅」を理由に解体された。

しかし惑星移民が進むにつれ自治権を要求する惑星が増加。政府は内務省内に自治政府との調整を行なうための外務部を設立。

現在では対自治政府交渉や条約締結の他に他省間の調整や行政に影響力のあるライナー系企業と政府間の調整なども行なっている。

【に】

●二次モーター［↑P132］

ロケットモーターの第二次燃焼機構のこと。

初期加速を終え燃料を使い切ったミサイルは、標的追尾のための戦闘速度を得るために一次モーターカートリッジを切離し、より強い加速が得られる二次モーターの第二次燃焼へと移行する。

またジャミロ制御される二次モーターはイナーシャルキャンセラーを同時起動するため、二次加速中にもスムーズな目標追尾を行なうことができる。

●二百五十時間のシミュレータ訓練［↑P105］

ギースシッピング社がシェル搭乗員（ドライバ）の習熟を目的として課す基本訓練。

基礎訓練から徐々に機動訓練へと移行し、必要ならば作戦行動のシミュレーションも行なわれる。

またこの間にはシェルドライバとしての適性もチェックされ、訓練期間中に「適性なし」と判断され、契約を破棄された者もいたという。

【ね】

●熱投射弾頭［↑P73］

「サナフス68」と呼ばれる同位重元素を内包した弾頭を臨界まで加熱することによって形成される超高温度放射プラズマ弾。

投射装置から高速で打ち出された弾頭は射出時に「サナフス68」の臨界点まで加熱され、4億2千万度という超高温の放射プラズマ球弾となり、その熱は目標の至近距離を掠めるだけでも一部を融解・蒸発させることができる。

この熱投射弾は直撃はもちろん、至近弾としても非常に効果が期待できるが、放射プラズマは数秒程度しかその熱を持続できないため、超長距離射撃ではその効果があまり期待できない。

また、予備弾装も加熱されているとはいえ次弾が発射可能状態になるまで数秒を要するため、連続した射撃にも不向きである。

●燃焼スピード修正データ［↑P123］

宙域の磁場や重力場、空間に漂う塵や粒子の濃度分布を四次元マップに変換してブースタの燃焼効率を上げる補正データ。

マニュアルでの随時修正も可能で、少々の修正ミスならシェルの演算機能がカバーする。だが燃焼効率を最大限に発揮させる場合には経験と繊細なコントロールが要求される。

【の】

●農業航空パイロット［↑P105］

農作業従事者に代わり農薬散布や収穫物の輸送を行なうパイロット。

個人契約や企業に所属する雇用パイロットなど形態は様々であるが、遺伝子交配により年間を通して作物が栽培されるヴィアネイのような農作業従事者の多い惑星では手堅い職業とされている。

また、農作業に従事する者はそれが契約作業者であっても税制面での優遇措置が受けられるため、人気の高い職業の一つでもある。

●農業用空港［↑P37］

種苗や農作業用機械、収穫物資の搬出などを目的として作られた農作業機専用空港。

個人経営の小規模空港がほとんどであるが、大型コンテナ機離着陸が可能な中規模空港も何箇所か点在している。

小規模空港の場合、施設内には常駐する管制員はおらず、近隣の空港管制官により誘導や離着陸の指示が行なわれる。

空港の周りには、近隣農家が所有する農薬散布用ライトプレーンの格納庫や、メンテナンスを請け負う整備工場、消防署などの施設が集まっていることが多い。

【は】

●パイルドライバー［↑P40］

工事現場などで用いられる巨大な杭打ち機。

●爆雷［↑P134］

空間撒布して目標近くで炸裂させる時限型接近反応機雷。

雷管の反応によりイナフ帯電陽子を崩壊させ、その際に放出される強大なエネルギーを爆発に利用する。

また同時に放出されるP型帯電粒子は磁界連鎖の効果により超高速回転粒子となって周辺の金属に食い込む特性を持つ。

そのため標的が爆雷の直撃を回避しても外殻などには無数の見えない穴が開く結果となり、高速機動や内圧上昇などで簡単に自壊を招くこととなる。

●バルトライナー社［↑P14］

宇宙最速と呼ばれた快速クリッパー「ローヌ・バルト」が役員を務めるジーンライナー系企業。多くの巨大企業を傘下に納め、就航航路数で「ギースシッピング」社と勢力を二分する巨大資本。

史上最速のクリッパー「ローヌ・バルト」を筆頭に多くの「ライナー一族」が宇宙のいたるところで就航している。

現在の会長職には「ローヌ・バルト」の母親「ニナ・バルト」が就任している。

●バルトライナー社調査部［↑P14］

「バルトライナー」社の情報調査部門。

市場調査部第1課～第13課、特殊調査部第1課～第9課まで存在し、それぞれ目的に応じて各支局に設置されている。

調査内容はマーケティングから人材調達活動、裏情報の入手まで、様々な活動がその道のスペシャリスト達によって行なわれ、その技術水準もSIMAC（政府諜報活動局）と同じかそれ以上に高い。

中でもエルウィック支局に属する特殊調査部第9課は一般的には流通しない情報（極秘扱いとなっている情報や裏ルートでしか入手できない情報など）に関しての情報収集活動が主任務であり、諜報部の退役軍人やコンピュータのスペシャリストなどで人員が構成されていることもあって、その正確性は極めて高く、政府諜報活動局から情報提供依頼が来ることさえも珍しくはない。

●パンジャブ［↑P13］

宇宙機甲機動艦隊艦艇の中で最大規模を誇る弩級戦闘艦。

全長2874メートル。大型カーニハン推進機関6基を備え、光速の76%での通常巡航を可能としている。

装甲は4メートル厚の非結晶ガラム鋼をメインとした複合ハニカム3重構造とし、高い防弾能力を実現し

ている。

兵装は1470センチ連装ブラスター48門、870センチ荷粒子振動砲62門、490センチ大型レーザー砲184門に加え、対艦機動ミサイルや対小型機動兵器用パルスレーザー1200基なども装備され、衛星軌道上からの地表砲撃も可能な宙軍機甲艦隊の主軸。

また同艦内には宇宙艦隊方面司令部の指揮・発令所が設置されている。

●反対廻りのアナログ時計 ［↑P8］

自室以外では常に照明が灯されている宇宙船艦内にいると、次第に時間に対する感覚が希薄になる。そのため宇宙船艦内では、デジタル表示の時計よりも、時刻を感覚的に知ることができるアナログ式の時計を好んで使う船乗りが多い。

時間体系は地球標準時間のものが公式として使用され、12時間表示と24時間表示の時計が使用されている。

通常は右回りを標準とするが、好みや用途により左回りの時計を用いる者もいる。

【ひ】

●ビーム兵器 ［↑P206］

「エルマー」社製30ミリパルスビーム砲。

「ローヌ・バルト」にも搭載されているパルスビーム砲をシェルの規格に合わせて小型化。

現行パルスビーム砲の中では最小口径だが、破壊力は旧型の50ミリパルスビーム砲と同等。

エネルギーはシェルの「プラズマ・リンク・ロケットモーター」より供給されるため、多用しすぎるとシェルの活動限界に支障をおよぼしてしまう。

●非光学式センサー ［↑P72］

大気中を伝播する振動や放出される赤外線パターンなどから目標物を感知するセンサー。

光学式センサーに比べ精度は落ちるが、相手のアンチセンサー（敵センサーによる走査を感知するセンサー）に感知される可能性が格段に少ないというメリットがある。

また軍事用観測衛星のサポートを同時に受けることにより、光学式センサーに匹敵する精度を得ることができる。

【ふ】

●VTOL輸送機 ［↑P37］

垂直離着陸が可能な、物資の輸送を目的としたコンテナ機。

長い滑走路を必要とせず、わずかの空き地のみで物資の運搬が可能なため、現在では中型輸送機以下はほとんどがVTOLとなっている。

●ブースタ ［↑P54］

一般的には外部加速器を指すが、

シェルの場合は駆動推進システムである「プラズマ・リンク・ロケットモーター」を指す。

足、肩、腰に装備され、その構成部分のほとんどが巨大なフィンで覆われており出力状況や吹き出す方向によりその形状を変化させる。基本駆動原理はジーンライナー船のプラズマ・ロケットモーターと同じで、推進時にはノズルを貝類の水管のように伸ばし、長いプラズマ炎を後方へ引きながら飛翔（ひしょう）する。

また、その強大な推進力は70トンを超えるシェルを瞬時に戦闘加速状態へと移行させることが可能で、その加速には時として強靭（きょうじん）なシェルの機体ですら耐えられないこともある。

ロケットモーター内部で発動されたエネルギーは機体各部へも供給され、シェルの駆動力としても使用される。ただし、ライナー船のようにエネルギーの自己供給システムを持たないため、そのモーター駆動時間には一定の限界がある。

●**フェイスプレート**［↑P50］

装甲兵装の顔面部分を覆う特殊強化樹脂製のシールドで手動による開閉が可能。

閉じてロックした場合には装甲兵装は簡易気密服となり、有毒ガス発生地帯などでも携帯ボンベの圧搾空気により約1時間程度の気密活動が可能となる。

●**武装クリッパー**［↑P11］

クリッパーと呼ばれる高速長距離巡航が可能な貨物船の中で、オプションとして登録された兵装を備えるジーンライナー船のこと。その登録数は非武装のクリッパーと比べ非常に少ない。

装備される兵装の多くは、自社系列企業で開発されたニューロン光線砲やパルスビームといった、宙軍でも正式採用されているスタンダードな光学系兵器が多い。だが中にはその船でしか採用されていない特殊兵装を装備するクリッパーもある。

元来、争いを好まないとされてきたジーンライナーが一部とはいえ武装していた事実は、人々に大きな衝撃と混乱をもたらしたが、今では暗黙の了解事項として認知されている。

●**物理層**［↑P207］

金属系セラミックス素材を主として構成された、防弾を目的とする外殻装甲部。

化学層との二重層構造のうちの一層。

●**プラズマカートリッジ弾**［↑P131］

光学系兵器の開発を得意とする「バルトライナー」傘下のグループ企業「ダナスカート」社で開発・製造が行なわれている光学系兵器。

中でも「ローヌ・バルト」に搭載

されているカートリッジミサイルは、カートリッジ本体の機動性と追尾精度を向上させている特別製で、「ローヌ・バルト」本人から直接に製造要求が上げられたものである。
キャリアミサイルが目標を捕捉してデータをメモリーすると、本体に格納されているカートリッジを分離。
3ないし5に分離されたカートリッジはそれぞれ進入角度を決定して接近し、目標手前で弾頭内に圧縮したプラズマ球を開放、重力カプセルに閉じ込めたプラズマ弾を拡散させ目標を包み込むように攻撃する。
また、メモリー機能により目標の追尾も可能。
光学兵器とはいえ重力カプセルを使用しているため、プラズマグレイン弾ほどの速度はないが、それでもプラズマ拡散後は一瞬で目標に到達するため、回避には熟練した技術と並外れた反射神経が要求される。

●**フリゲート艦** 〔↑P12〕
現代の軍艦の艦種のひとつ。
近代宙海軍では補助艦艇に属し、敵の攪乱や情報収集、船団護衛、宙域哨戒などに用いられる。
巨大かつ多彩な電子兵器を搭載した、非常に船足の速い快速軍艦。

●**フロー言語** 〔↑P72〕
数式のような、解答を明記しない特殊言語。
ジーンライナーとのコミュニケーションに不可欠であるが、これを操るには特殊な才能が必要なため、一般的にはジーンメジャーがコミュニケーションを担当する。
またシェルのコマンド入力としても用いられ、音声認識の利点を活かした素早い制御を行なうことができる。
訓練次第ではジーンマイナーでもこの言語を扱うことは可能だが誰でもという訳にはいかず、ずば抜けた数式的思考能力と言語能力を有している必要がある。

●**分遣隊長** 〔↑P157〕
本隊から分割編制して派遣された部隊の隊長。

【へ】

●**兵装選択** 〔↑P71〕
兵装の射撃モード(ロック/単発/連射/自動射撃など)や兵装オプションを切り替えるレバー。

●**ペリスコープ** 〔↑P50〕
物陰などから相手の様子を覗うために潜望鏡スタイルに曲げられた展望鏡。

●**ベルタ・ギース** 〔↑P12〕
「ローヌ・バルト」と同級の高速武装クリッパー。ジーンライナーの固有名。「ギースシッピング」社に船籍を置く「彼女」は、「ローヌ・バ

ルト」によって塗り替えられたスピード記録を奪回するために、彼女と同じ航路に就航した。だがいつも僅差で「ローヌ・バルト」に敗れ、ギース一族からは「負け犬」の烙印を押されてしまう。

信用回復に躍起となったギースシッピング社は、やがて「ローヌ・バルト」の航路妨害工作まで行なうようになり、彼女も否応なくその争いに巻き込まれていく。

しかし彼女自身は、記録よりも純粋に「ローヌ・バルト」との競争を望んでいる。

●変調暗号［↑P125］

通信傍受対策から周波数や振幅を常に変えながら送受信される暗号化された搬送信号。

エンコードには「ハフマン・ロジック」が展開されており解読には特殊なキーが必要となる。

【ほ】

●防空軍［↑P37］

制空権維持を目的とした戦術空軍。

世界政府樹立後、仮想敵国の脅威が消滅するに伴い、かつての空軍（戦略航空軍）は規模縮小の一途を辿り、やがて海軍戦略航空部隊として海軍に吸収された。

だが星系外惑星移民が進むに従い惑星内での内紛や政府に対しての独立戦争が度々勃発するにいたり、海軍戦略航空部隊の支援と獲得した制空権の維持を目的として、地上軍の陸軍内部に戦術航空部隊を創設、やがて防空軍として独立し現在に至っている。

●ポート・ヴィアネイ［↑P12］

惑星「ヴィアネイ」の衛星軌道上に位置する整備・繋留ドック、ステーション、小型コロニーや地上連絡施設の総称。

その歴史は古く、人類初の有人探査船を送り出し、その後の移民惑星開発の足がかりとなった巨大ドック「ゲート1」や、「最初のジーンライナー」が帰還した場所としても知られている。

現在ではライナー系企業が資本の7割以上を出資する巨大補給港として機能しており、恒星間貿易の一大中心となっている。また宙間輸送業者や長距離星間バス会社などの企業の多くも専用の整備施設や補給ドックを設営している。

だが多種多様な船が出入りすることもあって違法船や条約違反の物資や動物を輸送する密輸業者も多く、宙軍やヴィアネイ連邦警察による監視も他の宙港に比べて格段に厳しい。特にここ数年は違法ドラッグ（麻薬）の流通がヴィアネイを経由して行なわれている形跡があり麻薬取締局も監視の眼を光らせている。

●ポートブロック［↑P89］

埠頭（ふとう）のこと。

隔壁で仕切られた艦艇の繋留場で、一つのブロックに1～6隻の艦艇が繋留可能。

入庫は、艦艇の接近に伴いトラクターレーザーがポートブロックより照射され、船とのリンクが確認されると誘導信号がレーザーを通じて搬送されるシステムになっている。後は宙港管制側でのコントロールによりポートブロック内へ誘導されアンカーによる固定が行なわれる。

出庫は逆の手順で行なわれ、ポートブロック外へ搬出された後に回頭、出港となる。

●ポート・リヴァアプール［↑P154］

惑星「シャルヴォーク」にある第2スペースポート（宙港）。

通常は惑星に一つの宙港が基本であるが、「シャルヴォーク」は経済拠点として大きな役割を担う関係上、第3スペースポートまで存在する。

基本的には他のスペースポート同様、整備ドックや歓楽街、入管などの役所で構成されている。また、ここにも「バルトライナー」社のローヌ・バルト整備ドックが設置され、船の整備や各種資材の搬入などを行なえるようになっている。

●補助ブースタ［↑P123］

初期運動のプールを目的として使用される補助加速器のこと。

史上最速を誇るシェルとはいえ搭載できる燃料には限りがあり、その活動時間も数十分と短い。

そのため射出後の初期加速には補助ブースタを併用する。

一般的にブースタは、メインブースタ（プラズマ・リンク・ロケットモーター）と、切り離し自在の補助ブースタとで構成されている。電磁カタパルトからの射出直後は、メインブースタに続いて補助ブースタにも点火され、一気に第二巡航速度まで加速していく。

その後、燃料のなくなった補助ブースタは切り離して爆砕され、宇宙の塵（ちり）となる。

【ま】

●マーカランチャー［↑P128］

シェル用のオプション兵装で、マーカとよばれる標識弾を打ち出すランチャー。

射出されたマーカは標的の座標を測定し、状況に合わせた最適な攻撃戦術を決定してジーンライナー船に兵装コンテナの転送要求を送信する。そしてマーカからの転送要求を受けたジーンライナー船は要求された攻撃兵装コンテナを指定座標に空間転移させ、その到着を確認したマーカは兵装コンテナの起動トリガーを引いて攻撃を開始、その後は周辺宙域の警戒にあたる。

ただし、兵装コンテナの転送はジ

ーンライナー船がカーニハン機関起動可能速度に達している場合のみ有効。
ジーンライナー船だけが装備するこの特殊兵装は、転送システムや兵装コンテナも含めると人類史上最も高価な兵器となる。

●マスター／スレーブ率［↑P126］
リンク列機の主従比率でコントロールバランス比のこと。
この主従比率を変動させる事により列機の形態を崩すことなくディフェンスからオフェンスへ、またその逆のオフェンスからディフェンスへのコントロール制御の移行が可能となる。
また、比率を50：50とすることで双方からの同率制御が可能となる（その場合は若干のレスポンス遅延が発生する）。

●マスター族［↑P106］
本来は、シェルとシェルドライバのドライブスキルの一部を指す言葉であった。
が、生存支援システムを搭載したシェル・スレーブ族から送信される、蓄積データを収集する有人シェルを指す言葉ともなっている。
パイロットたちが便宜上、「無人シェルであるスレーブ族に蓄積された、生存スキルデータを収集する」有人シェルを、「マスター族」と呼ぶからである。
マスター族は、スレーブ族の活動データを監視し、必要とあればスレーブ族に対し割り込み制御を行なうことも可能。

●マスター族エンジン［↑P205］
「マスター族」に同じ。

●麻薬取締局［↑P41］
非合法に密売されるドラッグ（麻薬）の取締を行なう検察庁直轄組織。麻薬に関する事件の捜査に関しては警察並の権限が与えられている。
広大な穀倉地帯や人目につきにくい山岳地帯などでは、ガーランやケルス、キュラといったドラッグの原材料となる植物が秘密裏に、しかも大規模に栽培されることが多くなり、しかも普通の農家が栽培する穀物にカモフラージュさせて栽培するといった巧妙な手口が拡大してきているため、麻薬取締局も、衛星などからの監視の眼を光らせている。

【め】

●メインエンジン［↑P117］
カーニハン推進機関のこと。
長距離ワイプシステムであるカーニハン機関を備える恒星間航行システムで、基礎理論設計者「ルール・カーニハン」の名前から命名された。
現在では外宇宙航行艦艇には必ず搭載されている。
その基礎理論は古く、早い時期か

らの実用化にも成功はしていたが、長距離ワイプの際に重力場制御システムが暴走し通常空間へ転移できなくなるという致命的欠陥が長い間解決されずにいた。

だが、最初のジーンライナー帰還によってもたらされた異星のテクノロジーがこの問題をすべて解決。このことによって、人類は本格的恒星間航行の時代を迎えた。

【よ】

●予測戦闘領域［↑P115］

敵戦闘飛翔体の速度と軌道、装備兵装を自機の可能機動領域と照合して算出する、敵戦闘飛翔体との交戦が予想されるであろう領域（エリア）のこと。

自機と敵戦闘飛翔体との軌道相対速度により領域は逐次変化する。

【ら】

●ライアットブラスター［↑P128］

光学散弾砲にカテゴリされるシェルの外部主力兵装の一つ。

慣性重力のバランスを保つため、両手に持って絶えず体の軸線上におかなければならないという制約があるものの、個人機動兵器が装備運用できる兵装の中では最強の破壊力を持つ。

実包は15発の「500カラット・プラズマグレイン弾」と呼ばれる光子弾を内包した光学グレイン散弾で装填可能実包数は9発。

光速で打ち出される光子弾は、狙いさえ外さなければほぼ確実に敵シエルを撃破できる破壊力を持つ。

●ライナー評議会［↑P240］

ジーンライナーで構成される、ジーンライナーのための意思決定機関。

その発言力は強大で、決定された意思に背くことは許されない。

すべて現役を退いたクリッパー達で構成されているらしいが、詳しいことはほとんどわかっていない。

●ライナーメタリカ社［↑P66］

ジーンライナー船の装備一般を開発するライナー系企業。

気密服からライナー船の外装、調理機具に至るまで様々な装備がここで開発・製造されている。

また「バルトライナー」からの依頼により最初にシェルを開発、ロールアウトしたことからもわかるように、非公式ながら、兵器産業にも手を染めている。

しかし経営の上層部がすべてジーンライナー種であり世界政府に対し強い発言権を持っていることから、この事実は世界政府上層部でも暗黙の事項となっている。

●ライフゲーム［↑P120］

自己増殖機能を有したセルオートマトンとよばれる自立型プログラムを用いて作成された生存シミュレー

ションゲーム。

セルオートマトンとは核となる情報ユニットにΛ(ラムダ)ロジックと呼ばれるDNAに似たユニークな情報配列を組み込んだ擬似人格細胞のことで、あたかもパーソナリティを持った生命体のように活動する。

また自己情報保存のための増殖行為（セックス）によって、別のセルオートマトンと情報配列交換を行ないながら増殖し、何度かの増殖を行なった後に自壊する。

その特性から情報配列をパラメタ化し、個人情報を入力することによる行動シミュレーションなどにも用いられている。

【り】

●**リアルタイムのデータリンク**［↑P38］

高密度デジタルPMP信号によって双方向接続を行ないながらデータ通信を行なう技術。

映像メディアの配信会社などで主に利用され、同時多元放送などに用いられている。

比較的大きな装備を必要とされるため、小型化されたモーションカメラなどには標準装備されないことが多く、その場合は後付けのオプションによって機能を実現する。

●**離脱コマンド**［↑P89］

ポートブロックの繋留(けいりゅう)アンカーを解除するためのコマンド。

通常はドック管理官からの指示により発令されるが、非常時に限り緊急回線を通すことにより船側からの制御も可能となっている。

ただし、非常時以外での緊急回線使用は非常に重いペナルティが科せられており、宙間審理会議において企業資産の半分が没収され、指示を出した船長が40年の禁固刑判決を受けた例もある。

●**リンク**［↑P38］

接続の意。

有線、無線を問わず機体同士で情報伝達が行なえる状態を示す。

●**リンクパス**［↑P178］

目的の情報を検索する際に設定される情報検索順路。

リンクを辿(たど)る毎にスワップサーバーによって自動設定され、次回以降はダイレクトに目的の情報を検索することができる。

【れ】

●**レーダー信管**［↑P65］

ターゲットロック時に標的の固有振動データや赤外線パターンを記録し、レーダーセンサーで標的を走査しながら追尾する信管。

高精度なシステムを搭載するためミサイル単価が高くなるが、標的がレーダーの索敵範囲外へ逃げない限り追尾し続けるため命中率は高い。

●**連邦警察**［↑P89］

「ヴィアネイ」全土に跨る大規模犯罪やシンジケートなどの組織犯罪に対応するための警察組織。

州を跨っての捜査を行なう為に強力な捜査権限が与えられ、軍との結び付きも強い。

●**連絡エレベータ**［↑P14］

衛星軌道上に位置する宙港と地上を結ぶ総延長5万キロメートルの直結高速エレベータ。

完全気密で気圧制御された定員57人のコンテナリフトが3分間隔で連続運行されており、片道の所要時間は約47分。24時間運転で、地上のエレベータ周辺施設（ホテルやレストランなど）もそれに合わせて営業している。

かつては地上と宙港の連絡にはシャトルシップを運行させていたが、「シュナップス・メタルエレメント」社が実用化に成功して以降、主要な宙港で次々と採用され、今では辺境の惑星以外はほとんどが連絡エレベータを採用している。

【ろ】

●**ローヌ・バルト**［↑P8］

「バルトライナー社」に船籍をおくジーンライナー船。個体名。

駿足で知られた母「ニナ・バルト」の血統を受け継いだ、「クイーン」の称号を持つ最速の武装クリッパー。

全長850メートルの「生きた」宇宙貨物船。

武装クリッパーとしての装備はレンズ口径3000ミリのニューロン光線砲1基、エルマー社製57ミリパルスビーム砲12基。他にライナー船専用の特殊装備であるマーカランチャー（マーカーポイントへ武器を転送する兵装コンテナ転送システム）なども装備している。

人間で言えばまだ少女の年頃で負けん気が強い。また人間に対して強い興味を示しているようである。

●**論理チェックルーティン**［↑P199］

命令やロジックを処理し、真偽を導き出すための論理回路。

【わ】

●**ワイプ**［↑P125］

空間位相転移航行のこと。

重力場を発生させて空間を歪曲させ、次元の壁を通り越えて目的地へ到達する航法。

現座標と目的座標を、空間を歪曲させることにより隣接させて通り抜けることから、どんな遠距離も瞬時に移動できそうなイメージがあるが、実際は目標座標が遠いほど空間転移に消費されるエネルギーが増大（「ディッヒガルドの法則」と「マカシーの反作用」による）するため、

空間移動距離とワイプ航行時間は比例する関係にある。
　SF小説などには以前から〝ワープ航法〟という名前で登場し夢の航法とされていたが、カーニハン機関の成功により実現した。

●ワイプアウト ［↑P125］
　空間位相転移航行の際に通常空間から亜空間へ転移すること。
　重力場を発生させて空間に歪み(ゆが)を発生させ、そこに発生した亀裂を利用して空間転移を行なう。
　逆に亜空間から通常空間への転移は「ワイプイン」。

シェルブリット Ⅱ

ABRAXAS（アブラクサス）

幾原邦彦（いくはらくにひこ） 永野護（ながのまもる）

角川文庫 17189

平成二十三年十二月二十五日 初版発行

発行者―井上伸一郎

発行所―株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話・編集（〇三）三二三八―八五五五

〒一〇二―八〇七八

発売元―株式会社角川グループパブリッシング

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話・営業（〇三）三二三八―八五二一

〒一〇二―八一七七

http://www.kadokawa.co.jp

印刷所―旭印刷 製本所―BBC

装幀者―杉浦康平

ん 40-2 ISBN978-4-04-100062-5 C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

　第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。
　一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

角川文庫ベストセラー

空の中　有川浩
二〇〇X年、謎の航空機事故が相次ぐ。調査のため高度二万メートルに飛んだ二人が出逢ったのは!? 有川浩が放つ〈自衛隊三部作〉、第二弾！

海の底　有川浩
四月。桜祭りでわく米軍横須賀基地を赤い巨大な甲殻類が襲った！ 潜水艦へ逃げ込んだ自衛官と少年少女の運命は!? 〈自衛隊三部作〉、第三弾!!

塩の街　有川浩
すべての本読みを熱狂させた有川浩のデビュー作!! 「世界とか、救ってみたくない？」塩が埋め尽くす塩害の時代。その一言が男と少女に運命をもたらす。

あたしのマブイ見ませんでしたか　池上永一
沖縄の風習や伝承をモチーフに、現代文学と寓話を美しく融合させた、著者初の短篇集。みずみずしい感性が紡ぐ、切ない八つの物語。

レキオス　池上永一
西暦二千年。米軍から返還された沖縄の荒野に巨大な魔法陣が出現。伝説の地霊レキオスをめぐる激しい攻防と時空を超えて弾け飛ぶ壮大な物語！

シャングリ・ラ (上)(下)　池上永一
21世紀半ば。熱帯化した東京にそびえる巨大積層都市・アトラス建築に秘められた驚愕の謎とは？ 新しい東京の未来像を描き出した傑作長編!!

風車祭（カジマヤー） (上)(下)　池上永一
長生きに執念を燃やすオバァ、盲目の幽霊、六本足の妖怪豚……。沖縄の祭事や伝承の世界と現代のユーモアが交叉するマジックリアリズムの傑作。

角川文庫ベストセラー

角川文庫ベストセラー

GOSICKⅡ
―ゴシック・その罪は名もなき―　桜庭一樹
学園を抜けだし〝灰色狼の村〟にやってきたヴィクトリカと一弥。やがて起こる惨劇が過去への不吉な扉を開く――ふたりの絆が試される第2巻!!

GOSICKⅢ
―ゴシック・青い薔薇の下で―　桜庭一樹
首都の巨大高級デパートで〝人間消失〟!?――事件に巻き込まれた一弥は、風邪で寝込んでいるヴィクトリカに電話で助けを求めるが……。

ネガティブハッピー・チェーンソーエッヂ　滝本竜彦
高校生・山本が出会ったセーラー服の美少女・絵理。彼女が夜な夜な戦うのは、チェーンソーを振り回す不死身の男だった。滝本竜彦デビュー作!

NHKにようこそ!　滝本竜彦
俺が大学を中退したのも、無職なのも、ひきこもりなのも、すべて悪の組織NHKの仕業なのだ! 驚愕のノンストップひきこもりアクション小説!

超人計画　滝本竜彦
ダメ人間ロードを突っ走る自分はこのままでよいのか? いや、己を変えるには超人になるしかない! 脳内彼女レイと手を取り進め超人への道!!

日本以外全部沈没
パニック短篇集　筒井康隆
地殻の大変動で日本列島を除く陸地が海没、押し寄せた世界のセレブに媚びを売られ、日本と日本人は……。痛烈なアイロニーで抉る国家の姿。

陰悩録
リビドー短篇集　筒井康隆
男と女、男と神様、時には男と機械の間ですら交わされる嫌らしくも面白く、滑稽にして神聖な行為。人間の過剰な「性」が溢れる悲喜劇の数々。

角川文庫ベストセラー